

Db2 照会報告書作成プログラム
バージョン **12** リリース **2**
バージョン **12** リリース **2**

QMF サーバーのインストール
および**管理**

IBM

Db2 照会報告書作成プログラム
バージョン **12** リリース **2**
バージョン **12** リリース **2**

QMF サーバーのインストール
および**管理**

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Db2 12 for z/OS (5650-DB2) および IBM Db2 11 for z/OS (5615-DB2) のフィーチャーである IBM Db2 照会報告書作成プログラム (QMF) Enterprise Edition バージョン 12 リリース 2 に適用されます。また、本書は、スタンドアロン IBM Db2 for z/OS ツールである IBM Db2 QMF for z/OS (5697-QM2) バージョン 12 リリース 2 にも適用されます。この情報は、新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GC27-9134-00
Db2 Query Management Facility
Version 12 Release 2
Version 12 Release 2
Installing and Managing QMF Server

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Rocket Software Inc. 2018

目次

表	v
この情報について	vii
この情報の対象読者	vii
保守による更新およびサポートに関する情報	vii
第 1 章 インストールの計画	1
QMF サーバーの概要	1
QMF サーバーシステム要件	1
第 2 章 QMF サーバーのインストール	3
QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストール	3
アプリケーション・サーバーへの QMF サーバーのデプロイ	4
WebSphere 管理コンソールのオープン	4
新規アプリケーションのインストール	4
JDBC ドライバーへのアクセスの構成	5
アプリケーションの始動	7
アプリケーションへのアクセス	7
Java 仮想マシンのシステム・プロパティおよびファイルのカスタマイズ	7
第 3 章 QMF サーバーの使用	11
QMF サーバーについて	11
キャッシング	11
設定	12
一般設定	12
監査システムの設定	13
SMTP および E メールの設定	14
フォント設定の指定	16
グローバル変数を使用した作業	16
JDBC 設定	29
ログ設定	31
出力設定	37
エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定	38
QMF サーバー・レジストリー設定	39
仮想データ・ソース設定の指定	40
JDBC ドライバーとリポジトリ情報のエクスポートおよびインポート	40
「サービス」ビューの使用	42
「リポジトリ」ビューの使用	43
共有リポジトリ・ストレージの作成	45
共有リポジトリの作成	51
DRDA を使用してデータベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続	54
データ・ソース	58
ワークスペースの設定	105
ユーザーおよびユーザー・グループの管理	106
「スケジュール・タスク」ビューの使用	108

スケジュール・タスクの作成	109
アクションおよびアクション・グループの変数の指定	127
スケジュール済みタスクについてのユーザー資格情報の編集	128
スケジュール・タスクのコピー	128
タスクのスケジュール	129
失敗したタスクに関する E メール通知を指定	129
スケジュール・タスクのエクスポートおよびインポート	130
「QMF カタログ」ビューの使用	131
QMF カタログの登録	131
「メモリー使用状況」ビューの使用	138
監査システムの使用	138
監査レコードへのアクセス	139
監査レコード表の読み取り	139
付録 A. アクセシビリティ	145
標準キーボード・ナビゲーション	145
オペレーティング・システムのアクセシビリティ	145
支援技術製品	145
QMF サーバーでのナビゲーション	145

付録 B. QMF オブジェクトのカスタマイズ	147
生成されるサンプル SQL	147
iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルのリスト	147
iSeries に対する EXECUTE 特権の付与	147
オブジェクト・ビュー	148
Q.RAA_OBJ_DIR_X	148
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	149
RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X	149
RDBLADMIN_VIEW	149
RDBI.CATALOG_DIR_X	149
RDBI.AUTHID_VIEW_X	149
SYSIBM.SYSUSERAUTH	149
RDBI.AUTH_TABLE_X	149
Q.RAA_OBJECT_VIEW_X	150
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	150
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	150
RDBI.ADMIN_VIEW	151
RDBI.CATALOG_DIR_X	151
RDBI.AUTHID_VIEW_X	151
RDBI.AUTHID_TABLE_X	151
RDBI.TABLE_VIEW2_X	152
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X	152
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	153
RDBI.ADMIN_VIEW	153
RDBI.AUTHID_VIEW_X	153
RDBI.AUTHID_TABLE_X	153

RDBI.ADMIN_TABLE	153
RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X.	153
RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X	154
RDBL.ADMIN_VIEW.	154
RDBI.AUTHID_VIEW_X	154
RDBI.AUTHID_TABLE_X	154
RDBI.ADMIN_TABLE	155
特記事項.	157
商標	158

製品資料に関するご使用条件	159
プライバシー・ポリシーに関する考慮事項.	159

用語集.	161
---------------------	------------

索引	163
---------------------	------------

表

1. Java 仮想マシン・パラメーター	8	6. AUDIT_RECORDS	141
2. ログ・カテゴリーの名前および説明	32	7. EVENT_TYPES	142
3. serverBidiStringType プロパティおよび clientBidiStringType プロパティのプロパテ ィー値および対応する属性	57	8. EVENT_CATEGORIES	142
4. データ・ソース・タイプ	58	9. EVENT_RESULTS	142
5. AUDIT_VIEW	139	10. EVENT_OBJECT_TYPES 表の構造	142
		11. QUERY_TYPES	143
		12. AUDIT_RECORDS_SQL 表の構造	143

この情報について

本書には、QMF™ サーバー・アプリケーションに関する詳細が記載されています。¹
この情報には、以下の事項に関する説明が含まれています。

- QMF サーバー のインストール
- QMF サーバーを使用して、QMF ユーザー用に作業環境を構成
- リソース使用量を制御するためのリソース限界の設定

本書の最新版については、以下の Db2® and IMS™ Tools Library ページを常にチェックしてください。

www.ibm.com/software/data/db2imstools/db2tools-library.html

この情報の対象読者

この情報は、以下のアプリケーションで構成される Db2 QMF 照会および報告書作成ツール・セットを構成したり保守したりする担当者を対象にしています。

- QMF サーバー
- QMF for Workstation
- QMF for WebSphere®
- QMF Z Client

この情報はユーザーを対象にしていません。

保守による更新およびサポートに関する情報

サービス更新およびサポート情報 (ソフトウェア・フィックスパック、PTF、よくある質問 (FAQ)、技術情報、トラブルシューティング情報、およびダウンロードなど) を検索するには、IBM ソフトウェア・サポート Web サイトを参照してください。

1. 本書を通して、IBM® QMF サーバーは、QMF サーバーと表記します。

第 1 章 インストールの計画

QMF サーバーをインストールする前に、以下のトピックを確認してください。

QMF サーバーの概要

QMF サーバー・アプリケーションは、QMF for Workstation アプリケーション、QMF for WebSphere アプリケーション、および QMF zClient アプリケーションのユーザーにデータへのアクセスを可能にする管理用タスクを実行するために使用されます。

管理者が実行する可能性があるタスクは、以下のとおりです。

- JDBC ドライバーの構成
- リポジトリの作成
- データ・ソース情報の構成
- リソース使用量とユーザー処置を制御するためのリソース限界の設定
- ワークスペースの管理
- ユーザーおよびグループの管理
- スケジュール・タスクの管理

QMF サーバーシステム要件

QMF サーバーをインストールする前に、ご使用の環境が以下の最小要件を満たしていることを確認する必要があります。

QMF サーバーは WebSphere アプリケーションとして、またはスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールできます。QMF サーバーをインストールするには、Enterprise Archive (EAR) ファイルおよび Web Archive (WAR) ファイルを Web アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server など) にデプロイする必要があります。QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールするには、標準 Java アプリケーション・インストール手順に従う必要があります。

ハードウェア要件

- IBM WebSphere V8.5.5 または V9.0、あるいは Apache Tomcat 7 または 8 をサポートするハードウェア構成
- 最小 500 MB のディスク・スペース
- インストールされている各サーバーに最小 1 GB の RAM、および同時ユーザーごとに 50 MB の RAM を追加

ソフトウェア要件

QMF サーバーのソフトウェア要件は、以下のとおりです。

- 以下のいずれかのアプリケーション・サーバー。

- WebSphere Application Server V8.5.5 または WebSphere Application Server V9 (Java 8 を使用)。
- Apache Tomcat V7.0 または V8.0.
- 各クライアント上に以下のいずれかの Web ブラウザー (JavaScript サポートが有効になっている)
 - Google Chrome ブラウザー V50.0.2661.102 以降
 - Mozilla Firefox V47.0.1 以降
 - Microsoft Edge V25.10586.0.0 以降
 - Microsoft Internet Explorer V10 以降
 - Apple Safari ブラウザー V9.0.3 以降

データベース・サーバー

QMF サーバーでは、以下のデータベース・サーバーがサポートされています。

- IBM Db2 LUW
- IBM Db2 for z/OS
- IBM BigSQL
- Microsoft SQL Server
- MySQL
- IBM Netezza
- Oracle データベース
- PostgreSQL
- Red Brick
- SolidDB
- Teradata

前提条件

以下の QMF サーバー機能にはソフトウェア依存関係があります。

- データベース接続では、アクセスされる RDBMS のタイプごとに適切な JDBC ドライバーが必要です。
- 結果セットを Excel にエクスポートするために必要な最小レベルは、Excel 2003 です。
- QMF サーバーは、JRE V8 がスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールされていることを必要とします。

第 2 章 QMF サーバーのインストール

QMF サーバーを Web アプリケーションとしてインストールするには、対応する EAR ファイルと WAR ファイルをアプリケーション・サーバーにデプロイする必要があります。QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールするには、標準 Java アプリケーション・インストール手順に従う必要があります。

QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストール

QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールするには、標準 Java アプリケーション・インストール手順に従う必要があります。

このタスクについて

QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストールするには、以下の手順に従ってください。

手順

1. コマンド行に `java -jar <file>` と入力します。<file> は、インストール・ファイル (`QMFServerSetup122.jar`) の絶対パスです。

注: QMF サーバーをサイレント・モードでインストールするには、コマンド `java -jar <file> -s` を実行します。<file> は、インストール・ファイル (`QMFServerInstaller.jar`) の絶対パスです。以下の手順はスキップしてください。

2. QMF サーバーをインストールするフォルダーの絶対パスを入力します。

注: 選択したフォルダーが空ではない場合、空にするよう指示されます。

3. サーバーのラベルを入力します。この名前は QMF クライアントで、QMF サーバー・レジストリーによって提供される使用可能なサーバーのリストに表示されます。
4. サーバーへのアクセスに必要となるログインおよびパスワードを入力します。
5. **HTTP API** サービスおよび **QMF Registry** サービスのポートを入力します。これらの 2 つのサービスは、同じポートを使用します。指定したポートが他のサービスまたはアプリケーションによって使用されていないことを確認してください。

注: デフォルトで、**QMF Z Client** サービスおよび **JDBC** サービスのポート情報が指定されています。**QMF Z Client** サービスはポート 9001 を使用し、**JDBC** サービスはポート 1527 を使用します。

6. Enter を押して、インストール・プロセスを終了します。

注: インストール中に指定した情報はすべて、`qmfserver.properties` ファイルに保存されています。デフォルトで、このファイルは `Application Data\IBM\QMF Server\Settings` に保管されています。

タスクの結果

QMF サーバーが正常にインストールされました。ここで、製品をユーザー用に構成してください。

QMF サーバーを Windows オペレーティング・システム上で始動または停止するには、`startServer.cmd` または `stopServer.cmd <port>` をコマンド行に入力してください。<port> は、HTTP API サービスと QMF Registry サービスによって使用されているポートの番号です。

QMF サーバーを Linux または z/OS 上で始動または停止するには、`sh startServer.sh` または `sh stopServer.sh <port>` をコマンド行に入力してください。<port> は、HTTP API サービスと QMF Registry サービスによって使用されているポートの番号です。

アプリケーション・サーバーへの QMF サーバーのデプロイ

インストール・メディアには、サーバーの管理コンソールを使って即時に Web アプリケーション・サーバーに配置できる Enterprise Archive (EAR) ファイルおよび Web Archive (WAR) ファイルが組み込まれています。

WebSphere 管理コンソールのオープン

クライアント・マシンで Web ブラウザーを開き、適切な URL を入力して、WebSphere 管理コンソールを開始します。

デフォルトでは、`http://host:port/ibm/console` という URL を使用します。*host* は WAS サーバーのホスト名で、*port* は管理コンソールが listen するように構成されているポートです (デフォルトは 9080)。

新規アプリケーションのインストール

新規アプリケーションをインストールするには、以下の手順を実行します。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「アプリケーション (Applications)」を展開します。
2. 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」をクリックします。「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「アプリケーションのインストールの準備」ページが表示されます。
3. 「アプリケーションのインストールの準備」の最初のページでは、インストールする QMF サーバー EAR ファイルの場所を指定します。
 - QMF サーバー EAR ファイルがローカル・マシン上にある場合は、「ローカル・ファイル・システム (Local file system)」をクリックします。「参照」ボタンを使用してファイルを検索し、見つけます。

- ファイルが WAS サーバー・マシン上にある場合は、「リモート・ファイル・システム (Remote file system)」をクリックします。「参照」ボタンを使用してファイルを検索し、見つけます。
- 4. QMF サーバー EAR ファイルを使用してインストールする場合、アプリケーションのデフォルト・コンテキスト・ルートは常に QMFServer122 です。何らかの理由でアプリケーションの代替コンテキスト・ルートを指定する必要がある場合は、インストール用に QMF サーバー WAR ファイルを使用し、「コンテキスト・ルート」フィールドに代替コンテキスト・ルートを入力し、プロンプトに従ってインストールを完了します。
- 5. 「次へ」をクリックします。「アプリケーションのインストールの準備」の 2 ページ目が開きます。
- 6. 「デフォルトのバインドを生成する」をクリックします。
- 7. 「次へ」をクリックします。「ステップ 1: インストール・オプションの選択」ページが開きます。
- 8. 「Web サービスのデプロイ (Deploy Web Services)」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていないことを確認し、「次へ」をクリックします。「ステップ 2: サーバーへのモジュールのマップ」ページが開きます。
- 9. デフォルト値を受け入れて、「次へ」をクリックします。「ステップ 3: Web モジュール用の仮想ホストのマップ」ページが開きます。
- 10. QMF サーバーのモジュールに対してリストされているアプリケーション・サーバーの名前に留意して、「次へ」をクリックします。
- 11. QMF サーバー・アプリケーションに対して qmfadmin という名前のセキュリティー役割をマップするかどうかを指定します。WebSphere セキュリティーを有効にしている場合、少なくとも 1 つのユーザー ID をこの役割にマップすることが必要です。パッケージのバインドといった QMF のさまざまな管理作業を実行する前には、qmfadmin 役割を使用してユーザーの認証が行われます。このページでは、役割をすべてのユーザーにマップするか (役割に対する認証が事実上行われなくなります)、認証されているすべてのユーザーにマップするか (認証済みのユーザーは QMF の管理機能を実行できます)、または指定したユーザーまたはグループだけにマップするかを指定します。
- 12. 「次へ」をクリックします。
- 13. 選択したオプションのリストが表示されるサマリー・ページを確認し、「終了」をクリックします。
- 14. WAS によるアプリケーションのインストールが終了したら、構成を保存します。インストールの進行状況およびアプリケーションのインストール完了について通知する、メッセージ・ダイアログが表示されます。「エンタープライズ・アプリケーション」ページが開きます。
- 15. 「マスター構成への保存」をクリックして、「保存」をクリックします。

JDBC ドライバーへのアクセスの構成

WebSphere 管理コンソールを使用して構成する必要がある最後の要素は、QMF サーバー が使用する JDBC ドライバーに対するアクセスの設定です。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「サーバー (**Servers**)」を展開します。
2. 「アプリケーション・サーバー (**Application Servers**)」をクリックします。
「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「Application Servers」ページが表示されます。
3. アプリケーション・サーバーの表示リストで、QMF サーバー アプリケーションをインストールしたアプリケーション・サーバーをクリックします。 アプリケーション・サーバーのプロパティーが表示されます。
4. 「サーバー・インフラストラクチャー (**Server Infrastructure**)」の下の「**JAVA** およびプロセス管理 (**JAVA and Process Management**)」を展開します。「プロセス定義」をクリックします。「プロセス定義 (Process Definition)」ページが表示されます。
5. z/OS® の場合、「**ProcessType**」リストから「サーバント」をクリックします。「プロセス定義 (Process Definition)」ページが表示されます。
6. 「追加プロパティー」リストで、「**Java** 仮想マシン」をクリックします。「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」ページが表示されます。
7. 「クラスパス (**Classpath**)」リストで、QMF サーバー が使用する JDBC ドライバーに必要なすべての *.zip ファイルまたは *.jar ファイルを追加します。
例えば、Microsoft Windows で Db2 Universal Database V8 Type 4 ドライバーを使用する場合は、次のファイルを入力します。

```
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥db2jcc.jar  
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥db2java.zip  
C:¥Program Files¥ibm¥SQLLib¥Java¥sqlj.zip
```

z/OS で Type 4 ドライバーを使用する場合は、次のファイルを入力します。

```
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc.jar  
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc_license_cisuz.jar  
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/db2jcc_javax.jar  
/usr/lpp/db2810/jcc/classes/sqlj.zip
```

8. z/OS 以外のプラットフォームの場合、ステップ 11 にスキップできます。
z/OS の場合、JDBC ドライバーが使用する固有のコード・ライブラリーを含むディレクトリーのリストを指定する必要があります。「サーバー」に戻り、「追加プロパティー」リストから「カスタム・プロパティー」を選択します。「カスタム・プロパティー (Custom Properties)」ページが表示されます。
9. 「新規」ボタンをクリックします。「構成」ページが開きます。
10. 「一般プロパティー」リストの「名前」フィールドに「LIBPATH」としてライブラリー・パス名を指定し、「値」フィールドにディレクトリー・リストを指定します。例えば、「値」フィールドには次のように指定できます。

```
/usr/lpp/db2810/lib  
/usr/lpp/db2810/jcc/lib
```

11. 必要なファイルの追加が終了したら、「**OK**」をクリックして、構成を保存します。構成を保存したら、サーバーを再始動して変更を有効にする必要があります。

アプリケーションの始動

新規アプリケーションを始動するには、以下の手順を実行します。

このタスクについて

「管理コンソール」ウィンドウの左側のナビゲーション・ツリーで以下の手順を実行します。

手順

1. 「アプリケーション (**Applications**)」を展開します。
2. 「エンタープライズ・アプリケーション (**Enterprise Applications**)」をクリックします。「管理コンソール」ウィンドウの右側に、「エンタープライズ・アプリケーション」ページが表示されます。
3. インストールされているアプリケーションの表示リストで、「QMF サーバー」の隣にあるチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
4. 「開始」をクリックします。アプリケーションが使用可能になります。

アプリケーションへのアクセス

完了すると、以下の URL を使用して QMF サーバー にアクセスできるはずですが (QMFServer122 の推奨コンテキスト・ルートを使用していると想定)。

QMF サーバー アプリケーションを起動するための URL:

`http(s)://[server]:[port]/[ContextRoot]/user`

例: `http://www.ibm.com:9080/QMFServer122/server`

Java 仮想マシンのシステム・プロパティおよびファイルのカスタマイズ

QMF サーバーのシステム・プロパティおよびファイルを保存するために (特にクラスター・ノード間でアプリケーション設定およびその他のフォルダーを共有し、ユーザー・セッションのタイムアウトを設定するようにクラスターを構成する場合に)、Java 仮想マシンのシステム・プロパティおよびファイルを指定できます。

このタスクについて

デフォルトでは、すべての QMF サーバー・システム・プロパティおよびファイルがホーム・ディレクトリー (`user.home` Java 仮想マシン・システム・プロパティにあるパス) に保管されます。ただし、`qmf.instance.area.global`、`qmf.instance.area.shared`、または `qmf.instance.area` のいずれかの Java 仮想マシン・システム・プロパティを使用して、ファイルを保管するディレクトリーをカスタマイズできます。

ユーザーがアプリケーションでの作業を行っていないときにセッションを閉じるように、ユーザー・セッションのタイムアウトを指定したい場合は、`qmf.use.session.timeout` パラメーターを使用してください。

クラスター・モードで仮想データ・ソースを処理する際に発生する可能性のあるエラーを回避するには、QMF サーバーの `VirtualDataSource.dir` パラメーターを使用します。

下表で、使用可能なパラメーターについて説明します。

表 1. Java 仮想マシン・パラメーター

パラメーター	説明	保管されるファイル
<code>qmf.instance.area.global</code>	このプロパティは、複数のクラスター・ノードに分散されているフォルダーに関与します。サーバー構成ファイル、スケジュール済みタスク、およびパーソナル・リポジトリを保管するために使用します。このパラメーターが設定されていないと、 <code>qmf.instance.area</code> の設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> リポジトリ接続データ (<code>repositories.xml</code>) JDBC ドライバー・プロパティ (<code>.bi.jdbc.drivers</code>) ライセンス・ファイル キャッシュ・ファイル
<code>qmf.instance.area.shared</code>	このプロパティは、複数のクラスター・ノードで共有されているアプリケーション・フォルダーに関与します。このパラメーターが設定されていないと、 <code>qmf.instance.area</code> の設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> ログ・ファイル セッション・データ: <ul style="list-style-type: none"> ユーザー設定 ユーザー大域変数 ログインおよびパスワード
<code>qmf.instance.area</code>	このプロパティは、一時ファイルの保管に関与します。このパラメーターを設定しない場合は、 <code>java.io.tmpdir</code> Java 仮想マシン・システム・プロパティからの設定が適用されます。	<ul style="list-style-type: none"> 一時ファイル
<code>qmf.use.session.timeout</code>	このプロパティは、ユーザー・セッションのタイムアウトに関与します。 <code>true</code> に設定した場合は、サーバーで指定された HTTP セッション・タイムアウト後にユーザー・セッションが閉じられます。 <code>false</code> に設定した場合、または定義しない場合、ユーザーがアプリケーションを閉じるまでセッションはアクティブです。	-
<code>VirtualDataSource.dir</code>	仮想データ・ソース・キャッシュを含むサブフォルダーの名前を指定します。クラスター・ノードごとに、個々のサブフォルダーとそれぞれのファイルおよびディレクトリ (キャッシュを含む) が生成されます。 <code>VirtualDataSource.dir</code> プロパティは、各クラスター・ノードの固有値を指定する必要があります。	-

システム・プロパティおよびファイルを保存するための特定パスを指定するには、以下のようにします。

手順

1. クライアント・マシンで Web ブラウザーを開き、適切な URL を入力して、WebSphere 管理コンソールを開始します。
2. 「プロセス定義」にナビゲートし、Java 仮想マシンの「カスタム・プロパティ」で、変更したいパラメーターに応じて、必要なプロパティ `qmf.instance.area.global`、`qmf.instance.area.shared`、`qmf.instance.area`、または `qmf.use.session.timeout` を追加します。
3. 追加したパラメーターを保存します。

第 3 章 QMF サーバーの使用

以下のトピックで、QMF サーバー・アプリケーションの操作について説明します。

QMF サーバーについて

QMF サーバーは、QMF ソリューションのコア・コンポーネントです。

現行リリース以降、既存のアーキテクチャーに加えて、QMF ソリューションに新しい 3 層アーキテクチャーが導入されます。この新しいアーキテクチャーによって、QMF クライアント・コンポーネントはデータ・ソースおよびリポジトリに、直接ではなく、共通 QMF サーバー・コンポーネントを介してアクセスできます。さらに、QMF サーバーを使用すると、リポジトリ・ストレージ、リポジトリ、および QMF カタログを構成でき、データ・ソースを作成および管理でき、QMF クライアント・コンポーネント用の QMF サービスおよび API を管理でき、リポジトリ・ユーザーやワークスペースなどを管理できます。

このようなアーキテクチャーには、以下の主な利点があります。

- QMF 管理者は、クライアントを個別に構成する必要はありません。必要になるのは、1 つの共通 QMF サーバーの構成だけです。クライアントは、QMF サーバーの存在を検出し、そのサーバーに接続するよう、それら自体を自動的に構成します。
- QMF サーバーは、可能な限りデータの近くに配置できるため、セキュリティとパフォーマンスの向上が実現します。

現時点で、以下の QMF クライアント・コンポーネントが、新しい QMF サーバーをサポートしています。

- QMF for Workstation
- QMF for WebSphere
- QMF Z Client

キャッシング

QMF では、キャッシングはアプリケーションのパフォーマンスを向上させる機能である一方、データの関連性に影響を与えます。

以下のエンティティのキャッシング機能を構成できます。

- リポジトリ
- リレーショナル・データ・ソース
- 仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソース

リポジトリ・キャッシュ

リポジトリのキャッシングを構成すると、アプリケーションは、すべての

オブジェクトおよびメタデータを含め、そのリポジトリの内容を、Web サーバー上に保存します。リポジトリ・キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされます。

リポジトリ・キャッシュはまた、アプリケーションを終了するとクリアされます。他の QMF エンティティのキャッシュは、アプリケーションを終了してもクリアされません。

リレーショナル・データ・ソース・キャッシュ

データ・ソースのキャッシングを構成すると、そのデータ・ソース内の表からのデータがキャッシュに保存されるため、ユーザーはデータベースに直接アクセスすることなく、このデータで作業を行うことができます。キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされます。

仮想データ・ソース・キャッシュおよび **JavaScript** データ・ソース・キャッシュ
仮想データ・ソースまたは **JavaScript** データ・ソースのキャッシングを構成すると、そのデータ・ソース内の表からのレコードがキャッシュに保存されるため、ユーザーはデータベースに直接アクセスすることなく、この表の内容で作業を行うことができます。仮想データ・ソース・キャッシュまたは **JavaScript** データ・ソース・キャッシュは、時間制限を超過するとクリアされ、定期的に更新できます。これは、スケジュールに従って実行されます。これが、キャッシュ更新のデフォルト・オプションになります。再構成するには、「設定」ウィンドウの「仮想データ・ソース」ページを使用します。

設定

「設定」ダイアログは、特定の QMF オブジェクトおよび機能に適用されるユーザー設定を行うために使用されます。

「設定」ウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左ペインには設定グループのリストが表示され、右ペインには選択したグループのページが表示されます。以下の設定グループが、「設定」ウィンドウに表示されます。

一般設定

「設定」ウィンドウの「一般」ページを使用して、言語およびロケールの設定を指定します。

このタスクについて

QMF アプリケーション現行セッションの一般ユーザー設定を指定するには:

手順

1. 「設定」 > 「一般」をクリックします。
2. 「言語」リストから、現在のアプリケーション・セッションに使用する言語を選択します。「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。
3. 「数値、通貨、時刻、および日付のロケール設定 (**Locale setting for numbers, currencies, times, and dates**)」リストから、現在の QMF アプリケーション・セッションで数値、通貨、時刻、および日付の表示に使用する言語を選択します。「自動」を選択すると、現行マシンのローカル言語が使用されます。

4. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
5. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
6. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

監査システムの設定

「設定」ウィンドウの「監査」ページを使用して、QMF の監査システムを使用可能にして構成します。

このタスクについて

監査システムを使用可能にして構成するには、以下のようになります。

手順

1. 「設定」 > 「監査」を選択します。
2. 「監査を有効にする」チェック・ボックスを選択します。
3. 失敗したイベントのみを記録するように監査システムを設定するには、「失敗したイベントのみ記録する (**Record failed events only**)」チェック・ボックスを選択します。
4. 「バックアップ間隔 (日数) (**Backup interval (days)**)」フィールドに、データベース・バックアップ・ファイルの作成頻度を定義する時間間隔を指定します。

注: バックアップ・ファイルが作成されると、元のデータベースはクリアされます。

5. 「(日数) より古いすべてのバックアップ・ファイルを削除 (**Delete all backup files older than (days)**)」フィールドに、削除するデータベース・バックアップ・ファイルの経過日数を指定します。
6. 「ユーザーの **SQL** ステートメントを記録する (**Record SQL statements for users**)」チェック・ボックスを選択して、データベースに対する照会のためにユーザーが作成した **SQL** ステートメントを記録するように監査システムを設定します。
 - すべてのユーザーが作成した **SQL** ステートメントを記録するには、「すべてのユーザー (**All Users**)」を選択します。
 - 「ユーザーの指定 **...(Specify Users...)**」ボタンをクリックして「データ・ソース・ユーザー」ダイアログを開き、特定のユーザーを指定します。変更を受け入れる場合は「OK」をクリックし、変更を保存せずにダイアログを終了する場合は「キャンセル」をクリックします。
7. 「適用」をクリックして設定を適用し、ページに留まるか、「OK」をクリックして設定を適用し、ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

監査が有効になると、監査システムによって収集されたすべての情報が H2 データベース内の **AUDIT** スキーマの下の表に保存されます。このデータベースは、アプリケーション・データ・フォルダーに作成されます。すべての表の要約情報が **AUDIT_VIEW** 表に表示されます。監査レコードの読み取りについては、138 ページの『監査システムの使用』を参照してください。

SMTP および E メールの設定

「設定」ウィンドウの「E メール」ページを使用して、使用可能な SMTP サーバーと、アプリケーションからの E メール通知のリストを指定します。

このタスクについて

これ以降のトピックで、SMTP サーバー設定を指定する方法と、スケジュール済みタスクからの E メール通知を設定する方法について説明します。

SMTP サーバー設定

「設定」ウィンドウの「SMTP」領域を使用して、使用可能な SMTP サーバーのリストを指定します。

このタスクについて

一般的に使用される SMTP サーバーのパラメーターを「SMTP」領域に定義しておくこと、ユーザーが当該サーバーを使用して E メール・メッセージを送信する必要があるたびにそれらのパラメーターを指定する必要がなくなります。例えば、SMTP サーバーのパスワードの有効期限が切れた場合、「SMTP」領域でパスワードを 1 回変更するだけで済み、その SMTP サーバーを使用するすべてのオブジェクトの許可情報を更新する必要はありません。

「SMTP」領域にリストされたサーバーは、スケジュール済みタスクを処理するとき使用できます。

SMTP サーバー設定を指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「設定」 > 「E メール」を選択し、「SMTP」領域にナビゲートします。
2. 「サーバーの追加」をクリックして、新規サーバーをリストに追加します。
3. 「SMTP」ウィンドウで、SMTP サーバーの名前、アドレス、ポート番号などの SMTP サーバーのパラメーターを指定します。
4. オプション: SMTP サーバーで認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、「ユーザー」および「パスワード」フィールドにユーザー名とパスワードを指定します。
5. オプション: アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。
6. 「OK」をクリックして「SMTP」ウィンドウを閉じてから、「適用」をクリックして設定の選択内容を保存します。

ヒント: SMTP 設定を一括して制御するには、「有効」チェック・ボックスを選択するかクリアします。

7. オプション: デフォルト設定を復元する必要がある場合は、「デフォルトの復元」をクリックします。
8. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

E メール通知設定の指定

失敗したスケジュール・タスクに関して、デバッグ情報と一緒に送信される E メール通知のリストを一括して構成することができます。この情報は、スケジュール・タスクに関する問題を早急に修正するのに役立ちます。

このタスクについて

E メール通知を構成するには、以下のようにします。

手順

1. 「設定」 > 「E メール」をクリックします。
 2. 「E メール通知」領域で、「通知の追加」をクリックして通知を送信するための構成を追加します。
 3. 「E メール通知設定」ウィンドウで、通知の名前を「名前」フィールドに入力します。
 4. 「メッセージ・プロパティ」領域で、以下の設定を指定します。
 - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
 - E メールを送信する必要がある送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
 - E メールの写しを送信する必要がある送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
 - E メールを送信する必要がある送信元アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
 5. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
 - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストからサーバーを選択します。または「サーバーの追加」をクリックして SMTP サーバーを作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされるキーワードを追加できます。
「OK」をクリックします。
- 「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。
6. 「OK」をクリックして、指定した通知設定を保存します。指定した通知が「E メール通知」領域に表示されます。これで、「スケジュール・タスク」ビューで特定のタスクに対して選択できるようになりました。

ヒント: 通知を一括して制御するには、「有効」チェック・ボックスを選択するかクリアします。

フォント設定の指定

QMF for Workstation を使用している場合、「設定」ウィンドウの「フォント」ページを使用して、報告書をエクスポートする際に使用されるフォントを指定します。

このタスクについて

フォント設定を指定するには、以下の手順に従ってください。

手順

1. 「設定」 > 「フォント」をクリックします。
2. 報告書をエクスポートする際に使用するフォントのセットを構成するには、「検索ディレクトリー」フィールドを使用して、フォントが保管されているフォルダーのパスを指定し、「関連の最新表示」をクリックします。
3. デフォルト・フォントに戻すには、「デフォルトに戻す」をクリックしてください。

グローバル変数を使用した作業

グローバル変数は、QMF の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、書式、プロシージャー) の実行中にのみアクティブである置換変数とは対照的です。

置換変数を使用するオブジェクトの場合、値はオブジェクトの実行時にウィンドウで入力します。オブジェクトの実行後、変数および使用した値は残りません。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

グローバル変数には、2 つのタイプがあります。

- システム・グローバル変数は、QMF アプリケーションにプリロードされています。つまり、その値は QMF アプリケーションをオープンするたびに再初期化されます。システム・グローバル変数は、DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP という文字列で始まります。システム・グローバル変数は、追加または削除することはできません。ただし、システム・グローバル変数のデフォルト値を編集することは可能です。
- ユーザー・グローバル変数はユーザーが定義します。ユーザー・グローバル変数には、文字 DSQQW、DSQAO、DSQEC、DSQDC、および DSQCP で始まる名前を除いて、任意の固有の名前を指定できます。ユーザー大域変数の値は、現行セッションの間だけ使用することも、永続的に使用することもできます。QMF クライアント・コンポーネントを使用して、ユーザー・グローバル変数を処理します。

「設定」ウィンドウの「グローバル変数」ページを使用して、システム・グローバル変数の値を編集できます。

DSQQW グローバル変数

DSQQW で始まる名前のグローバル変数は、現行の照会環境に関する情報を提供します。

現在、以下の DSQQW グローバル変数が使用可能です。

名前	長さ	説明
DSQQW_AUTOMATION	1	アプリケーションが自動化サーバーとして始動したかどうかを示します。
DSQQW_CONNECTIONS	1	プロシージャーの実行中にデータベース・サーバー接続の使用を制御します。値は接続数を最小化するにはゼロ (0)、RUN QUERY コマンドごとに新しい接続を許可するには (1) です。値 0 を指定すると、分散製品は、プロシージャーの実行を続行する前にデータ・オブジェクトを強制的にリセットまたは完了します。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_DQ	1	二重引用符の値。この変数を照会とプロシージャーに使用することにより、ユーザーがテキスト値と一緒に引用符を入力する必要がなくなります。デフォルト値は二重引用符です。
DSQQW_EXP_DT_FRMT	1	プロシージャー内で EXPORT DATA コマンドでデータをエクスポートするときに使用する形式。以下の値を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • 0: テキスト形式 • 2: HTML 形式 • 3: CSV 形式 • 4: IXF 形式 • 5: dBASE III ファイル • 6: 形状ファイル形式 • 7: WQML 形式 • 8: XML 形式 • 9: PDF 形式 • 10: XLS 形式 • 11: XLSX 形式
DSQQW_EXP_OUT_MDE	1	IXF ファイルにデータをエクスポートするときに使用する IXF バリエーション。値は、System/370 文字モード IXF の場合は 0、PC/IXF の場合は 1 です。デフォルト値は 1 です。

名前	長さ	説明
DSQQW_FST_SV_DATA	1	プロシージャ内で SAVE DATA コマンドによりデータを保存するときの「高速モード」の使用を制御します。通常保存モード (高速モードではない) を使用する場合は値を 0 に、ORDER BY 文節を除去して高速モードを使用する場合は値を 1 に、ORDER BY 文節を保持して高速モードを使用する場合は値を 2 にできます。デフォルト値はゼロ (0) です。
DSQQW_HTML_REFTEXT	55	&REF 変数を使用するときに報告書に表示されるテキスト。デフォルト値は「戻る」です。
DSQQW_ORIENTATION	0	アプリケーションの方向。左から右への方向の場合、値は 0 です。右から左への方向の場合、値は 1 です。
DSQQW_PROC_FAIL_ON_ERROR	1	プロシージャ・コマンドの失敗があった場合にプロシージャの実行を停止します。プロシージャを続行する場合は値を 0 にします。プロシージャを停止する場合は値を 1 にします。
DSQQW_PROC_OUTPUT		プロシージャの出力ファイル名。
DSQQW_PROC_WNDWS	1	プロシージャを実行することで作成された中間結果ウィンドウに対する処理を制御します。値が 0 の場合、プロシージャの終了時には、すべての中間ウィンドウが閉じられ、最終結果ウィンドウのみが開かれたままになります。値が 1 の場合、プロシージャの終了時には、すべてのウィンドウが開かれたままになります。値が 2 の場合、すべての中間ウィンドウが閉じられ、プロシージャ・ウィンドウも閉じられます (プロシージャを別のプロシージャから、またはコマンド行から間接的に実行している場合)。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_QUERY_LANG	1	DISPLAY QUERY コマンドが実行されても照会オブジェクトが存在しない場合に作成される照会のサブタイプを指定します。値は、SQL ビューの照会の場合には 0、指示照会ビューの照会の場合には 1 です。デフォルト値は 0 です。

名前	長さ	説明
DSQQW_QUERY_PREP	1	RUN コマンドでの照会を準備するか、実行するかを指定します。準備された照会の結果は、ユーザーのワークステーションには返されません。値は、照会を準備する場合は 0、照会を実行する場合は 1 です。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_QUERY_PRESERVE_SORT	1	これは、ユーザーが定義した照会ソート順序が照会内に保管されて照会実行のたびに使用されるのかどうかを指定します。値は 0 (ソート順序を保持しない) または 1 (ソート順序を保持する) にすることができます。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_REUSE_OBJS	1	検索されたオブジェクトを表示している既存のウィンドウを再使用するかどうか、またはオブジェクトを選択するたびに新しいウィンドウを開くかどうかを指定します。常にオブジェクトを新しいウィンドウで開く場合には値をゼロ 0 にし、選択されたオブジェクトが既に開かれている場合には既存のウィンドウをアクティブにするには 1 にします。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_RPT_COPIES	10	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに印刷する部数を指定します。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_RPT_FONT	55	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するフォント字体名を指定します。デフォルト値は "Monospaced" です。
DSQQW_RPT_FONT_BD	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するフォントの太字属性を指定します。値は、太字にしない場合は 0、太字にする場合は 1 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_FONT_CS	3	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するフォントの文字セットを指定します。デフォルト値は 0 です。

名前	長さ	説明
DSQQW_RPT_FONT_IT	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するフォントのイタリック属性を指定します。値は、イタリックにしない場合は 0、イタリックにする場合は 1 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_FONT_SZ	2	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するフォントのポイント・サイズを指定します。デフォルト値は 10 です。
DSQQW_RPT_LEN_TYP	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するとき、または EXPORT REPORT コマンドにより報告書をエクスポートするときのページ長のタイプを指定します。値は印刷ページに自動的に長さを合わせる場合は 0、明示的な行数を指定する場合は 1、ページの切れ目なしに連続した報告書を指定する場合は 2 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_NUM_CHR	10	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するとき、または EXPORT REPORT コマンドにより報告書をエクスポートするときに印刷ページの幅に合わせる文字数を指定します。この値は、DSQQW_RPT_WID_TYP が 1 の場合にのみ有効です。デフォルト値は 80 です。
DSQQW_RPT_NUM_LNS	10	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するとき、または EXPORT REPORT コマンドにより報告書をエクスポートするときに印刷ページの長さに合わせる行数を指定します。この値は、DSQQW_RPT_LEN_TYP が 1 の場合にのみ有効です。デフォルト値は 60 です。
DSQQW_RPT_ORIENT	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するとき、または EXPORT REPORT コマンドにより報告書をエクスポートするときに使用するページの向きを指定します。値は、縦長の場合は 0、横長の場合は 1 です。デフォルト値は 0 です。

名前	長さ	説明
DSQQW_RPT_OUT_TYP	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用する書式を指定します。値は、テキストの場合は 0、HTML の場合は 2 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_TD_TYP	1	TD 編集コードの日付形式。値は、ISO 形式の場合は 0、USA 形式の場合は 1、EUR 形式の場合は 2、JIS 形式の場合は 3 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_TT_TYP	1	TT 編集コードの時刻形式。値は、ISO 形式の場合は 0、USA 形式の場合は 1、EUR 形式の場合は 2、JIS 形式の場合は 3 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_RPT_USE_PS	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときに使用するページ・フォーマット・オプション (ページ長、ページ幅など) を指定します。値は PRINT REPORT コマンドまたはグローバル変数に指定された値を使用する場合は 0、書式のページ設定で指定した値を使用する場合は 1 になります。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_RPT_WID_TYP	1	プロシージャ内で PRINT REPORT コマンドにより報告書を印刷するときのページ幅のタイプを指定します。値は、印刷ページに自動的に幅を合わせるときは 0、明示的な文字数を指定する場合は 1、ページの切れ目なしに連続した行数を指定する場合は 2 です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_SHOW_QUERY	1	SHOW QUERY コマンドがプロシージャから発行されたときに表示する照会のビューを指定します。値は 0 (SQL または指示照会ビューの場合)、1 (結果ビューの場合)、2 (作成ビューの場合)、または 3 (レイアウト・ビューの場合) にすることができます。デフォルト値は 0 です。

名前	長さ	説明
DSQQW_SQ	1	単一引用符の値。この変数を照会とプロシージャに使用することにより、ユーザーがテキスト値と一緒に引用符を入力する必要がなくなります。デフォルト値は単一引用符 (") です。
DSQQW_SV_DATA_C_S	10	プロシージャ内で SAVE DATA コマンドによりデータを保存するときに、作業単位をコミットするまでに挿入する行数。値はすべての行で 0 または明示的な行数です。デフォルト値は 0 です。
DSQQW_SV_DATA_T_M	1	SAVE DATA コマンド使用時に、ソース列とターゲット列のデータ・タイプをどのように一致させるかを指定します。値は、厳密なデータ・タイプの一致を必要とする場合は 0、データ損失のないデータ・タイプ変換を許可する場合は 1、データベースでサポートされているデータ・タイプ変換をすべて許可する場合は 2 です。デフォルト値は 1 です。
DSQQW_UEDIT_JAR	55	ユーザー編集ルーチンが含まれている JAVA アーカイブ・ファイルの名前。

DSQAO グローバル変数

DSQAO で始まる名前のグローバル変数は、現行の照会セッションの状態に関する情報を提供します。

以下の DSQAO グローバル変数が使用可能です。

名前	長さ	説明
DSQAO_BATCH	1	バッチ・モードまたは対話モード。値は、対話セッションの場合は 1、バッチ・セッションの場合は 2 になります。BATCH コマンド行パラメーターを参照してください。
DSQAO_CONNECT_ID	8	現在のデータベースへの接続に使用されるユーザー ID。
DSQAO_CURSOR_OPEN	1	現在の照会オブジェクトのデータベース・カーソルの状況。値はカーソルがオープンしている場合は 1、クローズしている場合は 2 になります。
DSQAO_DBCS	1	DBCS サポート状況。値は DBCS をサポートしている場合は 1、サポートしていない場合は 2 になります。

名前	長さ	説明
DSQAO_HOME_WORKSPACE	128	<p>現行リポジトリ・ユーザーのホーム・ワークスペース・キー (ワークスペースがある場合)。有効な値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> rsbi:/.workspaces/<user name> <p>ユーザーが保護されたりリポジトリ接続に接続した場合、および rsbi:/.workspaces/<user name> オブジェクトがそのリポジトリ内の現行ユーザーから可視である場合は、これが値となります。<user name> はリポジトリ・ユーザーのログイン名です。</p> <ul style="list-style-type: none"> rsbi:/.workspaces <p>ユーザーがセキュリティーのないリポジトリ接続に接続した場合、rsbi:/.workspaces/<user name> がユーザーから可視でない場合、または同値が存在しない場合は、これが値となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> blank <p>上記の状態が該当しない場合は、これが値となります。例えば、ユーザーがどのリポジトリ接続にも接続していない場合などが考えられます。</p> <p>注: 現行ユーザーが実行したワークスペース操作 (作成、削除、名前変更など) は、グローバル変数の値に影響を与えます。また、このような操作を他のユーザーが実行した場合も、値に影響を与える可能性があります。</p>
DSQAO_NLF_LANG	1	セッションの各国語。 値は英語の場合「E」です。
DSQAO_NUM_FETCHED	0	現在の照会オブジェクトで取り出された行数。
DSQAO_OBJ_NAME	18	現在の照会、書式、プロシージャ・オブジェクトの名前。現行オブジェクトがない場合、値はブランクになります。
DSQAO_OBJ_OWNER	8	現在の照会、書式、プロシージャ・オブジェクトの所有者。 現行オブジェクトがない場合、値はブランクになります。
DSQAO_REP_USER	8	現行リポジトリへの接続に使用するユーザー名。
DSQAO_RSBI_RELEASE	2	アプリケーションのリリース番号。
DSQAO_RSBI_VER_RLS	10	アプリケーションの外部バージョン番号およびリリース番号。
DSQAO_QUERY_MODEL	1	現在の照会オブジェクトのモデル。 値は、リレーショナルの場合は 1 です。

名前	長さ	説明
DSQAO_QRY_SUBTYPE	1	現在の照会オブジェクトのサブタイプ。値は、SQL 照会の場合には 1、指示照会ビューの照会の場合には 3 です。
DSQAO_SYSTEM_ID	1	現在のオペレーティング・システム。これは、以下の値のいずれかになります。 <ul style="list-style-type: none"> • 8 - Windows NT 以上 • 9 - Linux • 10 - HP-UX • 11 - AIX® • 12 - Solaris • 13 - iSeries • 14 - z/OS

DSQEC グローバル変数

DSQEC で始まる名前のグローバル変数は、コマンドおよびプロシーチャーの実行方法を制御します。

以下の DSQEC グローバル変数が使用可能です。

名前	長さ	説明
DSQEC_CON_ACC_RES	1	アプリケーションが Db2 for z/OS にサブミットする実行可能 SELECT 照会でこの変数を使用すると、選択するデータが挿入、更新、または削除操作によってロックされている場合に、データベースを処理する方法を指定できます。この変数を設定すると、SELECT 照会の PREPARE ステートメントの concurrent-access-resolution 属性で変数値に関連付けられた文節がアプリケーションによって指定されます。実行可能 SELECT 照会は、照会 (SQL SELECT 照会、指示照会、QBE P. 照会など) の結果となるだけでなく、他の操作 (DISPLAY TABLE など) の結果となる場合もあります。値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 - 処理中の SQL SELECT ステートメントに関連付けられた PREPARE ステートメントで、同時アクセス解決のオプションが指定されません。これがデフォルト値です。 • 1 - SKIP LOCKED DATA。この値は、Db2 for z/OS バージョン 9 以降に送信される実行可能 SELECT ステートメントに対して指定できます。 • 2 - USE CURRENTLY COMMITTED。この値は、DB2® for z/OS バージョン 10 以降に送信される実行可能 SELECT ステートメントに対して指定できます。 • 3 - WAIT FOR OUTCOME。この値は、Db2 for z/OS バージョン 10 以降に送信される実行可能 SELECT ステートメントに対して指定できます。

名前	長さ	説明
DSQEC_CURR_FOLDER	128	この変数は、QMF カタログ内のフォルダーにあるオブジェクトへのリンクをグループ化するために使用します。値は、Db2 データベースの LIST コマンド、SAVE コマンド、および ERASE コマンドの FOLDER パラメーターのデフォルト値として使用されます。長さは 128 文字まで可能です。この変数のデフォルトはブランクです。LIST コマンド、SAVE コマンド、ERASE コマンドにフォルダーは使用されません。
DSQEC_EXTND_STG	31	QMF for TSO の拡張ストレージにデータがスピルした場合に、アプリケーションが拡張ストレージ・マネージャーに要求するたびに獲得する拡張ストレージの容量 (メガバイト数) を指定します。拡張ストレージを必要とする操作をユーザーが実行すると、その操作が完了するか拡張ストレージを使い果たすまで、アプリケーションは拡張ストレージ・マネージャーに対して指定容量を求める要求を繰り返し発行します。このグローバル変数を設定する場合は、ユーザーが扱う DATA オブジェクトの平均サイズを考慮してください。平均サイズが非常に大きい場合に DSQEC_EXTND_STG 変数の設定値が小さすぎると、アプリケーションは DATA オブジェクトの完了までに拡張ストレージ・マネージャーを何度も呼び出さなければならないため、全般的なパフォーマンスに影響する可能性があります。設定できる値の範囲は 1 から 1000 までです。デフォルト値は 25 で、これはアプリケーションが要求ごとに 25 MB のストレージを要求することを示します。
DSQEC_FORM_LANG	1	書式が保存またはエクスポートされるデフォルトの NLF 言語を定義します。値は、メインの NLF 言語の場合は 0、英語の場合は 1 です。デフォルト値は 1 です。
DSQEC_LAST_RUN	1	Q.OBJECT_DIRECTORY 表の LAST_USED 列を更新するコマンド・セットを指定します。値は以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 - 任意のアクティビティで LAST_USED 列が更新されません。 • 1 - RUN、SAVE、または IMPORT コマンドの実行時に LAST_USED 列が更新されます。
DSQEC_LIST_OWNER	128	LIST コマンドの OWNER パラメーターに対してデフォルト値を提供します。128 文字までの許可 ID を指定してください。この変数は、デフォルトでは空白であり、現在の許可 ID が所有するオブジェクトのリストが表示されます。変数値には選択記号を使用できます。単一文字の代わりに下線 () を使用し、ゼロ以上の文字の代わりに % 記号を使用してください。例えば、以下のコマンドを発行した後に LIST コマンドを発行すると、アプリケーションは、文字 RO で始まるユーザー ID が所有するオブジェクトのみをリストします。 <p>SET GLOBAL (DSQEC_LIST_OWNER=R0%以下のコマンドは、デフォルトの所有者を、I で始まり、2 桁目と残りの桁に任意の文字を持つユーザー ID に設定します。</p> <p>SET GLOBAL (DSQEC_LIST_OWNER=I_%</p>

名前	長さ	説明
DSQEC_NLFCMD_LANG	1	プロシージャ内のコマンドに必要な NLF 言語を定義します。値は、メインの NLF 言語の場合は 0、英語の場合は 1 です。デフォルト値は 0 です。
DSQEC_RESET_RPT	1	パフォーマンスに影響を与える不完全なデータ・オブジェクトが見つかった場合に、ユーザーにプロンプトを表示するかどうかを指定します。値は、プロンプトを表示せずにデータ・オブジェクトを完了する場合は 0、データ・オブジェクトを完了するかどうかを確認するプロンプトを表示する場合は 1、プロンプトを表示せずにデータ・オブジェクトをリセットする場合は 2 です。
DSQEC_RUN_MQ	1	<p>RUN QUERY コマンドが SQL 照会内の複数のステートメントをサポートするかどうかを指定します。指定可能な値は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 - 複数の SQL ステートメントはサポートされません。 <p>この変数を 0 に設定し、複数のステートメントを含む SQL 照会を実行すると、アプリケーションは最初のセミコロンより後のステートメントをすべて無視します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 - 複数の SQL ステートメントがサポートされます。 <p>これがデフォルト値です。</p> <p>セミコロンは、各ステートメントの末尾に付けることができます。</p> <p>SQL テキストの先頭に SET STATEMENT DELIMITER コメントを使用すると、セミコロンの代わりに別の文字を使用できます。以下に、複数のステートメントを持つ SQL の有効な使用例を示します。</p> <pre>--SET STATEMENT DELIMITER="!" select * from q.staff! select * from q.org</pre>
DSQEC_SAV_ACCELDB	128	表の保存に使用するアクセラレーター・データベースの名前を指定します。
DSQEC_SAV_ACCELNM	128	SAVE DATA コマンド、IMPORT TABLE コマンド、および RUN QUERY コマンド (TABLE キーワードを指定) からアクセラレーター専用表を作成するときに使用するアクセラレーターのデフォルト名が含まれています。この変数は、照会加速が使用可能であり、ACCELERATOR キーワードが指定されていない場合にのみ参照されます。DSQEC_SAV_ALLOWED グローバル変数の値が 2、4、または 5 に設定されていない場合、このグローバル変数はブランクのままにできます。

名前	長さ	説明
DSQEC_SAV_ALLOWED	1	<p>このフィールドは、ユーザーが SAVE DATA コマンド、IMPORT TABLE コマンド、および RUN QUERY コマンド (TABLE キーワードを指定) を使用して、データをデータベース表またはアクセラレーター表のいずれに保存できるかを指定します。このグローバル変数で使用可能な値は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 - ユーザーはデータを一切保存できないことを指定します。 • 1 - ユーザーはデータベース表にのみデータを保存できることを指定します。デフォルトでは、この値が選択済みになっています。 • 2 - ユーザーはアクセラレーター表にのみデータを保存できることを指定します。このオプションを選択する場合、DSQEC_SAV_ACCELNM グローバル変数には、デフォルトで使用するアクセラレーターの名前が含まれていなければなりません。DSQEC_SAV_ACCELNM グローバル変数は ACCELERATOR キーワードで上書きすることができます。アクセラレーター専用表を複数のアクセラレーターにコピーすることはできません。 • 3 - ユーザーはデータをデータベース表またはアクセラレーター表のいずれかに保存できることを指定します。SPACE や ACCEL などのコマンド・キーワードの指定変更がない場合、データはデータベース表に保存されます。 • 4 - ユーザーはデータをデータベース表またはアクセラレーター表のいずれかに保存できることを指定します。SPACE や ACCELERATOR などのコマンド・キーワードの指定変更がない場合、データはアクセラレーターに保存されます。このオプションを選択する場合、DSQEC_SAV_ACCELNM グローバル変数には、デフォルトで使用するアクセラレーターの名前が含まれていなければなりません。 • 5 - ユーザーはデータをアクセラレーター・シャドー表に保存できることを指定します。これらの表はデータベースに保存されますが、加速されたデータ読み取り照会もサポートしているため、アクセラレーターにも保存できます。このオプションを選択する場合、DSQEC_SAV_ACCELNM グローバル変数には、使用するアクセラレーターの名前が含まれていなければなりません。アクセラレーター・シャドー表は複数のアクセラレーターにコピーできます。
DSQEC_SHARE	1	<p>保存されたオブジェクトを他のユーザーと共有するかどうかのデフォルト値を指定します。値は、オブジェクトを共有しない場合は 0、オブジェクトを共有する場合は 1 です。</p>
DSQEC_SP_RS_NUM	1	<p>ストアード・プロシージャについて表示される結果セットの番号を指定します。デフォルトの結果セット番号は -1 です。</p>

名前	長さ	説明
DSQEC_SQLQRYSZ_2M	1	<p>長さが 32,767 バイト (32 KB) を超える SQL 照会を RUN QUERY コマンドがサポートするかどうかを制御します。値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 - Db2 for iSeries または Db2 for z/OS、Db2 for Linux, UNIX, and Windows データベースに送信される SQL 照会は、32,767 バイト (32 KB) までに制限されます。これがデフォルトです。 • 1 - SQL 照会は、32 KB を超えても構いません。サポートされる照会の最大サイズは、照会が送信される先のデータベースのタイプによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> - Db2 for z/OS に送信される照会の最大長は 2 MB です。 - DB2 for iSeries または Db2 for Linux、UNIX、および Windows に送信される照会の最大長は 65 KB です。 <p>これらの最大サイズは、RUN QUERY コマンドの送信先のデータベースのバージョンがこのサイズの照会をサポートしていることを前提としています。DB2 for VM/VSE に送信される SQL 照会は、8 KB までに制限されます。</p>

DSQDC グローバル変数

DSQDC で始まる名前のグローバル変数は、情報の表示方法を制御します。

以下の DSQDC グローバル変数が使用可能です。

名前	長さ	説明
DSQDC_COL_LABELS	1	標準報告書の列見出しに列名とデータベース・ラベルのどちらを表示するかを指定します。値は、列見出しに列名を表示する場合は 0、列見出しにデータベース・ラベルを表示する場合は 1 です。デフォルト値は 1 です。
DSQDC_CURRENCY	18	DC 編集コードが指定されたときに使用するカスタム通貨記号を定義します。
DSQDC_DISPLAY_RPT	1	プロシージャ内の RUN QUERY コマンドの後に報告書を表示するかどうかを指定します。値は報告書を表示しない場合は 0、自動的にデフォルト書式で報告書を表示する場合は 1 です。デフォルト値は 0 です。
DSQDC_POS_SQLCODE	1	<p>データベースから正の SQL コードが返された場合にどうなるかを指定します。値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 - メッセージのログ記録もメッセージ・テキストの表示も行いません。 • 1 - SQL コードに関連付けられたメッセージをログに記録します。 • 2 - SQL コードに関連付けられたオンライン・ヘルプを表示します。

DSQCP グローバル変数

DSQCP で始まる名前のグローバル変数は、表エディターの操作を制御します。

以下の DSQCP グローバル変数が使用可能です。

名前	長さ	説明
DSQCP_TEDFLT	1	列のデフォルト値を示すために表エディターで 사용되는予約文字を定義します。デフォルト値は "+" です。この変数は、「設定」ウィンドウの「デフォルト値の入力」フィールドでも設定できません。
DSQCP_TENULL	1	列のヌル値を示すために表エディターで 사용되는予約文字を定義します。デフォルト値は "-" です。この変数は、「設定」ウィンドウの「NULL 値の入力」フィールドでも設定できます。

システム・グローバル変数値の編集

「設定」ダイアログの「グローバル変数」ページを使用して、任意のシステム・グローバル変数値を編集できます。

このタスクについて

システム・グローバル変数値を編集するには:

手順

1. 「設定」 > 「グローバル変数」をクリックします。
2. システム・グローバル変数は「変数」リストに名前順にリストされています。システム・グローバル変数は、**DSQQW**、**DSQAO**、**DSQEC**、**DSQDC**、または **DSQCP** という接頭部で始まります。

制約事項: 名前が **DSQAO** で始まるシステム・グローバル変数は編集できません。

3. 現行システム・グローバル変数値が「値」フィールドにリストされます。グローバル変数の値を編集するには、変更するシステム・グローバル変数の「値」フィールドをクリックします。「値」フィールドにシステム・グローバル変数の新しい値を入力します。
4. すべてのシステム・グローバル変数のデフォルト値を復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
5. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
6. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

JDBC 設定

「設定」ウィンドウの「JDBC ライブラリー」を使用して、JDBC ドライバー情報を設定できます。

このタスクについて

QMF サーバー・アドミニストレーターは、ユーザーがすべてのデータ・ソースにアクセスするのに必要な JDBC ドライバー情報を配布します。

上級者は、「設定」ウィンドウの「JDBC ライブラリー」ページを使用して JDBC ドライバーのロケーション情報を定義または変更することにより、アクセスされるデータベースのタイプ (Db2、Informix[®]、Oracle など) ごとに JDBC ドライバー情報を指定することがあります。JDBC ドライバー・ロケーションが QMF からアクセス可能になっていることが必要です。QMF は JDBC ドライバー情報を保持します。新しいドライバーを追加、または既存ドライバーのプロパティーを変更するには、この指定プロセスを繰り返すだけで行うことができます。

JDBC ドライバー情報を定義するには:

手順

1. 「設定」 > 「JDBC ライブラリー」をクリックします。「設定」ウィンドウの「JDBC ライブラリー」ページが開きます。既にセットアップしたすべての JDBC ドライバー・ライブラリーが、「JDBC ドライバー・ライブラリー」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関連付けられた JAR ファイルが「ドライバー・ファイル」領域にリストされます。選択したドライバー・ライブラリーに関する追加情報が「詳細」パネルに表示されます。
2. 新規 JDBC ドライバーを追加するには、「ドライバーの追加」を選択します。「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウが開きます。
3. データベースのタイプごとの JDBC ドライバー情報は、ライブラリー単位で編成されます。ライブラリーの名前を「新規ライブラリー名の入力」フィールドに入力します。ライブラリーに含める JDBC 情報を表す名前を指定することをお勧めします。例えば、Db2 データベースのアクセス用に JDBC ドライバー情報を追加している場合は、ライブラリーに Db2 という名前と付けることができます。ただし、これは記述フィールドであり、あらゆるテキストを使用できます。
4. 使用するドライバー・クラスの実際の名前を「ドライバー・クラス名」フィールドに指定します。これは JDBC ドライバーの資料に記されています。例えば、com.ibm.db2.jcc.DB2Driver などです。
5. オプション: データベースへの接続に利用可能な正しい形式の URL の汎用例を、「URL テンプレート」フィールドに指定します。例えば、Db2 データベースにアクセスするための JDBC ドライバー情報を追加する場合は、JDBC URL テンプレート jdbc:db2://host:50000/database を指定します。テンプレートに指定された汎用情報は、データ・ソースをリポジトリーに追加するとき、に表示されます。汎用情報を特定のデータベース情報に置き換えます。
6. 「OK」をクリックしてドライバー・ライブラリーを作成し、「新規ドライバー・ライブラリーの追加」ウィンドウを閉じます。
7. JDBC ドライバー・ファイルをライブラリーに追加します。「ドライバー・ファイルの追加」をクリックします。「ファイルを開く」ダイアログで、「追加」をクリックして、追加する JDBC ドライバー・ファイルのパスを指定します。それから「OK」をクリックします。
8. JDBC ドライバー情報には、以下のような変更を行うことができます。

- JDBC ドライバー・ライブラリー情報を編集するには、リストから既存の JDBC ドライバー・ライブラリーを選択し、「ドライバーの編集」をクリックします。「ドライバー・ライブラリーの編集」ウィンドウが開き、ここで「ライブラリー名」、「ドライバー・クラス名」、および「JDBC URL テンプレート」フィールドを変更することができます。
 - JDBC ドライバー・ライブラリーを除去するには、既存の JDBC ドライバー・ライブラリーをリストから選択して、「ドライバーの削除」をクリックします。ライブラリーと、その中にある JAR ファイルがすべて除去されます。
 - JDBC ドライバー・ライブラリーから JAR ファイルを削除するには、リストから既存のファイルを選択し、「ドライバー・ファイルの削除」をクリックします。ファイルが除去されます。
9. 「OK」をクリックします。JDBC ライブラリー情報が保存されます。「設定」ウィンドウが閉じます。Informix または SQL Server などのさまざまなデータベース・データ・ソースにアクセスするために使用される JDBC ドライバーのそれぞれのタイプについて、このプロセスを繰り返す必要があります。

ログ設定

「設定」ウィンドウの「ログ」ページを使用して、QMF 処理情報を追跡するためのログ・ファイルをアクティブにします。

このタスクについて

ログ・ファイル情報はデバッグに役立ちます。

QMF セッションのログ・ファイル設定を指定するには:

手順

1. 「設定」 > 「ログ」をクリックします。
2. デバッグの目的でログ・ファイルをアクティブにするには、「ログを使用可能にする」にチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスを選択すると、ログ・ファイル・オプション・フィールドが使用可能になります。どの情報を収集するかを指示するには、1 つ以上のログ・ファイル・オプションにチェック・マークを付けます。すべてのオプションに、チェック・マークを付けたままにしておくことをお勧めします。選択可能なログ・ファイル・オプションは、以下のとおりです。
 - ログ例外のスタック・トレースを印刷
 - ログ・クラスおよびメソッドの印刷
 - ログ・ユーザー・トークンの印刷
3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
5. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

例

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明

名前	説明
log	これはルート・カテゴリです。
log.api	このカテゴリは、API 呼び出しに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。Java クラス API からの情報がこのカテゴリに追加されます。
log.api.qmfwin	このカテゴリは、QMF API 呼び出しに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。
log.audit	このカテゴリは、監査システムに関連するメッセージまたは例外をログに記録します。
log.cache	このカテゴリは、照会結果キャッシュの例外およびメッセージをログに記録します。
log.calculator	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトで使用される計算機の処理をログに記録します。
log.canvas	このカテゴリは、キャンバスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.config	このカテゴリは、構成情報の読み取りまたは書き込みをログに記録します。
log.context_service	このカテゴリは、リポジトリ・コンテキストのサービスをログに記録します。
log.database	このカテゴリは、データベース・アクセス操作およびデータベースでの処理をログに記録します。
log.database.common_errors	このカテゴリは、データベース・アクセス・レイヤーで発生する各種エラーをログに記録します。
log.database.connection_pool_ex	このカテゴリは、データベース接続プールの操作をログに記録します。
log.database.connections	このカテゴリは、接続管理に関する情報をログに記録します。
log.database.descriptors	このカテゴリは、サーバー記述子情報をログに記録します。
log.database.drda	このカテゴリは、Db2 DRDA ドライバーの処理をログに記録します。
log.database.driver	このカテゴリは、JDBC ドライバー・メッセージをログに記録し、JDBC ライブラリー・ローダーを記録します。
log.database.driverloader	このカテゴリは、JDBC ドライバー・ライブラリー・クラス・ローダーからの情報をログに記録します。これは log.database.driver と組み合わせて使用します。

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.database.edit	このカテゴリは表の編集操作をログに記録します。
log.database.jdbc	このカテゴリは、動的 SQL 照会の実行をログに記録します。
log.database.sqlj	このカテゴリは、静的 SQL パッケージおよびストアード・プロシージャの実行をログに記録します。
log.design_view	このカテゴリは、デザイン・ビューに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode	このカテゴリは、分析照会の表示モードに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode.chart	このカテゴリは、図表表示モードに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.displayMode.scenario	このカテゴリは、ドリルダウン・パスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.drda_service	このカテゴリは、QMF JDBC サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.environment	このカテゴリは、アプリケーションの環境情報をログに記録します。
log.exception	このカテゴリは、表示される例外をログに記録します。
log.export	このカテゴリは、Excel へのエクスポートに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.forecast	このカテゴリは、予測に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.formula	このカテゴリは、計算列で使用される公式に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.grid	このカテゴリは、照会結果グリッドに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.importer	このカテゴリは、インポート操作の情報をログに記録します。
log.install	このカテゴリは、ストアード・プロシージャのインストール・プロセスをログに記録します。

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.install.customizer	このカテゴリは、パッケージのカスタマイズをログに記録します。このカテゴリは Db2 システムにのみ適しています。これは、カスタマイズの進行中に外部 SQL プロファイルの処理をログに記録するためです。
log.job_scheduler	
log.js	このカテゴリは、すべての JavaScript 機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_api	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードのシーン・スクリプトに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_metadatalayer	このカテゴリは、JavaScript 表に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_modules	このカテゴリは、JavaScript モジュールに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.js.js_procedures	このカテゴリは、JavaScript プロシージャに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.legacy_converter	このカテゴリは、インポート時にレガシー・オブジェクトをビジュアル・プロジェクトに変換するユーティリティーの実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.license	このカテゴリは、製品ライセンスに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.limits	このカテゴリは、リソース限界に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.limits.editor	このカテゴリは、リソース限界エディターに関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.mailer	このカテゴリは、E メールによるアプリケーションからのデータの送信に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.messages	このカテゴリは、ユーザーに表示されるメッセージをログに記録します。
log.metadatalayer	このカテゴリは、仮想データ・ソースの一般機能をログに記録します。
log.metadatalayer.optimize	このカテゴリは、仮想データ・ソースの最適化システムをログに記録します。
log.metadatalayer.scheduling	このカテゴリは、仮想データ・ソースのスケジューラーの処理をログに記録します。

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.net	このカテゴリは、サーバーとクライアント間の通信に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.net_activity	このカテゴリは、サーバーとクライアントが交換するデータの量をログに記録します。
log.olap_core_logger_category	このカテゴリは、XMLA 照会および XMLA エディターの処理をログに記録します。
log.procedureDesigner	このカテゴリは、デザイン・モードでのプロシージャの処理に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.prompt_hierarchy	このカテゴリは、プロンプト階層に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.prompts	このカテゴリは、プロンプトに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qds	このカテゴリは、QMF データ・サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qmf	このカテゴリは、QMF オブジェクトの問題をログに記録します。
log.qmfz	このカテゴリは、QMF Z Client サービスに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.qmf.command_processor	このカテゴリは、プロシージャ情報をログに記録します。
log.qmf_server_registry	このカテゴリは、QMF サーバー・レジストリーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.queryEngine	このカテゴリは、照会に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine localQueryEngine	このカテゴリは、照会のローカル部分に関するサーバー関連の実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine localQueryEngine.localQEWarnings	このカテゴリは、リソース限界の警告に関連する実行時例外およびメッセージをログに記録します。
log.queryEngine localQueryEngine.storedProcedures	このカテゴリは使用されません。
log.queryEngine.remoteQEServer	このカテゴリは、照会のリモート部分に関するサーバー関連の実行時例外およびメッセージをログに記録します。

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.queryEngine.remoteQEServer QERequestResponseServer	このカテゴリは、ネットワークまたは Web サービス接続の場合に照会のリモート部分とローカル部分の間で行われる要求および応答をログに記録します。
log.quick_report	このカテゴリは、即時報告書に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.report designer	このカテゴリは、デザイン・モードのビジュアル・プロジェクトのイベントをログに記録します。
log.reporter	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト・モジュールに表示される例外およびメッセージをログに記録します。
log.reporter.reporter_data_cache	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトの照会結果のキャッシュ処理をログに記録します。
log.reporter.reporter_mobile_viewer	このカテゴリは、モバイル・デバイス (iPad など) からの接続を処理するモジュールをログに記録します。
log.reporter.reporter_maps	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトのマップ・データをログに記録します。
log.reporter.reporter_queries	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト内の照会の処理をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトでの実行時評価をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_canvas	このカテゴリは、キャンパスの実行時評価をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_queries_thread_manager	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードから実行される照会に関連したメッセージおよび例外をログに記録します。
log.reporter.reporter_runtime reporter_renderer	このカテゴリは、ビジュアル・ダッシュボードの個々のコンポーネントに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.reporter.reporter_scene_views	このカテゴリは、シーン・ビュー機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.repository	このカテゴリは、リポジトリの実行時例外およびメッセージをログに記録し、リポジトリと、当該リポジトリを使用する機能の両方に対応します。
log.rsbi	これはすべての操作をログに記録します。特定のカテゴリを決定できない場合、ログ・データはこのカテゴリに書き込まれます。
log.runtime	このカテゴリは、UI およびユーザー・メッセージの処理によって発生する例外をログに記録します。

表 2. ログ・カテゴリの名前および説明 (続き)

名前	説明
log.scheduler	このカテゴリは、スケジューラーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.security	このカテゴリは、保護されたりポジトリブ・プロバイダーに関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.service	このカテゴリは、内部アプリケーション・サービスおよびユーティリティーの問題をログに記録します。
log.show_message	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクトの「メッセージの表示」アクションからのメッセージをログに記録します。
log.statistics	このカテゴリは、コンテナとしてのみ使用されます。
log.statistics.queryEngine	このカテゴリは、照会実行プロセスの別個のブロックで費やされる時間の統計をログに記録します。
log.time_trace	このカテゴリは、時間トレース機能に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.tracking	このカテゴリは、オブジェクト・トラッキングに関連する例外およびメッセージをログに記録します。
log.transformation	このカテゴリは、照会変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.transformation.complex	このカテゴリは、複合変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.transformation.simple	このカテゴリは、単純変換に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。
log.ui	このカテゴリは、ユーザー・インターフェース操作をログに記録します。
log.value	このカテゴリは、ビジュアル・プロジェクト内の値の実行時例外およびメッセージのみをログに記録します。
log.web.ide	このカテゴリは、QMF for WebSphere の起動とその処理に関連するメッセージおよび例外をログに記録します。

出力設定

「設定」ウィンドウの「出力」ページを使用して、QMF でのエラーおよび接続についての情報を追跡する、「出力」ビューをアクティブにすることができます。

このタスクについて

「出力」ビューからの情報は、デバッグに役立ちます。情報は、「出力」ビューで報告書として提供することも、ログ・ファイルに自動的に追加することもできます。

QMF セッションの出力ファイル設定を指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「設定」 > 「出力」をクリックします。
2. 「出力」ページでは、以下のオプションを指定できます。

エラーの表示

このオプションでは、すべてのエラー・テキストを「出力」ビューに表示します。

接続状況の表示

このオプションでは、データ・ソースへの接続状況を「出力」ビューに表示します。

「出力」ビューを自動的にアクティブにする

エラーが発生するか、メッセージが表示されると、このオプションにより「出力」ビューが自動的に開きます。

3. 「適用」をクリックして、設定の選択内容を保存します。
4. 「デフォルトの復元」をクリックして、デフォルトの設定値を復元します。
5. 「OK」をクリックして「設定」ウィンドウを閉じます。

エクスポート・アクションによって生成されたオブジェクトのディレクトリーの場所の設定

さまざまな QMF アクションから生成されたオブジェクトがサーバー・ファイル・システム上の特定の場所にエクスポートされるように、QMF で設定を行うことができます。

このタスクについて

このタスクでは、生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を (設定を使用して) 指定する方法について説明します。

エクスポート・ディレクトリーの設定を行うには、以下のようになります。

手順

1. 「設定」 > 「サーバー・サイド・ファイル・システム」をクリックします。
2. 「サーバー・ファイル・システムにアクセスできるようにする」チェック・ボックスを選択します。
3. 生成されたオブジェクトがエクスポートされる場所を示すパスを「ルート出力ディレクトリー」フィールドに入力します。

EXPORT プロシージャまたはスケジュール・タスク (オブジェクトのコピーまたは実行) によってデータおよびオブジェクトが生成されると、それらは指定したパスにエクスポートされます。

指定するディレクトリーは、サーバー・ファイル・システムに存在していなければなりません。

- パスを「ルート入力ディレクトリー」フィールドに入力して、dynamart ソース・ファイルのルート・ディレクトリーのパスを指定します。

注: 「ルート入力ディレクトリー」パスの指定は必須です。指定しないと設定が正しくないものになり、サーバー・サイド・ファイル・システムを使用した **EXPORT** ではエラーが生じます。

- 「適用」をクリックして、設定を保存します。
- 設定をデフォルト値に復元するには、「デフォルトの復元」をクリックします。
- 「OK」をクリックして、「設定」ウィンドウを閉じます。

QMF サーバー・レジストリー設定

QMF サーバー・レジストリーは、QMF サーバーと QMF クライアント・コンポーネントの間の接続リンクです。QMF サーバー・レジストリーは、クライアント・コンポーネントが接続できる使用可能な QMF サーバーのリストを収集して提供します。

このタスクについて

QMF サーバー・レジストリー設定を行うには、以下の手順を実行します。

手順

- メインメニューから「設定」 > 「**QMF** サーバー・レジストリー」をクリックします。
- 「サーバー・ラベル」フィールドに、サーバーのラベルを指定します。このラベルは、QMF サーバー・レジストリーが提供する使用可能なサーバーのリストに表示されます。
- 「現行サーバー・レジストリー (**Current Server Registry**)」領域の「レジストリー・タイプ (**Registry type**)」リストから、使用するレジストリーのタイプを選択します。使用可能なタイプは次のとおりです。

組み込み

現在の QMF サーバーに組み込まれているレジストリー。このオプションは、QMF サーバーを初めてインストールするときにデフォルトで選択されます。このオプションを使用する場合は、「レジストリー **URL**」フィールドでレジストリーのアドレスを確認します。

自動

QMF レジストリー・サービスがローカル・ドメイン・ネーム・システム (DNS) の SRV レコードで自動的に検出したレジストリー。SRV レコードの操作については、40 ページの『自動検出 QMF サーバー・レジストリーの指定』を参照してください。このオプションを使用する場合は、「レジストリー **URL**」フィールドでレジストリーのアドレスを確認します。

カスタム

「レジストリー **URL**」フィールドを使用して、カスタム QMF サーバー・レジストリーを指定します。

「状況」フィールドには、選択したレジストリーの可用性状況が表示されます。状況を最新表示するには、「状況を最新表示 (Refresh Status)」をクリックします。

4. 「適用」をクリックします。それから「OK」をクリックします。

自動検出 QMF サーバー・レジストリーの指定

「設定」ウィンドウの「QMF サーバー・レジストリー」ページで「自動」オプションを使用するためには、ローカル・ドメイン・ネームシステム (DNS) で SRV レコードを作成して、使用する QMF サーバー・レジストリーを手動で指定する必要があります。

手順

1. ローカル DNS で SRV レコードを作成して、テンプレート `_qmfsr._tcp.<domain_name>` に従って名前を付けます。

このレコードには、2 つのコンポーネント (ターゲット・ホストとポート番号) が入っている必要があります。テンプレート Name = `"_qmfsr._tcp.<domain_name>"; Target = "<host_name>.<domain_name>"; Port = <port_number>` に従ってください。

2. パラメーター Name、Target、および Port の値を指定して、「自動」オプションで使用されるレジストリーを指定します。Target パラメーターには、レジストリーをホストするマシンのアドレスが入っている必要があります。
3. オプション: レジストリーを実行するアプリケーションを定義するには、ターゲット・ホストの TXT DNS レコードを作成する必要があります。レコードは、`qmfsrserver_path=/ のようになります。<path> は、アプリケーションの名前です。`

仮想データ・ソース設定の指定

「設定」ウィンドウの「仮想データ・ソース」ページを使用して、仮想データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュ・オプションを有効にします。

このタスクについて

仮想データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化について詳しくは、99 ページの『仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化』を参照してください。

JDBC ドライバーとリポジトリ情報のエクスポートおよびインポート

QMF 管理者は、`settings.zip` ファイルをエクスポートし、`settings.zip` ファイルまたは `settings.xml` ファイルをインポートすることによって、リポジトリおよび JDBC ドライバー情報を配布できます。

このタスクについて

リポジトリ接続および JDBC ドライバー情報をエクスポートしてからインポートするには、以下のようにします。

手順

1. 「ファイル」 > 「エクスポート」を選択して、「エクスポート」ウィンドウを開きます。選択可能なエクスポート先のリストから「リポジトリおよび JDBC ライブラリーの設定」を選択します。
2. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリおよび JDBC ライブラリーの設定のエクスポート」ページが開きます。
3. エクスポートされた設定ファイルに組み込みたい情報を選択します。使用可能なリポジトリはすべて、「リポジトリ」リスト・ボックスに表示されています。出力ファイルに含めるリポジトリの各チェック・ボックスを選択します。
4. 定義したすべての JDBC ドライバー・ライブラリーは、「JDBC ライブラリー」リスト・ボックスにリストされます。出力ファイルに含める JDBC ドライバー・ライブラリーの各チェック・ボックスを選択します。
5. オプション: 選択した JDBC ドライバーに関連付けられている JAR ファイルをエクスポートするには、「ドライバー・ファイルのエクスポート (Export driver files)」チェック・ボックスを選択します。
6. 「終了」をクリックします。Web ブラウザーによって settings.zip ファイルが自動的にダウンロードされます。
7. リポジトリおよび JDBC ドライバー情報ファイルをインポートするには、「ファイル」 > 「インポート」を選択します。「インポート」ウィンドウで、「リポジトリおよび JDBC ライブラリーの設定」を選択します。ウィザードの「リポジトリおよび JDBC ライブラリーの設定のインポート」ページが開きます。

注: リポジトリおよび JDBC ドライバー情報ファイルは ZIP フォーマットで、また XML フォーマットでもインポートできます。この目的は後方互換性フィーチャーです。以前のバージョンの QMF では、リポジトリおよび JDBC ドライバー情報ファイルは XML フォーマットでエクスポートされました。

8. 「設定ファイル」フィールドで、「参照」をクリックして settings.zip/settings.xml ファイルにナビゲートします。
9. 「リポジトリ」チェック・ボックスを選択して、settings.zip/settings.xml ファイルに入っているリポジトリをインポートします。
10. 「JDBC ライブラリー設定」チェック・ボックスを選択すると、settings.zip/settings.xml ファイルに含まれている JDBC ドライバー情報をインポートします。
11. 「ドライバー・ファイル」チェック・ボックスを選択すると、settings.zip ファイルに含まれている JAR ファイルをインポートします。
12. 「矛盾の解決」域で、以前の設定ファイルとの矛盾をどのようにして解決するかを指定します。すべての矛盾する情報を新しい情報に置き換えるには、「既存の設定をオーバーライド」を選択します。既存の情報を新しい情報で更新しない場合は、「既存の設定を保持」を選択します。「矛盾」ウィンドウを開くには、「手動で矛盾を解決」を選択します。このダイアログで、既存の設定情報と新しい設定情報の間の競合を手動で解決します。矛盾ごとに、現在の設定を上書きするか、そのまま保持するかを指定できます。
13. 「終了」をクリックします。

「サービス」ビューの使用

「サービス」ビューを使用して、QMF サーバー・サービスを開始、停止、および編集します。

手順

1. 「サービス」ビューにアクセスするには、メインメニューで「ビュー」 > 「サービス」をクリックします。「サービス」ビューには、以下の QMF サーバー・サービスが用意されています。

HTTP API サービス

サード・パーティー・アプリケーションが、HTTP を使用して QMF オブジェクトにアクセスできるようにします。

注: HTTP API サービスを停止すると、QMF for Workstation または QMF for WebSphere のインスタンスは、QMF レジストリー によって提供されたりレジストリーに接続できなくなります。

JDBC サービス

サード・パーティー Java アプリケーションが、JDBC インターフェースを使用して QMF をデータベースとして操作できるようにします。

サービスに接続するためには、Java アプリケーションは QMF サーバーのホストを JDBC URL の *host* 部分として、JDBC サービスが使用するポートを JDBC URL の *port* 部分として、サーバー上に存在するストレージ内のレジストリーの名前を JDBC URL の *database* 部分として指定する必要があります。

注: 同じ名前を持つ複数のレジストリーが異なるストレージに保管されている場合、ストレージ名はレジストリー名の前に、空白で区切って書く必要があります。

QMF レジストリー サービス

使用可能な QMF サーバーを収集し、それらのリストを提供します。

注: このサーバーの組み込みレジストリーの URL がローカル・ドメイン・ネーム・システム (DNS) の SRV レコードに定義されている場合、QMF レジストリーサービスは停止できません。また、QMF サーバーが組み込みレジストリーを使用している場合も、QMF レジストリー サービスは停止できません。

異なるレジストリーを指定するには、「設定」 > 「QMF サーバー・レジストリー」をクリックします。詳しくは、39 ページの『QMF サーバー・レジストリー設定』を参照してください。

QMF Z Client サービス

QMF Z Client が、現在の QMF サーバーにアクセスできるようにします。

2. サービスを開始または停止するには、サービス名の左側にある「開始」ボタンまたは「停止」ボタンをクリックします。
3. サービスが使用するポートを変更するには、またはサービス自動開始を構成するには、操作するサービスを右クリックして「編集」をクリックします。

注: **QMF** レジストリー サービスおよび **HTTP API** サービスでは、ポートは変更できません。

QMF Z Client サービスでは、以下の追加のパラメーターも編集することができます。

ユーザー・タイムアウト

QMF Z Client ユーザー・コンテキストがリセットされるまでのアイドル時間を分単位で指定します。

ソケット・タイムアウト

HTTP ソケットが削除されるまでのアイドル時間を分単位で指定します。

4. **QMF** クライアントに表示される、登録済み **QMF** サーバーのリストを編集するには、または重複リポジトリを管理するには、以下の手順に従ってください。
 - a. **QMF** レジストリーサービスを右クリックして、メニューから「表示設定の管理」を選択します。
 - b. 「サーバーの管理」ウィンドウの「表示設定」タブを使用して、どの登録済み **QMF** サーバーが **QMF** クライアント・コンポーネントに表示されるかを選択します。サーバーの可視性を変更するには、対応するチェック・ボックスを選択またはクリアします。
 - c. 「サーバーの管理」ウィンドウの「重複リポジトリ」タブを使用して、重複リポジトリの可視性を管理します。重複リポジトリとは、いくつかの異なるサーバーに保管されていて、同じ名前を共有するリポジトリです。リポジトリの可視性を変更するには、対応するチェック・ボックスを選択またはクリアします。
- 注: 「重複リポジトリ」タブには、「表示設定」タブで、見えるものとして設定されているサーバーのみ表示されます。
5. 「**OK**」をクリックして、変更を適用します。

「リポジトリ」ビューの使用

「リポジトリ」ビューには、選択したストレージに入っている、使用可能なリポジトリ・ストレージおよびリポジトリが表示されます。

リポジトリごとに以下の情報があります。

リポジトリ名

リポジトリの名前を表示します。

セキュリティー・プロバイダー

リポジトリに適用されているセキュリティーのタイプを示します。有効なリポジトリ・セキュリティー・タイプについては、『共有リポジトリの作成』を参照してください。

キャッシュ

現在のリポジトリにキャッシュ機能が構成されているかどうかを示しま

す。キャッシュが有効になっていると、アプリケーションは、そのリポジトリーの内容 (すべてのオブジェクトおよびメタデータなど) を Web サーバーに保存します。

表示設定

リポジトリーがユーザーに表示されるかどうかを示します。

リポジトリーのリストの下にある以下のタブには、そのリスト内のリポジトリーごとの追加情報があります。

データ・ソース

選択したリポジトリーで使用可能なデータ・ソースごとの名前、タイプ、および URL を示します。

ワークスペース

選択したリポジトリーで使用可能なワークスペースのリストを示します。

ユーザーおよびグループ

リポジトリーにアクセスできるユーザーのリストを示し、その許可に基づいてユーザーをグループ化できるようにします。

「リポジトリー」ビューを使用して、以下のアクションを実行します。

1. 「リポジトリー・ストレージ」リストを使用して、リポジトリーを表示するリポジトリー・ストレージを選択します。
2. リポジトリー・ストレージを作成するには、「リポジトリー・ストレージ」リストの横の「共有リポジトリー・ストレージの作成」ボタンをクリックします。詳しくは、45 ページの『共有リポジトリー・ストレージの作成』を参照してください。
3. リポジトリー・ストレージを編集するには、「リポジトリー・ストレージ」リストの横の「編集」ボタンをクリックします。
4. リポジトリー・ストレージを削除するには、「リポジトリー・ストレージ」リストの横の「削除」ボタンをクリックします。
5. リポジトリー・ストレージを削除せずにリストから削除するには、「リポジトリー・ストレージ」リストの横にある「リストから除去」ボタンをクリックします。
6. リポジトリーを作成するには、「共有リポジトリーの作成」をクリックします。詳しくは、51 ページの『共有リポジトリーの作成』を参照してください。
7. リポジトリーのリストをリフレッシュするには、「リポジトリーの最新表示」をクリックします。
8. データ・ソースを作成するには、「データ・ソース」タブの「データ・ソースの作成」をクリックします。詳しくは、58 ページの『データ・ソース』を参照してください。
9. データ・ソースのリストをリフレッシュするには、「データ・ソースの最新表示」をクリックします。
10. ワークスペースを作成するには、「ワークスペース」タブの「ユーザー・ワークスペースの作成」をクリックします。詳しくは、105 ページの『ワークスペースの設定』を参照してください。

11. ワークスペースのリストをリフレッシュするには、「ワークスペースを最新表示」をクリックします。
12. リポジトリ・ユーザー・プロファイルを作成するには、「ユーザーおよびグループ」タブで「リポジトリ・ユーザーの作成」をクリックします。このアクションは、リポジトリのセキュリティー・タイプが「内部」に設定される場合にのみ使用できます。詳しくは、106 ページの『リポジトリ・ユーザーの作成』を参照してください。
13. リポジトリ・ユーザー・グループを作成するには、「ユーザーおよびグループ」タブで「リポジトリ・グループの作成」をクリックします。このアクションは、リポジトリのセキュリティー・タイプが「内部」に設定される場合にのみ使用できます。詳しくは、107 ページの『リポジトリ・グループの作成』を参照してください。
14. リポジトリ・ユーザーのリストとリポジトリ・ユーザー・グループのリストを最新表示するには、「リポジトリ・ユーザーとグループの最新表示」をクリックします。
15. データ・ソース、ワークスペース、リポジトリ・ユーザー、またはリポジトリ・グループを編集または削除するには、オブジェクトを右クリックし、実行するアクションを選択します。

共有リポジトリ・ストレージの作成

共有リポジトリ・ストレージとは、データベース表のセットのことです。データベース接続やリソース限界の情報を保管したり、報告書作成アクションや照会アクションにユーザーが使用するデータベース・オブジェクトを保管したりするための共有リポジトリ・ストレージを作成する必要があります。

始める前に

リポジトリ・ストレージを作成する前に、データベース管理システム (DBMS) がインストールされ、構成されていることを確認してください。また、QMF がデータベースに接続できるよう、JDBC ドライバー JAR ファイルおよびライセンス・ファイルをインストールしてください。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージを作成するには、以下のステップを実行します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、「共有リポジトリ・ストレージの作成」をクリックします。「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードが開きます。
2. 「新しい共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターを入力します」ページで、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースへの接続に使用する、JDBC 接続情報およびユーザー・ログイン情報を指定します。
3. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページが開きます。

4. 「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページで、リポジトリ・ストレージにアクセスするために QMF アプリケーションが必要とするデータベース・オブジェクトを作成またはアップグレードすることを指定します。
5. 「次へ」をクリックします。必要に応じて、「リポジトリ・ストレージ表の更新 (Update repository storage tables)」ページが開き、必要なリポジトリ・ストレージ表を作成または更新するために使用される SQL ステートメントがリストされます。このページが開いたら、「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
6. ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表を保護します」ページで、データベース・リポジトリ・ストレージ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定します。
7. 「終了」をクリックします。

接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報の指定

共有リポジトリ・ストレージを作成するための最初のステップは、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースへのアクセスに使用される接続パラメーターおよびユーザー・ログイン情報を指定することです。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージをホストするデータベース用の接続およびユーザー・ログイン情報を指定するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「新しい共有リポジトリ・ストレージの接続パラメーターを入力します」ページにナビゲートします。
2. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を使用すれば、「JDBC ドライバーの選択」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できます。

注: Db2 for z/OS データベースを使用している場合は、直接 DRDA 接続を使用できます。JDBC ライブラリーとは異なり、直接 DRDA 接続は QMF に付属しているため、追加でドライバーをインストールする必要がありません。

直接 DRDA 接続用に SSL 証明書を有効にすることで、接続を保護することができます。

注: 直接 DRDA 接続は、DB2for z/OS バージョン 9 とバージョン 10、および Db2 for z/OS バージョン 11 とバージョン 12 でのみサポートされています。Db2 LUW または DB2 for iSeries では使用しないでください。

3. 「JDBC URL」リストで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログ・ボックスを開くには、「URL の作成」をクリックします。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「OK」をクリックします。結果の URL ストリングが JDBC URL リストに追加されます。

4. 「拡張」をクリックして、リポジトリ・ストレージ表をホストするデータベースのために使用されるドライバ特定接続ストリング・キーワードおよびその値を指定します。使用可能な拡張プロパティのリストは、使用されるドライバのタイプと、そのドライバのバージョンの両方によって変わります。選択したデータベース・ドライバに必要なキーワードについては、当該ドライバの資料を参照してください。

注: DB2 Type 4 UDB ドライバおよび DB2 Universal JDBC ドライバの場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの「retrieveMessagesFromServerOnGetMessage」オプションにチェック・マークを付けます。

5. QMF と Db2 for z/OS データベースとの間の PassTicket ベースのシングル・サインオン接続を構成するには、「シングル・サインオン」をクリックします。
6. 直接 DRDA 接続を使用する場合は、「パッケージのバインド」ボタンをクリックしてパッケージをバインドします。
7. 「ユーザー ID とパスワードが必要」を選択し、リポジトリ・ストレージをホストしているデータベースにアクセスするときにユーザー ID とパスワードを使用することを要求します。リポジトリ・ストレージをホストしているデータベースがユーザー ID およびパスワードを使用しないアクセスを許可している場合、このオプションを選択するとその許可がオーバーライドされて、リポジトリ・ストレージ表へのアクセスにユーザー ID およびパスワードが必要になります。
8. 「ユーザー ID」および「パスワード」フィールドに、データベースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。ホスト・リポジトリへの接続時に指定したユーザー ID とパスワードを使用して、そのリポジトリにおける権限が付与されます。指定するユーザー ID とパスワードは、ホスト・データベースでリポジトリ・ストレージ表を作成するための管理者特権を持っている必要があります。このモードは Db2 でのみ使用できます。
9. 指定したユーザー ID を使用してデータベースに接続するたびにこのパスワードを使用するには、「このパスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。
10. 「接続のテスト」をクリックして、データベースへの接続をテストします。正しくない情報を指定した場合は、接続できません。
11. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の作成またはアップグレード」ページが開きます。

表の作成および更新

共有リポジトリ・ストレージを作成するための 2 番目のステップは、リポジトリ・ストレージにアクセスするために QMF アプリケーションが必要とするデータベース・オブジェクトを、作成するかまたは更新するかを指定することです。

このタスクについて

データベース上に作成される共有リポジトリ・ストレージをサポートするには、いくつかのデータベース表が必要です。表が存在しているか、または更新が必要かを QMF がチェックするかどうかを指定する必要があります。

リポジトリ・ストレージ表を作成または更新するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」ページにナビゲートします。
2. 以下のオプションの 1 つを選択する。
 - このステップを迂回するには 「リポジトリ・ストレージ表はすでに作成済み」をクリックします。すべてのリポジトリ・ストレージ表が既に存在し、その表が変更されていなければ、このオプションを選択できます。このような状況の例として、リポジトリ・ストレージのオプションを編集して、パッケージを再バインドするかまたはリポジトリ・ストレージ表のストアード・プロシージャを再実行したい場合があります。「次へ」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
 - 表が作成済みであるのか、または表を更新する必要があるのかを確認する場合は、「リポジトリ・ストレージ表を作成またはアップグレードする」をクリックします。
3. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。

ヒント: (Db2 for z/OS データベースの場合)

管理者特権のないユーザーが共有リポジトリ・ストレージ表を作成または更新し、所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力すると、ユーザー・ログインが PRIMARY_ID、所有者 ID が SECONDARY_ID として RSBI.AUTHID_TABLE に自動的に挿入されます。これにより、ユーザーはデータベース・ベースのセキュリティー・プロバイダーを使用して共有リポジトリを作成し、自動的に管理者としてリポジトリを操作できるようになります。

4. リポジトリ・ストレージ表を作成していない場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスを選択すると、データベース・オブジェクトの命名方法をカスタマイズできるウィンドウが開きます。
5. 「次へ」をクリックします。表の状況に応じて、以下のように続行します。
 - すべての表が作成され、変更されていない場合は、メッセージが出されます。メッセージ・ダイアログの「OK」をクリックします。ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。

- 表の作成または更新が必要で、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択していなかった場合は、「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。Db2 for z/OS® 以外のデータベースの場合、このページは開きません。その場合は、ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の更新」ページが開き、必要なリポジトリ・ストレージ表を作成または更新するために使用される SQL ステートメントがリストされます。このページの説明に従って、SQL ステートメントを変更することができます。「次へ」をクリックします。「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。
- 「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択してある場合に、表を作成する必要があるときは、「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。

注: ウィンドウの「値」列には、各データベース・オブジェクトのデフォルト名が表示されます。作成されるオブジェクトを検討し、必要であれば名前変更することができます。例えば、すべての索引名の前に「IX」を付けることもできます。

「置換変数値の入力」ウィンドウが閉じて、ウィザードの「リポジトリ・ストレージ表の更新」ページが開きます。

「次へ」をクリックします。「リポジトリ・ストレージ表の保護」ページが開きます。

リポジトリ・ストレージ表の保護とユーザー許可の付与

共有リポジトリ・ストレージを作成するための最後のステップは、共有リポジトリ・ストレージ表が無許可ユーザーから保護されるようにするかどうかを指定することです。

このタスクについて

リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表の中には、許可表などのように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージ表にアクセスします。このため、リポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

リポジトリ・ストレージ表を保護するには:

手順

1. 「新規共有リポジトリ・ストレージの作成」ウィザードを開いて、「リポジトリ・ストレージ表を保護します」ページにナビゲートします。

2. 共有リポジトリ・ストレージ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定します。デフォルトでは、「保護方式」チェック・ボックスは選択されていません。つまり、すべてのユーザーは、リポジトリ・ストレージ表にアクセスでき、どの表でも変更できる、ということになります。リポジトリ・ストレージ表を保護するよう指定するには、「保護方式」チェック・ボックスを選択してください。保護方式の指定に使用するフィールドが使用可能になります。
3. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - Informix
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 z/OS V9 以降 (NFM)
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - Microsoft SQL Server
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、リポジトリ・ストレージ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバー、または製品に付属の直接 DRDA 接続 (後者は Db2 for z/OS 接続の場合にのみ選択可能) を使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
4. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
5. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
6. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」ボタンを使用して、ストアード・プロシージャやパッケージの集合を除去することもできます。
7. このデータベース上のリポジトリ・ストレージ表に対してストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定します。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」フィールドに PUBLIC と入力して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたはパッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。

オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・

プロシージャーや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。

8. 「終了」をクリックします。リポジトリ・ストレージ表が作成されます。新しいリポジトリ・ストレージ表のロケーションが、「リポジトリ」ビューにリストされます。共有リポジトリ・ストレージをデータベースに作成後、ストレージを共有する 1 つ以上のリポジトリを追加できます。作成する各リポジトリには、それ自体の独立オブジェクト、セキュリティー・モデル、およびユーザーを含めることができます。

最大同時データベース接続数の設定

リポジトリ・ストレージ表の作成において拡張機能を使用すると、最大同時データベース接続数を指定できます。

このタスクについて

最大同時データベース接続数を設定するには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、作業するリポジトリ・ストレージをクリックします。「共有リポジトリ・ストレージの作成」ボタンの横にある下矢印をクリックし、「編集」を選択します。「リポジトリ・ストレージの編集」ウィンドウが開きます。
2. 「拡張」タブをクリックします。
3. 「最大同時データベース接続数」フィールドにデータベース接続数を指定します。デフォルト値は 10 です。
4. 「OK」をクリックします。リポジトリ・ストレージ表に、最大同時データベース接続数が設定されます。

共有リポジトリの作成

リポジトリは、QMF オブジェクト (照会、プロシージャー、書式、ダッシュボード、報告書など) が保管される中心部として機能します。リポジトリはそれぞれ、それ自体の独立したオブジェクト、セキュリティー・モデル、およびユーザーを持つことができます。

このタスクについて

リポジトリをリポジトリ・ストレージに追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、「共有リポジトリの作成」をクリックします。「新規共有リポジトリの作成」ウィザードが開きます。
2. 「名前」フィールドに、リポジトリの名前を指定します。
3. 「リポジトリ・ストレージ」フィールドで、新規リポジトリをホストするために使用するリポジトリ・ストレージを選択します。

4. オプション: QMF クライアントがリポジトリを使用できないようにするには、「**QMF クライアントから隠す (Hide from QMF clients)**」チェック・ボックスを選択します。
5. オプション: リポジトリのドライバー固有の接続ストリング・キーワードを管理するには、「**拡張**」をクリックします。
6. オプション: QMF と Db2 for z/OS データベースとの間の PassTicket ベースのシングル・サインオン接続を構成するには、「**シングル・サインオン**」をクリックします。
7. オプション: 直接 DRDA 接続を使用して初めてリポジトリに接続する場合は、直接 DRDA パッケージをバインドする必要があります。これを行うには、以下の手順を完了します。
 - a. 「**パッケージのバインド**」をクリックします。
 - b. 「**所有者 ID**」フィールドに、バインディング・プロセスに必要な権限を持つ特権 SQLID を入力します。このフィールドの値が指定されていない場合は、「**ユーザー情報の設定**」ダイアログのユーザー名が使用されます。
 - c. 「**インストール**」をクリックします。
8. オプション: リポジトリのログイン名およびパスワードを指定するには、「**ユーザー情報の設定**」をクリックします。
9. オプション: 「**コメント**」フィールドに、リポジトリを説明するコメントを入力します。
10. 「**セキュリティ・プロバイダー**」リストから、リポジトリに適用するセキュリティ・タイプを選択します。以下のセキュリティ・タイプが有効です。
 - **なし**: ホスト・データベースによって提供されるもの以外に、追加のセキュリティが適用されないことを指定します。すべてのユーザーは、リポジトリの内容への全アクセス権限を持ちます。
 - **内部**: データベース・レベルで提供されるもの以外に、セキュリティのレイヤーが適用されることを指定します。このレベルのセキュリティを使用すると、ユーザーおよびグループを定義することができます。リポジトリへのアクセス許可を割り当てることができます。このセキュリティ・レベルで、リポジトリに接続したときにユーザーまたはグループがどのデータ・ソースおよびワークスペースにアクセスしたり表示したりすることができるかも制御できます。ユーザーおよびグループ定義、およびそれらの割り当てはリポジトリ内に保管されます。ユーザーは定義されたユーザー ID とパスワードを使って QMF にログオンします。QMF 管理者から割り当てられた許可に基づいて、リポジトリ、データ・ソース、およびワークスペースへのアクセス権が付与されます。
 - **LDAP**: データベース・レベルで提供されるもの以外に、セキュリティのレイヤーが適用されることを指定します。このレベルのセキュリティを使用すると、リポジトリへのアクセスが許可されたユーザーおよびグループを制御することができます。このセキュリティ・レベルで、リポジトリに接続したときにユーザーまたはグループがどのデータ・ソースおよびワークスペースにアクセスしたり表示したりすることができるかも制御できます。LDAP セキュリティ・オプションを選択すると、ユーザーはユーザー ID とグループ所属を既存の LDAP サーバーから取得します。ユーザー

は LDAP ユーザー名とパスワードを使って QMF にログオンします。
QMF 管理者から割り当てられた許可に基づいて、リポジトリ、データ・ソース、およびワークスペースへのアクセス権が付与されます。

- データベース・ベース: これは、ホスト・データベースのセキュリティー設定が共有リポジトリの保護に使用されるように指定します。
11. ユーザー用のデフォルト・ワークスペースを保護されたりリポジトリに自動的に作成するには、「ホーム・ワークスペース・サポートを有効にする」チェック・ボックスを選択します。
 12. 「次へ」をクリックします。
 13. 前のステップで選択したセキュリティー・タイプに応じて、以下のウィザード・ページのいずれかが開きます。
 - 「データベース・ベース」オプションを選択した場合、「DB セキュリティー・プロバイダー・オプション」ページが開きます。このページで、データベースに保管されている QMF カタログ表からデータベース・ユーザーのリストをインポートするかどうかを指定して、「次へ」をクリックします。
 - 「内部」オプションを選択した場合、「内部セキュリティー・プロバイダー・オプション」ページが開きます。このページで、QMF 管理者アカウントを識別するユーザー名およびパスワードを指定します。QMF 管理者アカウントは、追加の管理アカウントを作成することに加えて、別のユーザーやグループにセキュリティー権限レベルを適用するのに使用されます。「次へ」をクリックします。
 - 「LDAP」オプションを選択した場合、「LDAP セキュリティー・プロバイダー・オプション」ページが開きます。そのページで、LDAP の各フィールドに 1 つ以上の値を指定します。これらのフィールドは、すべての LDAP ユーザーとグループを取得するのに使用します。QMF 管理者アカウントを表す、ディレクトリー内の既存の LDAP グループを指定する必要があります。このグループに属するすべての LDAP アカウントは管理者特権を持ち、別のユーザーおよびグループにセキュリティー許可レベルを適用することに加え、追加の管理アカウントを作成することができます。「次へ」をクリックします。
 14. 「拡張接続パラメーターを定義します」ページの「リポジトリ・キャッシュ」域で、「有効にする」チェック・ボックスを選択してリポジトリ・キャッシュ検証を有効にします。事前定義モードのいずれかを使用するか、または「カスタム・キャッシュ設定の使用」チェック・ボックスを選択し、カスタム・キャッシュ検証モードを指定します。

以下の事前定義モードが有効です。

低い関連性 - 高パフォーマンス

キャッシュ検証は実行されません。

関連性とパフォーマンスの平衡状態

キャッシュ検証は、5 分ごとに実行されます。

高い関連性 - 低パフォーマンス

キャッシュ検証は、1 分ごとに実行されます。

15. 「終了」をクリックします。

管理者権限の割り当て

QMF 管理者権限は、リポジトリの作成と管理の責任を持たせるユーザーにのみ与える必要があります。

リポジトリをデータベースに保管し、リソースを保護したい場合は、データベースの管理に習熟したユーザーにのみ QMF 管理者権限を与えるべきでしょう。多くの環境では、1 人のユーザーにリポジトリの管理責任を負わせることが、データベース・リソースに対する制御を集中化および合理化することにつながります。

QMF 管理権限のないユーザーは、QMF 管理者によって作成されるリポジトリに接続するために必要な情報が付与される必要があります。

DRDA を使用してデータベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続

直接 DRDA 接続を使用して、Db2 データベース・データ・ソースへの接続を確立することができます。

始める前に

直接 DRDA 接続は、DB2 for z/OS バージョン 8、バージョン 9、およびバージョン 10 と、Db2 for z/OS バージョン 11 およびバージョン 12 でのみサポートされています。 Db2 LUW または DB2 for iSeries では使用しないでください。

このタスクについて

JDBC ドライバー・ライブラリーとは異なり、直接 DRDA 接続は QMF に付属しているため、追加でドライバーをインストールする必要がありません。

リレーショナル・データ・ソース、共有リポジトリ・ストレージ、または共有リポジトリを作成するときは、直接 DRDA 接続を指定できます。

直接 DRDA 接続用に SSL 証明書を有効にすることで、接続を保護することができます。

直接 DRDA 接続を指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、操作するデータ・ソースを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
2. 「接続パラメーター」ページの「JDBC ドライバー」リストから、「直接 DRDA 接続」を選択します。この接続は、データ・ソースをホストするデータベースにアクセスするために使用されます。
3. 「JDBC URL」リストに、データ・ソースをホストするデータベースを指す URL を指定します。

URL のテンプレートをリストに表示できます。

```
jdbc:rsbi:db2://{server}:{port}/{database}
```

サーバー、ポート、およびデータベースの情報を指定する必要があります。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ウィンドウを使用すれば、正しいストリングを形成できます。これを行うには、「URL の作成」をクリックして、「URL テンプレートによる URL の作成」ウィンドウを開きます。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「OK」をクリックします。結果の URL ストリングが「JDBC URL」リストに追加されます。

4. 「拡張」をクリックして、データ・ソース表をホストするデータベースに使用される直接 DRDA接続のストリング・プロパティーとその値を指定します。

詳しくは、『直接 DRDA 接続プロパティー』を参照してください。

5. 直接 DRDA パッケージをバインドするために、「パッケージのバインド」をクリックします。「パッケージのバインド」ダイアログが開きます。

直接 DRDA 接続が正しく機能するには、初めてデータベースに接続するときに直接 DRDA パッケージをバインドする必要があります。バインド操作が完了すると、ユーザーは直接 DRDA 接続を使用してデータベースに接続できます。ユーザーはパッケージをバインドし直す必要はありません。

- a. 「所有者 ID」フィールドには、サーバー接続を確立したユーザーにデータベースに対する管理者権限がない場合に備えて、バインド・プロセスに必要な権限を持つ SQLID を入力できます。このフィールドの値が指定されない場合は、現在の SQLID (「ユーザー情報の設定」ダイアログで設定されたユーザー名) がインストール・プロセスの実行に使用されます。
 - b. 「インストール (Install)」をクリックして、インストール・プロセスを開始します。
6. データ・ソース・パラメーターの指定を続行します。

直接 DRDA 接続プロパティー

直接 DRDA 接続プロパティーは、特定のデータ・ソースへの接続がどのように確立されるのかを定義するものです。直接 DRDA 接続プロパティーは、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウで指定できます。

直接 DRDA 接続には次のプロパティーがあります。

パラメーター

securityMechanism

このプロパティーは、直接 DRDA 接続のセキュリティー・メカニズムを指定します。このプロパティーのデータ・タイプは整数です。値は以下のとおりです。

- SECMEC.I_USRIDPWD = 3

ユーザー ID もパスワードも暗号化されません。

- SECMEC.I_EUSRIDPWD = 9

ユーザー ID とパスワードの両方が暗号化されます。

- SECMEC.I_EUSRPWDDTA = 13

ユーザー ID、パスワード、およびデータが暗号化されます。

securityMechanism に値を指定しない場合、リクエスターは暗号化なしでセキュリティー・メカニズムを使用して接続を試みます。

サーバーが、暗号化されたログイン情報のみを受け入れる場合は、リクエスターは、対応するセキュリティー・メカニズムに切り替えようとします。

サーバーがそのセキュリティー・メカニズムをサポートしていないために接続を確立できない場合は、例外がスローされます。

sslConnection

このプロパティーは、SSL 証明書の使用が現行接続で有効であるかどうかを示します。このプロパティーのデータ・タイプはストリングです。値は以下のとおりです。

true SSL 証明書の使用を有効にすることを指定します。

false SSL 証明書の使用を無効にすることを指定します。

sslTrustStoreLocation

このプロパティーは、接続に使用されるトラストストア・ファイルへのパスを指定します。このプロパティーのデータ・タイプはストリングです。値には、トラストストア・ファイルへのパスが含まれている必要があります。

sslTrustStorePassword

このプロパティーは、接続に使用されるトラストストア・ファイルのパスワードを指定します。このプロパティーのデータ・タイプはストリングです。値には、トラストストア・ファイルのパスワードが含まれている必要があります。

enableBidiLayoutTransformation

このプロパティーは、直接 DRDA 接続が双方向データを処理する方法を指定します。このプロパティーが有効になっていると、QMF DRDA ドライバーは、表示される順序で保管されている、右から左に書かれる言語 (アラビア語など) で入力されたデータを正しく処理することができます。データが論理順序で保管されている場合は、このオプションを有効にすると、正しくないデータ出力が結果として生じます。

true enableBidiLayoutTransformation プロパティーは有効です。

false enableBidiLayoutTransformation プロパティーは無効です。

注: enableBidiLayoutTransformation オプションが有効になっていると、ユーザーは、データベース内のデータに対して挿入も編集も削除もできません。また、enableBidiLayoutTransformation オプションが有効になっていると、サーバー・マシン上とクライアント・マシン上で異なる処理を BiDi データに対して行うよう、ドライバーが構成されます。詳しくは、『双方向レイアウト変換プロシージャのための Db2 タイプ 4 UDB JDBC ドライバー・パラメーター』にある表を参照してください。サーバー・マシンについては、値 4 に対応する行を調べてください。クライアント・マシンについては、値 5 に対応する行を調べてください。

双方向レイアウト変換プロシージャのための Db2 タイプ 4 UDB JDBC ドライバー・パラメーター:

下の表は、プロパティー *serverBidiStringType* および *clientBidiStringType* の整数値および対応する属性を示しています。

表 3. *serverBidiStringType* プロパティーおよび *clientBidiStringType* プロパティーのプロパティー値および対応する属性

値	テキストのタイプ	テキスト方向	対称スワッピング	数表示形状	テキスト形状
4	Visual	Left-to-right	いいえ	Nominal	Shaped
5	論理	Left-to-right	はい	Nominal	Nominal
6	論理	Right-to-left	はい	Nominal	Nominal
7	Visual	Right-to-left	いいえ	Nominal	Shaped
8	Visual	Right-to-left	いいえ	Nominal	Shaped
9	論理	Right-to-left	はい	Nominal	Shaped
10	論理	Contextual left-to-right	はい	Nominal	Nominal
11	論理	Contextual right-to-left	はい	Nominal	Nominal

表 1 にリストされている属性についての以下の記述を考慮してください。

テキストのタイプ

メモリー内または外部メディア上に保管されているテキストの順序と正しい表示のための順序との間の関係を指定します。値は以下のとおりです。

- Visual – テキストは、表示される順序と同じ順序で保管されます。
- Logical – テキストは、読み取られることを意図した順序で保管されます。

テキスト方向

テキストが保管される方向を指定します。値は以下のとおりです。

- Left-to-right – テキストに左から右のマークを付けます。
- Right-to-left – テキストに右から左のマークを付けます。
- Contextual left-to-right – テキスト方向は、テキスト自体を分析することによって決定されます。最初の強い文字が左から右へのスクリプトに属する場合、またはテキストに強い文字がない場合、テキストには左から右のマークが付けられます。最初の強い文字が右から左のスクリプトに属している場合、テキストには右から左のマークが付けられます。
- Contextual right-to-left – テキスト方向は、テキスト自体を分析することによって決定されます。最初の強い文字が左から右のスクリプトに属している場合、テキストには左から右のマークが付けられます。最初の強い文字が右から左のスクリプトに属する場合、またはテキストに強い文字がない場合、テキストには右から左のマークが付けられます。

対称スワッピング

暗黙の方向性の意味を持つ文字 (<, >, (,) など) をミラー・イメージで置き換えるかどうかを指定します。このオプションは、右から左の書記体系で書かれ、Visual 順序で保管されるテキストを対象としています。Logical 順序で保管されるテキストについては、対称スワッピングは実行されません。値は以下のとおりです。

- Yes – 対称スワッピングは有効です。
- No – 対称スワッピングは無効です。

数表示形状

数字をヨーロッパ数字形状を使用して表示するか、またはアラブ・インド数字形状を使用して表示するかを指定します。値は以下のとおりです。

- **Nominal** – 数字は、ヨーロッパの数字形状を使用して表示されます。
- **National** – 数字は、アラブ・インド数字形状を使用して表示されます。

テキスト形状

アラビア語の記号のエンコードを指定します。値は以下のとおりです。

- **Nominal** – アラビア文字は、組み込みコード・ポイント (Unicode の「06xx」範囲) でエンコードされます。
- **Shaped** – アラビア文字は、Initial、Middle、Final、または Isolated の表示形式としてエンコードされます。

DRDA ドライバー用の SSL 接続の使用可能化

SSL 証明書を使用可能にすることで、接続をセキュアにできます。

このタスクについて

SSL 証明書を使用可能にするには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、SSL 証明書の使用を有効にする対象のデータ・ソースを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。
2. 「プロパティ」ウィンドウの「接続パラメーター」ページで、「拡張」をクリックします。
3. 「拡張 JDBC 設定」ウィンドウで、**sslConnection** パラメーターを使用可能にして、パラメーター値を **true** に設定します。
4. **sslTrustStoreLocation** パラメーターを使用可能にして、「値」列にトラストストア・ファイルの場所を指定します。

注: JDK keytool ユーティリティを使用して、トラストストア・ファイルを構成します。

5. オプション: **sslTrustStorePassword** パラメーターを使用可能にして、選択したトラストストア・ファイルのパスワードを「値」列に指定します。
6. 「OK」をクリックして、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウを閉じます。
7. 「終了」をクリックして、「プロパティ」ウィンドウを閉じます。

データ・ソース

管理者として、データベース接続情報を保管するデータ・ソースを作成します。

データ・ソースは、それが表すデータベースのタイプ別に分類されます。

表 4. データ・ソース・タイプ

データ・ソース	データベース
リレーショナル	データはリレーショナル・データベースに保管されます。

表 4. データ・ソース・タイプ (続き)

マルチディメンション	データはマルチディメンション・データベースに保管されます。
Hive	データは Apache Hive™ データウェアハウスに保管されます。
仮想	データは仮想表および JavaScript テーブルに保管されます。
JavaScript	データはオンライン・サービスによって提供されます。データは JavaScript テーブルに保管されます。
QMF Data Service	データは QMF Data Service サーバー上の表に保管されます。

リレーショナル・データ・ソースの作成

すべてのリレーショナル・データ・ソースのリポジトリに、構成情報を追加する必要があります。

このタスクについて

リレーショナル・データ・ソースは、JDBC を使用してアクセスされます。リレーショナル・データ・ソースは、データベース表にデータを保管します。データベース表のそれぞれは、いくつかの列と、1 つ以上の行から構成されます。リレーショナル・データ・ソースの照会は SQL で作成されます。

新規リレーショナル・データ・ソースを作成するには、以下のようにします。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「リレーショナル」を選択して「次へ」をクリックします。「新しいリレーショナル・データ・ソース名と接続パラメーターを追加します」ページが開きます。
3. 「データ・ソース名」フィールドでデータ・ソースの名前を指定します。
4. 「JDBC ドライバー」フィールドには、リポジトリ・ストレージをホストするデータベースのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報の設定時に定義したライブラリーのドロップダウン・リストから選択できます。このフィールドの右側にある省略符号 (...) を使用すれば、「JDBC ドライバーの選択」ダイアログを開くことができます。このダイアログでは、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できます。

注: Db2 for z/OS データベースを使用している場合は、直接 DRDA 接続を使用できます。JDBC ライブラリーとは異なり、直接 DRDA 接続は QMF に付属しているため、追加でドライバーをインストールする必要がありません。

直接 DRDA 接続用に SSL 証明書を有効にすることで、接続を保護することができます。

注: 直接 DRDA 接続は、DB2for z/OS バージョン 9 とバージョン 10、および Db2 for z/OS バージョン 11 とバージョン 12 でのみサポートされています。Db2 LUW または DB2 for iSeries では使用しないでください。

詳しくは、『DRDA を使用してデータベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続』を参照してください。

5. 「**JDBC URL**」リストで、接続先リポジトリのあるリポジトリ・ストレージをホストするデータベースを指す URL を指定します。

この URL の形式はリストに表示できます。

注: また、「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログを使用すれば、正しいストリングを形成できます。

「URL テンプレートによる URL の作成」ダイアログを開くには、「URL の作成」をクリックします。JDBC URL ドロップダウン・リストからテンプレートを選択します。表でサーバー、ポート、およびデータベース情報を指定して、「OK」をクリックします。結果の URL ストリングが JDBC URL リストに追加されます。

6. 「拡張」をクリックして、この共有リポジトリへの接続時に使用されるドライバー固有の接続ストリング・キーワードとその値を指定します。選択したデータベース・ドライバーに必要なキーワードについて詳しくは、当該ドライバーの資料を参照してください。

注: DB2® Type 4 UDB ドライバーの場合、拡張 SQL 例外エラー・メッセージを受け取るには、「拡張 JDBC 設定」ウィンドウの

「**retrieveMessagesFromServerOnGetMessage**」オプションにチェック・マークを付けます。

7. オプション: QMF と Db2 for z/OS データベースとの間の PassTicket ベースのシングル・サインオン接続を構成するには、「シングル・サインオン」をクリックします。
8. 直接 DRDA 接続を使用する場合は、「パッケージのバインド」ボタンをクリックしてパッケージをバインドします。
9. 「ユーザー情報の設定」をクリックする。「ユーザー情報」ウィンドウが開きます。
10. 「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択すると、このデータ・ソースにアクセスするたびにユーザー情報が要求されるように指定します。データ・ソースがログオン情報を必要としない場合、またはログオン情報を他の何らかの方法 (Kerberos または Windows 認証など) を使用して取得する場合、このチェック・ボックスにはチェック・マークを付けなくてもできます。
11. 「このデータ・ソースへの接続時にリポジトリ・ログイン/パスワードを使用」チェック・ボックスにチェック・マークを選択すると、ユーザーからログ

オン情報を要求する前に、現在のリポジトリ・ログインおよびパスワードを使用してデータ・ソースへの接続を試みるよう指定します (Kerberos セキュリティの場合など)。

12. 「ユーザー名」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、データ・ソースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。「OK」をクリックします。「ユーザー情報」ウィンドウが閉じ、制御が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードに戻ります。
13. 接続をテストするには、「接続のテスト」をクリックします。
14. 「次へ」をクリックします。「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの 2 ページ目が開き、そこでデータ・ソースに対して QMF カタログ・プラグインを使用可能にします。

データ・ソース・プラグインを使用可能にする:

リレーショナル・データ・ソースの構成における 2 番目のステップは、データ・ソースの追加機能を提供する QMF カタログ・プラグインを使用可能にすることです。

このタスクについて

リポジトリで構成する各リレーショナル・データ・ソースごとに、そのデータ・ソースに限定して適用される追加機能を使用可能にすることができます。QMF カタログ・プラグインは、このような機能の一例です。リレーショナル・データ・ソース用の QMF カタログ・プラグインを使用可能にすると、ユーザーは、データ・ソースに接続されているときはいつでも、指定した QMF カタログにアクセスできます。

リレーショナル・データ・ソースのプラグインを使用可能にするには、以下のようになります。

手順

1. 「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページを開きます。
2. QMF カタログを使用するようにこのデータ・ソースを構成するには、「プラグインを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「QMF カタログ・ウィザード」が開きます。詳しくは、86 ページの『QMF カタログ機能を使用可能にする』を参照してください。ウィザードの処理の完了時に、制御が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にする」ページに戻ります。
3. QMF カタログが、このリレーショナル・データ・ソースに対して使用可能になります。デフォルトでは、リポジトリに表示されるときに QMF カタログのノード・ラベルは、「QMF カタログ」になります。固有の名前を指定できます。「カタログ・ラベル」フィールドに、この QMF カタログを識別するために使用する名前を入力します。オプションで、QMF カタログを説明するコメントを「コメント」フィールドに入力することができます。
4. QMF カタログ・プラグイン・パラメーターを変更するには、「パラメーター」をクリックします。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウが開きます。パラメーター変更の完了時に、制御が「リレーショナル・データ・

ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にする」ページに戻ります。「QMF カタログ・プラグイン・パラメーター」ウィンドウは、「リポジトリ」ビューから、データ・ソースを右クリックして、ポップアップ・メニューから「プロパティ」を選択し、「プロパティ」リストで「プラグイン」を選択して開くこともできます。

5. デフォルトでは、リポジトリに表示されるこのリレーショナル・データ・ソースのすべてのネイティブ・データベース・オブジェクトのノード・ラベルは、「データベース」になります。固有の名前を指定できます。「ラベル」フィールドに、これらのデータベース・オブジェクトを識別するために使用させたい名前を入力します。また、「コメント」フィールドに、ネイティブ・データベース・オブジェクトについて説明するコメントを入力することもできます。
6. 使用しているデータベースで IDAA がサポートされている場合は、「加速データベース・プラグイン」が、データ・ソースの「プロパティ」ページで使用可能になります。「パラメーター」をクリックして、「アクセラレーター」表の保護オプションを構成します。この手順は、QMF カタログ表の保護オプションの構成と同じです。詳しくは、135 ページの『QMF カタログ表の保護とユーザー許可の付与』を参照してください。
7. 「次へ」をクリックします。「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの 3 ページ目が開き、そこからデータ・ソースのリソース限界プロバイダーを選択します。

リソース限界プロバイダーの選択:

リレーショナル・データ・ソースの構成における 3 番目のステップは、データ・ソースへのアクセスを制御するリソース限界を、リポジトリから提供するかまたは QMF カタログから提供するかを指定することです。

このタスクについて

リレーショナル・データ・ソースのリソース限界プロバイダーを指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「リソース限界プロバイダーを選択します」ページを開きます。
2. 「リソース限界プロバイダー」ドロップダウン・リストから、このデータ・ソースのリソース限界を定義する位置を選択します。次のような選択肢があります。
 - リソース限界をリポジトリに定義する場合は、「リポジトリ」を選択します。
 - リソース限界を QMF カタログに定義する場合は、「QMF カタログ」を選択します。このオプションは、データ・ソースの QMF カタログ・プラグインを使用可能に設定した場合にのみ、使用できます。
3. 「終了」をクリックします。リポジトリ内のリレーショナル・データ・ソースを構成するプロセスを完了しました。ここでデータ・ソースの機能セットをカスタマイズできます。
4. リソース限界を追加、編集、または削除するには、「リポジトリ」ビューでデータ・ソースを (作成後に) 右クリックし、ポップアップ・メニューから「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ツリーから「リソース限界」を

選択します。リソース限界グループ、スケジュール、およびユーザー割り当てを追加、編集、および削除することができます。

データ・ソース・リソース限界の設定:

個別のユーザーまたはユーザーのグループがデータ・ソースにアクセスするときにそれらのユーザーまたはグループに適用できる、リソース限界の 1 つ以上の固有セットを設定できます。

このタスクについて

「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードは、リポジトリに追加するすべてのデータ・ソースに対してリソース限界のデフォルト・セットを作成します。リソース限界プロバイダーの選択に基づいて、データ・ソースのデフォルトのリソース限界は、リポジトリまたは QMFQMF カタログに保管されます。QMF for Workstation のすべてのユーザーのデータ・ソースでのリソース使用量は、デフォルト・セットのリソース限界により自動的に制御されます。デフォルトのリソース限界は、制限は設定されておらず、常時アクティブです。

デフォルトのリソース限界を変更するか、または新規で固有のリソース限界をデータ・ソースに対して設定するには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「データ・ソース」タブで、リレーショナル・データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。
2. データ・ソースにすでに存在しているすべてのリソース限界グループは、「リソース限界グループ」リスト・ボックスにリストされます。すべてのデータ・ソースに、デフォルト という名前のリソース限界グループがあります。デフォルト・リソース限界グループには、すべてのユーザーが割り当てられており、リソースの制限は設定されていません。データ・ソースに存在する特定のリソース限界グループを検索するには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドと「リスト最新表示」ボタンを使用します。データ・ソースに存在するすべてのリソース限界グループをリストするには、「名前的一致するリソース限界グループを表示する」フィールドにパーセント (%) 記号を入力します。
3. 「追加」をクリックして、データ・ソースの新しいリソース限界グループを作成します。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。

注: 「追加」ボタンは、QMF カタログ・リソース限界プロバイダーのデータ・ソースでは常に使用可能です。ただし、制限が QMF カタログではなくリポジトリに保管されている場合、「追加」は、保護されたリポジトリに存在するデータ・ソースに対してのみ使用可能です。

4. スケジュールを作成し、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択して「編集」をクリックすることで、リソース限界グループのリソース限界値を指定します。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。

5. 「リソース限界グループ」リスト・ボックスからリソース限界グループを選択し、「割り当て」をクリックすることで、ユーザーをリソース限界グループに割り当てます。リポジトリをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「[リソース限界グループ名]の割り当て」ウィンドウが開きます。QMFカタログをリソース限界プロバイダーとして使用している場合は、「ユーザー・プロファイルを [リソース限界グループ名] に割り当て」ウィンドウが開きます。フィールド値を指定して、「OK」をクリックします。

注: 「割り当て」ボタンは、以下のシナリオでのみ使用可能です。

- リソース限界プロバイダーとしてリポジトリを使用しており、作業中のデータ・ソースが、保護されたリポジトリに存在している。
- QMF カatalogをリソース限界プロバイダーとして使用している。

6. リソース限界グループを削除するには、「リソース限界グループ」リスト・ボックスからグループを選択して、「削除」をクリックします。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループが除去されます。

注: 「削除」ボタンは、QMF カatalog・リソース限界プロバイダーのデータ・ソースでは常に使用可能です。ただし、制限が QMF カatalogではなくリポジトリに保管されている場合、「削除」は、保護されたリポジトリに存在するデータ・ソースに対してのみ使用可能です。

7. 「OK」をクリックして、「プロパティ」ウィンドウの「リソース限界」ページを閉じます。

注: リソース限界が QMF サーバーのデータ・ソース・レベル、および QMF クライアントの照会レベルで設定されている場合、QMF はその 2 つのうち最も制限の厳しい限界を適用します。例えば、「取り出す最大行数」限界が照会レベルでは 150,000 行に、データ・ソース・レベルでは 100,000 行に設定されていると、QMF は、照会の実行時にデータ・ソース限界である 100,000 行を適用します。この場合、数が少ない方がより制限的な限界を意味するからです。この選択プロセスは、照会レベルとデータ・ソース・レベルの両方で設定されているリソース限界すべてで同様に行われます。

リソース限界グループの定義:

リソース限界グループとは、グループに割り当てられた各ユーザーに対して、指定したスケジュールに基づいて一括して適用されるリソース限界セットのことです。リソース限界グループは任意の数だけ作成でき、各グループには、別々のスケジュールに基づいて適用される別々のリソース限界セットを設定できます。

リソース限界グループを設定する際には、さまざまな基準を組み合わせることができます。リソース限界グループを設定してリソース使用を制限するための最も一般的な方法は、次の基準を使用することです。

- データ・ソース
- ユーザー
- 曜日
- 時刻

例えば、リソース限界グループには、平日の午前 8 時から午後 6 時までの間有効である 1 セットの限界と、週末および営業時間外に有効である別の限界のセットを

入れることができます。また、リソース限界グループごとに異なるユーザー群を割り当てて、これらのユーザーが、特定のデータベース・データ・ソース上で、または特定の照会の実行時に、特定の機能のみを実行できるように設定できます。

デフォルトのリソース限界グループ:

初期設定では、すべてのユーザーがデフォルトのリソース限界グループに割り当てられます。これ以外のリソース限界グループに割り当てられていないユーザーは、このデフォルト・リソース限界グループで定義されている限界に基づいて管理されます。

デフォルト・リソース限界グループには、デフォルトのリソース限界セットとデフォルトのスケジュールが割り当てられています。デフォルトのリソース限界は制限的なものではなく、デフォルトのスケジュールでは、リソース限界はすべての曜日で 24 時間適用されます。デフォルト・リソース限界グループを編集して、リソース限界とスケジュールを変更できます。

注: リソース限界は常にアクティブです。リソース限界グループを設定していない場合でも、デフォルトのリソース限界に基づいた管理が行われます。このため、デフォルト・リソース限界グループに設定されている限界を調べて、デフォルト・グループに基づいて管理されている未割り当てユーザーに、意図しているよりも広範囲または制限的な限界が適用されていないことを確認する必要があります。

リソース限界グループのセキュリティの確保:

各ユーザーに指定された限界を保護するために、QMF カタログ・ベースのリソース限界グループは、QMF カタログの一部である、データベース・サーバー上の `RDBI.RESOURCE_TABLE` という表に安全に保管されています。

リソース限界グループに変更を加えるには、データベース・サーバー上で QMF アプリケーションのパッケージを実行する許可が必要です。これにより、許可のないユーザーがリソース限界を変更することが防止されます。

リソース限界の表には、`RDBI.RESOURCE_VIEW` という名前のビューが定義されています。QMF アプリケーションはこのビューを使用してリソース限界情報にアクセスするため、この表は変更されず元の状態のままです。

注: デフォルト・リソース限界グループのリソース限界情報は、データベース・サーバー上の `RDBI.RESOURCE_TABLE` ではなく、リポジトリに保管されています。このため、リポジトリにアクセスできるユーザーであれば、デフォルト・リソース限界グループのリソース限界に変更を加えることができます。

リソース限界グループの作成:

リソース限界グループとは、グループに割り当てられた各ユーザーに対して、一括して適用されるリソース限界セットのことです。

このタスクについて

リポジトリに追加するデータ・ソースごとに、1 つ以上のリソース限界グループを作成できます。リソース限界グループは、以下のシナリオで作成できます。

- リソース限界プロバイダーとしてリポジトリを使用しており、作業中のデータ・ソースが、保護されたリポジトリに存在している。
- QMF カタログをリソース限界プロバイダーとして使用している。

リソース限界グループを作成するには:

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「データ・ソース」タブで、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループを選択します。「追加」アイコンをクリックします。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが開きます。
2. 「グループ名」フィールドにグループの名前を入力します。名前には何も制限はありません。
3. オプション: 「コメント」フィールドに、このリソース限界グループについて説明するコメントを 80 文字以内で入力できます。
4. デフォルト・グループと同じスケジュールを持つリソース限界グループを作成する場合は、「デフォルト・グループのスケジュールを使用してこのグループを作成する」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、新規リソース限界グループにスケジュールはありません。リソース限界グループのスケジュールは、「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウを使用して作成または変更できます。
5. 「OK」をクリックします。「新規リソース限界グループ」ウィンドウが閉じます。新しいリソース限界グループが作成されます。制御が「リソース限界」ウィンドウに戻ります。リソース限界を設定するために実行する次のステップは、リソース限界グループのスケジュールの作成または編集です。

リソース限界の値の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウで、当該スケジュール期間中に有効にするリソース限界を入力します。

このタスクについて

個々のリソース限界を指定するには、以下を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「データ・ソース」タブで、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。「リソース限界グループ」リスト・ボックスから、リソース限界グループを選択します。「編集」アイコンをクリックします。「リソース限界グループの編集」ウィンドウが開きます。「スケジュール・リスト」からスケジュールを選択します。「編集」をクリックします。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが開きます。

2. 次に示す「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの各ページで、選択したリソース限界グループ・スケジュールのリソース限界を設定するためのパラメーターを指定します。
- 「メイン」ページを選択して、スケジュールに優先順位を割り当て、スケジュールを有効にする時刻と曜日を指定します。これらのパラメーターは、新しいスケジュールの作成時に指定する必要があります。「デフォルト」リソース限界グループの場合、このページは使用できません。
 - 「タイムアウト」ページを選択して、アイドル照会、アイドル接続、サーバー応答時間のそれぞれの警告限界とキャンセル限界を指定します。
 - 「限界」ページを選択して、検索可能な最大行数と最大データ・バイト数の警告限界とキャンセル限界を指定します。さらに、このページでは、同時に確立できるデータベース・サーバーへの最大接続数も指定します。
 - 「SQL 動詞」ページを選択して、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーが、このスケジュールが有効になっているときに使用できるSQL 動詞を制限します。
 - 「オプション」ページを選択して、アクセスのオプションを指定します。指定するオプションには、次のようなものがあります。QMF for Workstationのユーザー・インターフェースやプログラミング・インターフェースを使用したデータベース・データ・ソース・アクセス。データベース更新の確認。ユーザー照会の分離レベル。必須のアカウント情報。すべての行の自動取り出し、データのエクスポート、表の編集、保存済み照会のみの実行などを行う機能。
 - 「データの保存」ページを選択して、このスケジュールを使用している、このリソース限界グループに割り当てられたユーザーに対して、データベース・サーバーにデータを保存することを許可します。
 - 「バインド」ページを選択して、このスケジュールを使用している、このリソース限界グループに割り当てられたユーザーに対して、照会のための静的パッケージをバインドまたは除去することを許可します。
 - 「オブジェクト・トラッキング」ページを選択して、QMF for Workstationのオブジェクト・トラッキングをオンにします。有効なオブジェクト・トラッキング報告書を得るためには、オブジェクト・トラッキングをオンにする必要があります。
 - 「LOB オプション」ページを選択して、このリソース限界グループに割り当てられていてこのスケジュールを使用するユーザーに対し、ラージ・オブジェクト・データ (LOB) を含む表へのアクセスを許可します。
 - 「レポート・センター」タブを選択して、リソース限界グループのメンバーに許可される QMF for Workstation/WebSphere レポート・センター機能のレベルを指定します。
 - 「キャッシュ」ページを選択して、ユーザーごとのキャッシング・オプションを制御します。
 - 「オブジェクト・リスト」ページを選択して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用されるデフォルト所有者名を定義して、デフォルト名とは別にデータ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用できる具体的な所有者名リストを指定します。
 - 「加速」ページを選択して加速オプションを指定します。

注: 加速を有効にできるのは、IDAA をサポートする Db2 z/OS データベースに対してのみです。

3. 「OK」をクリックします。「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウが閉じます。リソース限界パラメーターに加えたすべての変更が保存されます。「リソース限界グループの編集」ウィンドウは開いたままです。

メイン・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「メイン」ページで、スケジュールが有効になる日時を指定します。

メイン・リソース限界は、以下のとおりです。

番号 このリソース制限は、「新規リソース限界グループ・スケジュール」ウィンドウでのみ使用可能です。このテキスト・フィールドには、1 から 99 までの番号を設定します。この番号はスケジュールの識別に使用され、スケジュールの優先順位を表します。番号は、スケジュールが作成されたときのみ、スケジュールに割り当てられます。スケジュール番号は固有でなければなりません。いったん割り当てられると、スケジュール番号および割り当てられた優先順位を変更できません。

スケジュールの優先順位番号は、スケジュールが重なる場合、どちらのスケジュールが有効であるかを判別するために使用されます。リソース限界グループ内の 2 つのスケジュールが、同一時間枠に重なる場合は、番号の低いスケジュールが優先されます。

日付範囲

ドロップダウン・リストから、スケジュールの開始日となる曜日、および終了日となる曜日を選択します。スケジュールがアクティブになるのは、開始日から終了日まで (開始日と終了日を含む) となります。週末にまたがる日付範囲を指定することができます。例えば、金曜日から月曜日までを選択すると、スケジュールが金曜日、土曜日、日曜日、および月曜日までアクティブになります。逆に、月曜日から金曜日までを選択すると、スケジュールが月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、および金曜日までアクティブになります。

時刻範囲

ドロップダウン・リストから、スケジュールを開始および終了する時刻を選択します。スケジュールがアクティブになるのは、開始時刻から終了時刻まで (終了時刻を含む) となります。時刻は 24 時間表示を使用して指定されます。深夜にまたがる時刻範囲を指定することができます。例えば、23:00 から 7:00 までを選択すると、スケジュールが夜の 11:00 から朝の 7:00 までアクティブになります。逆に、7:00 から 23:00 までを選択すると、スケジュールが朝の 7:00 から夜の 11:00 までアクティブになります。

状況 これらのラジオ・ボタンを使用すると、個々のスケジュールの状況を設定できます。リソース限界グループ全体の状況は、「リソース限界グループの編集」ウィンドウの「状況」ボタンを使用して設定し、個々のスケジュール状況より優先されます。状況には、以下の 2 つの選択項目があります。

- 「アクティブ」を選択して、このスケジュールをアクティブにします。
- 「非アクティブ」を選択して、このスケジュールを非アクティブにします。非アクティブなスケジュールは、それをアクティブにするまで、ま

たはスケジュールをリソース限界グループから削除するまで、定義されたまま残ります。スケジュールはいつでもアクティブにすることができます。

タイムアウト・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「タイムアウト」ページで、アイドル照会、アイドル接続、およびデータ・ソース応答時間のタイムアウト警告限界とタイムアウト取り消し限界を設定します。

「タイムアウト」リソース限界は、以下のとおりです。

アイドル照会タイムアウト

これらのフィールドは、照会がアイドル状態を維持できる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、照会を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、照会がアイドルの状態で見られる秒数を表示します。「取り消し限界」フィールドは、照会が自動的に取り消されるまでの、照会がアイドルの状態で見られる秒数を表示します。

サーバー応答タイムアウト

これらのフィールドは、データベースからの応答の待機に費やすことができる時間を指定します。「警告限界」フィールドは、ユーザーに通知が出され、データベース要求を取り消すかどうかの確認が行われるまでの、経過時間 (秒単位) を指定します。「取り消し限界」フィールドは、データベース要求が自動的に取り消されるまでの経過時間 (秒単位) を指定します。

注: タイムアウト限界を短くすると、実行時間が長いランナウェイ照会を防止できます。タイムアウト限界を大きくすると、リソースの競合などが原因でデータベース・サーバーの処理が遅い場合でも、データベース要求を完了することができます。

アイドル接続タイムアウト

このフィールドは、データベース・データ・ソースへのアイドル接続が保持される時間を指定します。「取り消し限界」フィールドは、アイドル接続が自動的に閉じられるまで保持される秒数を指定します。

注: タイムアウト限界を低くすると、アイドル接続によりデータベースで使用されるリソースが最小化されます。タイムアウト限界を高くすると、接続の確立に要するオーバーヘッドが最小化されます。

限界リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「限界」ページで、データベース・データ・ソースから取り出せる最大行数と最大データ・バイト数の警告限界と取り消し限界を設定します。また、データ・ソースに対して確立できる最大同時接続数も指定できます。

「限界」リソース限界は、以下のとおりです。

取り出す最大行数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータの行数の限界を指定します。「警告限界」フィールドは、限界行数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソース

から検索できる行数を指定します。ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」フィールドには、限界行数に達するまでに、データ・ソースから検索できる行数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

取り出す最大バイト数

これらのフィールドには、照会の実行時にデータベース・データ・ソースから検索できるデータのバイト数の限界を指定します。「警告限界」は、限界バイト数に達したことがユーザーに通知されるまでに、データ・ソースから検索できるバイト数を指定します。その後ユーザーには、データをさらに取り出すか照会を取り消すかを選択するようプロンプトが出されます。「取り消し限界」には、限界バイト数に達するまでに、データ・ソースから検索できるバイト数が表示されます。照会は自動的に取り消されます。

最大接続数

このフィールドは、データベース・データ・ソースに対して確立できる同時接続数の限界を指定します。「取り消し限界」は、次の接続を要求する照会が自動的に取り消されるまでに、データ・ソースに対して確立できる同時接続数を指定します。限界を 0 に設定すると、接続の限界数が設定されません。

一般に、データベース・データ・ソースへの接続は再利用されます。あるデータ・ソースで 1 つの照会を実行し、その後同じデータ・ソースで別の照会を実行する場合、必要な接続は 1 つだけです。ただし、この 2 つの照会を同時に実行する場合は、2 つの接続が必要となります。データ・ソースとの別の接続を必要とする場合にこの限界に達すると、エラーが戻されて操作は実行されません。

注: 表の編集を可能にするには、2 つ以上の同時接続が許可されていることを指定する必要があります。

SQL 動詞リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「SQL 動詞」ページで、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーが、このスケジュールが有効な場合に使用できる SQL 動詞を指定します。

ユーザーが不許可動詞が含まれた照会を実行しようとした場合は、データ・ソースに SQL が送信されずに、照会が取り消されます。「SQL 動詞」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。

以下の SQL 動詞の使用を制御できます。

- ACQUIRE
- ALTER
- CALL
- COMMENT
- CREATE
- DELETE
- DROP
- EXPLAIN

- GRANT
- INSERT
- LABEL
- LOCK
- REFRESH
- RENAME
- REVOKE
- SET
- SELECT
- UPDATE

オプション・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オプション」ページで、データ・ソースとデータ・ソース・オブジェクトに対してユーザーが持つアクセス・レベルを指定します。

オプション・リソース限界は以下のとおりです。

ユーザー・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation ユーザー・インターフェースからデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

プログラミング・インターフェースからデータ・ソースへアクセスを許可

このフィールドは、現在のリソース限界グループ・スケジュールが有効な場合に、QMF for Workstation アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) からデータ・ソースにアクセスする許可がユーザーにあるかどうかを指定します。

すべての行を自動的に取り出す

このフィールドは、データ・ソースが照会結果データをアプリケーションに送信する方法を指定します。デフォルトでは、照会結果の表示の必要に応じて、データ・ソースからデータを要求します。例えば、照会結果ウィンドウが 20 行でいっぱいになる場合、データ・ソースには 20 行しか要求されません。ユーザーがスクロールダウンして 21 行目が表示されるようにすると、さらにデータが要求されます。ユーザーが照会を実行してからスクロールダウンするまで時間がある場合、その待ち時間の間も照会はアクティブのままであり、その間データ・ソースのリソースを消費していることとなります。このパラメーターを使用可能にすると、ユーザーのスクロール要求に関係なく、すべてのデータが受信されるまで繰り返しデータが要求されます。

データベース更新を確認

このフィールドは、実行した照会や表の編集時のアクションの結果として生じたデータ・ソースの変更をすべて確認する必要があるかどうかを指定します。このチェック・ボックスを選択した場合は、データ・ソースが変更される前に、確認のプロンプトが出されます。このチェック・ボックスをクリアすると、確認なしでデータ・ソースの変更が行われます。

プロシージャー・コマンドに確認パラメーターを使用することで、このリソース限界設定をオーバーライドできます。以下の表は、指定された値に応じたパラメーターの相関を示しています。

「データベース更新を確認」の値	プロシージャーのパラメーター値	確認ダイアログの動作
選択	CONFIRM=YES	表示
選択	CONFIRM=NO	表示されない
選択	未指定	表示
クリア	CONFIRM=YES	表示
クリア	CONFIRM=NO	表示されない
クリア	未指定	表示されない

データのエクスポートを可能にする

このフィールドは、「ファイル」メニューの「エクスポート」コマンド、または「**EXPORT DATA**」プロシージャー・コマンドを使用して、ユーザーが照会結果データをファイルにエクスポートできるかどうかを指定します。

表の編集を可能にする

このフィールドは、表エディター・フィーチャーを使用して表を編集できるかどうかを指定します。

保存済みの照会のみ実行を許可

このフィールドは、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。チェック・マークを付けた場合は、データベース・データ・ソースに保存済みの照会のみ実行できます。クリアされている場合は、データベース・データ・ソースにある照会を実行できるだけでなく、新しい照会を作成してデータベース・データ・ソースに保存することもできます。

照会の分離レベル

「照会の分離レベル」パラメーターは、トランザクションをサポートするデータベースにのみ適用されます。

このフィールドは、ユーザーの照会に適用される、トランザクションの分離レベルを指定します。さまざまな分離レベルがあり、レベルごとにデータベースでのトランザクション処理に与える影響の度合いが異なります。

データベース管理者に問い合わせるか、データベース・サーバーの資料を参照し、使用中のデータベース・サーバーがトランザクション処理をサポートするように構成されているかどうかを判別してください。

有効な値は以下のとおりです。

- 「デフォルト」は、照会の分離レベルがすべてのアプリケーションに指定されるデフォルトになることを指定します。
- 「反復可能読み取り」は、照会の分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、他のアプリケーションから最も強固に保護します。
- 「すべて (RS)」は、照会の分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。

- 「カーソル固定 (CS)」は、照会の分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、データ保全性と共に最大の並行性を提供します。
- 「変更 (UR)」は、照会の分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。これは、アプリケーションが非コミット・データを読み取ることを可能にします。
- 「コミットしない (NC)」は、照会の分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。分離レベル NC で実行されるアプリケーションは、データベースの永続的な変更を行うことはできません。

アカウント

このフィールドは、データ・ソースに接続するときそのデータ・ソースに送信されるデフォルトのアカウント情報を指定します。

アカウントをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「アカウント」フィールドで指定されたデフォルトのアカウント情報、データ・ソースに接続するときオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、「ユーザー情報の設定」ウィンドウを使用して、新しいアカウント・ストリングを入力できます。これがクリアされていると、新しいアカウント情報を入力できません。そのため、自分のリソース限界グループが所有していないデータ・ソース・オブジェクトにアクセスできない場合があります。

アカウント情報の要求

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合、データベースに接続する前に、「ユーザー情報の設定」ウィンドウに有効なアカウント・ストリングを指定しなければならないかどうかを指定します。

印刷を許可

データ・ソースに保管されているオブジェクトを印刷するためには、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

データの保存リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「データの保存」ページで、このリソース限界グループに割り当てられているユーザーで、このスケジュールを使用しているユーザーが、データベース・データ・ソースにデータを保存できるかどうかを指定します。

「データの保存」リソース限界は、データ・ソースについてのみ設定できます。「データの保存」リソース限界は、以下のとおりです。

データの保存コマンドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースにデータを保存できるかどうかを指定します。データの保存は、リソースをかなり消費する可能性があります。そのため、データの保存によって、データベースやネットワークに重大な影響を与えるおそれがあります。

デフォルト表スペース

このフィールドは、データの保存コマンドで作成される表に使用されるデフォルトの表スペース名を指定します。このフィールドは、「データの保存コマンドを許可」が選択されている場合のみ使用可能です。指定する表スペース

ス名の構文は、表スペース名に関するデータベース規則に従わなければなりません。指定した値は、データを新しい表に保存するときに実行される CREATE TABLE SQL ステートメントの一部として使用されます。アスタリスク (*) を入力すると、デフォルトの表スペースの取得が、ユーザーのプロファイルが作成されたときに管理者によって指定された RDBI.PROFILE_TABLE または Q.PROFILES にある同プロファイルから行われることを指定します。

デフォルト表スペースをオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルトの表スペースをオーバーライドできるかどうかを指定します。これを選択した場合は、データベース・セキュリティ権限に従って表スペース名を指定できます。このチェック・ボックスを選択しない場合は、「デフォルト表スペース」フィールドで指定した表スペース名を使用する必要があります。

既存のデータを置換できるようにする

このフィールドは、オブジェクトがデータベースとの間でエクスポートまたはインポートされたときに、ユーザーが既存データをオーバーライドできるかどうかを指定します。このオプションが選択されている場合、ユーザーはデータベース内の新規データで既存データを置換できます。このチェック・ボックスにマークが付いていない場合、ユーザーは新規データを既存データに追加することのみが可能です。

バインド・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「バインド」ページで、このリソース限界グループに割り当てられていて、かつこのスケジュールを使用しているユーザーが、照会の静的パッケージをデータ・ソースにバインドしたり、データ・ソースから除去したりできるかどうかを指定します。

「バインド」リソース限界は、以下のとおりです。

パッケージのバインドを許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースに照会の静的パッケージをバインドできるかどうかを指定します。

パッケージの除去を許可

このフィールドは、データベース・データ・ソースから静的パッケージを除去できるかどうかを指定します。

デフォルト集合 ID

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルト集合 ID を指定します。

デフォルト集合 ID をオーバーライド可能にする

このフィールドは、デフォルト集合 ID を使用しなければならないかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、データベース・セキュリティ権限に従って集合 ID を指定できます。このチェック・ボックスがクリアされている場合は、「デフォルト集合 ID」フィールドで指定されたデフォルトの集合 ID を使用する必要があります。

デフォルト分離レベル

このフィールドは、バインドする静的パッケージのデフォルトの分離レベルを指定します。以下の分離レベルのいずれか 1 つを選択できます。

- 「反復可能読み取り」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「反復可能読み取り (RR)」になることを指定します。RR 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行 (幻像読み取り行を含む) に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。RR 分離は、最も高い保護レベルを提供します。
- 「すべて (RS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「読み取り固定 (RS)」になることを指定します。RS 分離レベルは、リクエスターが読み取りおよび変更する行に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「カーソル固定 (CS)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「カーソル固定 (CS)」になることを指定します。CS 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントおよびデータベース・カーソルが位置付けられている現在行を分離します。
- 「変更 (UR)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「非コミット読み取り (UR)」になることを指定します。UR 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離します。
- 「コミットしない (NC)」は、静的パッケージのデフォルト分離レベルが「コミットしない (NC)」になることを指定します。NC 分離レベルは、リクエスターが行う変更に対する同時ユーザーのアクションから、静的パッケージの SQL ステートメントを分離しません。

デフォルト分離レベルをオーバーライド可能にする

このフィールドは、「デフォルト分離レベル」フィールドに指定した分離レベルをオーバーライドできるかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択された場合は、パッケージのバインド時に任意の分離レベルを指定できます。このチェック・ボックスが選択されていない場合は、「デフォルト分離レベル」フィールドで指定されたデフォルトの分離レベルを使用して静的パッケージをバインドする必要があります。

オブジェクト・トラッキング・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オブジェクト・トラッキング」ページで、オブジェクト・トラッキングをアクティブにします。

オブジェクト・トラッキング報告書の作成に使用されるトラッキング・データを収集するためには、オブジェクト・トラッキングを使用可能にする必要があります。オブジェクト・トラッキング報告書は、未使用オブジェクトを検索したり、表や列などの頻繁にアクセスされるデータ・ソースを検索したり、潜在的な問題領域を発見したりするのに役立ちます。

オブジェクト・トラッキング・リソース限界は以下のとおりです。

要約オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて要約オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。要約トラッキングは、オブジェクトの実行回数と、オブジェクトが最後に実行された時刻および変更された時刻を記録します。

明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、自分のリソース限界グループについて明細オブジェクト・トラッキングをアクティブにするかどうかを指定します。明細トラッキングは、オブジェクトが実行された時刻、オブジェクトの実行者、およびその結果を記録します。このオプションを選択した場合は、大量のデータが収集される可能性があります。

注: 随時 オブジェクト・トラッキングや SQL テキストのトレースを使用するには、このオプションを使用可能にする必要があります。

随時オブジェクト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各随時照会のレコードを、要約または明細オブジェクト・トラッキング表に保持するかどうかを指定します。随時照会とは、データベース・データ・ソースで名前が付いていないまたは保存されていない照会です。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

SQL テキスト・トラッキングを使用可能にする

このフィールドは、各照会の SQL テキストのレコードを明細トラッキング表に保持するかどうかを指定します。

注: このオプションを有効にするためには、「明細オブジェクト・トラッキングを使用可能にする」オプションを有効にする必要があります。

最終使用タイム・スタンプ・オプション

このフィールドは、データ・オブジェクトがいつ更新されるのか、およびどのコマンドにより更新されるのかを指定します。

注: オブジェクトが QMF カタログに保存される場合、データは表 **Q.OBJECT_DIRECTORY** の列 **LAST_USED** に保持されます。オブジェクトがリポジトリに保存される場合は、データは表 **RSBLOBJECTS** の列 **LAST_USED** に保持されます。

使用可能なオプションは次のとおりです。

- オブジェクトがアクセスされたときに更新 (レガシー・モード)

オブジェクトに対して以下のいずれかのコマンドを実行したときにデータは更新されます。

- **CONVERT**
- **DISPLAY**
- **EXPORT**
- **IMPORT**
- **PRINT**

- RUN
- SAVE
- オブジェクトが実行、保存、またはインポートされたときに更新

RUN、SAVE、または IMPORT コマンドの実行後にデータは更新されます。

- オブジェクトが実行されたときにのみ更新

RUN コマンドの実行後にのみデータは更新されます。

最終使用タイム・スタンプ・オプションを上書きできる

DSQEC_LAST_RUN 変数値が無視されるかどうかを示します。

デフォルトでは、このチェック・ボックスはクリアされています。

変数値を変更してリソース限界をオーバーライドする場合は、このチェック・ボックスを選択します。

LOB オプション・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「LOB オプション」ページでは、ラージ・オブジェクト (LOB) が含まれる表へのアクセス、これらの表からのデータ検索、およびこれらの表へのデータ保存について、ユーザーが行える操作を制御します。

ラージ・オブジェクト (LOB) とは、Db2 for z/OS および Db2 for Linux, UNIX, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声といった特殊なデータ、または任意の大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存するには、大量のリソースが消費されることがあります。場合によっては、LOB データが含まれた表にアクセスするだけでも、多くのリソースが消費されます。「LOB オプション」リソース限界を使用すると、LOB データを含むデータベース・データ・ソース上の表へのアクセスを制御できます。

「LOB オプション」リソース限界は、以下のとおりです。

LOB 検索オプション

このフィールドは、このスケジュールが有効な場合に、ラージ・オブジェクト (LOB) データをユーザーが検索できるかどうかを指定します。以下のいずれかを選択できます。

- 「LOB 列を使用不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないこと、および LOB データが含まれる表に対して照会もアクセスもできないことを指定します。
- 「LOB データの検索を不可にする」は、ユーザーは LOB データを検索できないが、LOB データが含まれる表を照会できることを指定します。照会結果データは、LOB データが含まれる列以外の、表のすべての列について戻されます。
- 「要求時に LOB データを検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。ただし、LOB

列の結果データは、実際に列には表示されません。ポインターが表示されます。ユーザーがポインターを選択すると、照会結果に LOB データが表示されます。

ポインターをダブルクリックすることにより、データベースからデータをプルすることもできます。

- 「LOB データを自動的に検索する」は、LOB データが含まれている表をユーザーが照会でき、LOB オブジェクトが含まれている列を含むすべての列に対する結果データが戻されることを指定します。

このオプションは、すべての LOB 列のすべての LOB データをデータベースからローカル・コンピューターにプルします。

このオプションを使用すると、大量のリソースと時間を消費する可能性があります。実際の LOB データは、グリッドや報告書には表示されません。代わりに、LOB データへのポインターが表示されます。

LOB データの保存を可能にする

このフィールドは、LOB データをデータベース・データ・ソースに保存できるかどうかを指定します。

LOB 列の最大サイズ

このフィールドには、LOB 列の最大サイズ (KB 単位) を指定します。2G (最大 LOB サイズ) まで指定できます。デフォルトは 0 (最大サイズ無し) です。最大サイズを超える LOB データがある表をユーザーが照会すると、LOB データは戻されません (表示されません)。

LOB オプションをオーバーライド可能にする

このフィールドは、ユーザーがグループに対して指定されているデフォルトの LOB オプション・リソース限界をオーバーライドできるかどうかを指定します。

レポート・センター・リソース限界の指定:

リソース限界グループのメンバーに許可されている QMF レポート・センター機能のレベルを制御することができます。

QMF レポート・センターで、データベース・サーバーに保管されている共有の照会、書式、プロシージャー、および表を使用して、カスタム報告書を生成することができます。その後、そのカスタム報告書を各種アプリケーションで表示および操作することができます。

リソース限界グループに許可されるレポート・センター機能を制御するには、「リソース限界グループの編集」ウィンドウの「レポート・センター」ページで各設定を指定します。

「レポート・センター」リソース限界は以下のとおりです。

すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーは、QMF レポート・センター報告書に使用されるオブジェクトへのアクセスが許可されます。

QMF レポート・センターのアプリケーションの使用または報告書の実行に、特別な許可は必要ありません。ただし、新しい報告を作成するには、保管オブジェクトにアクセスする必要があります。一部のユーザーは、これらのオブジェクトにアクセスするための権限を持っていない場合があります。このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーは、データベース・サーバーに保管されているオブジェクトにアクセスして、新しい報告書を作成することを許可されます。

注: デフォルトでは、「すべてのオブジェクト・タイプの表示を許可」チェック・ボックスが選択されています。

ルート・ノードの管理を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのメンバーに QMF レポート・センターのアプリケーションで使用されるルート・フォルダーの「共通のお気に入り」にフォルダーを追加することを許可します。「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバーに保管されています。

QMF レポート・センターは、「個人用お気に入り」と「共通のお気に入り」の 2 つの最上位フォルダーを使用してユーザーの報告書を保管します。各フォルダーには、データベース・サーバーにあるオブジェクトを指す報告書が含まれています。オブジェクトは、フォルダー内には含まれていません。

個人のお気に入り フォルダーは、ユーザーのマシン上にローカルに存在します。このフォルダーとそれに含まれている報告書には、作成者であるユーザーしかアクセスできません。

「共通のお気に入り」フォルダーは、データベース・サーバー上にあります。このフォルダーには、QMF レポート・センターのすべてのユーザーが(潜在的に) アクセスできます。ただし、第 1 レベルのサブフォルダーを「共通のお気に入り」フォルダーに追加するには、許可が必要です。このオプションは、それを行う許可を、このリソース限界グループのメンバーに与えます。

第 1 レベルのサブフォルダーを作成する許可を与えられた場合には、リソース限界グループのメンバーは、QMF レポート・センターの機密保護オプションを使用して、フォルダー内にある報告書を実行または修正できるユーザーを制御することができます。「共通のお気に入り」フォルダーは、最大 50 の第 1 レベルのサブフォルダーを保持できます。

注: デフォルトでは、「ルート・ノードの管理を許可」チェック・ボックスはクリアされています。

ノードの所有権の取得を許可

このチェック・ボックスを選択すると、このリソース限界グループのすべてのメンバーに、「共通のお気に入り」フォルダー内のフォルダーまたは報告書の所有権を取得する権限を許可します。

このチェック・ボックスが選択されている場合、ユーザーは、QMF レポート・センターの機密保護に基づくアクセス権が付与されているかどうかに関係なく、「共通のお気に入り」フォルダー内の任意の報告書またはフォルダーにアクセスできます。

注: デフォルトでは、「ノードの所有権の取得を許可」チェック・ボックスはクリアされています。

キャッシュ・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「キャッシュ」ページで、照会結果のキャッシングをアクティブにします。

このリソース限界を有効にすると、照会の実行時に結果がキャッシュされます。照会が再実行され、何も変更されていない場合、結果はデータ・ソースで再実行されるのではなく、キャッシュされた結果から取得されます。

「キャッシュ」リソース限界は、以下のとおりです。

キャッシュが使用可能

このフィールドは、結果セット・データのキャッシングを使用可能にするかどうかを指定します。デフォルトでは、キャッシングは使用不可に設定されています。キャッシングを使用可能にすると、照会の結果データがキャッシュに入れられ (保管され)、データ・ソースのこのデータにアクセスする同じ特権を持った他のユーザーがキャッシュ内の照会結果を使用できるようになります。結果セット・データのキャッシングは、リソース消費の軽減やパフォーマンスの向上にかなり効果がある場合があります。キャッシュ内の結果セット・データは、自動的にリフレッシュされません。

データの自動取り出しが使用可能

このフィールドは、キャッシュされたデータ行を取り出す方法を指定します。このリソース限界は、「キャッシュが使用可能」が選択されている場合に使用可能になります。このオプションを選択すると、キャッシュから照会結果セットが取り出される場合に、結果セット全体が渡されるようになります。このオプションを選択しない場合は、照会結果セットの 100 行 (デフォルト) が渡されます。

データ期限切れ間隔

このフィールドは、照会結果セット・データをキャッシュに残しておく期間を指定します。期間は、日数、時間数、および分数を指定することにより設定できます。この期間を過ぎると、キャッシュされた照会結果セット・データは更新されます。

キャッシュ・オプションを上書きできる

このフィールドは、キャッシュ・オプションをオーバーライド可能にするかどうかを指定します。

オブジェクト・リスト・リソース限界の指定:

「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「オブジェクト・リスト」ページで、データ・ソースのデフォルトの所有者名および許可された所有者名を指定します。

「オブジェクト・リスト」リソース限界を使用して、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を定義できます。デフォルト名他に、データ・ソース・オブジェクトのフィルター処理に使用できる所有者名の特定のリストを指定することもできます。

「オブジェクト・リスト」リソース限界は以下のとおりです。

デフォルト所有者名

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用するデフォルトの所有者名を指定します。

デフォルト所有者名を上書きできます

このチェック・ボックスにより、ユーザーは現在のデフォルトの所有者名をオーバーライドできるようになります。

許可された所有者の名前

このフィールドは、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できる追加の所有者名のリストを指定します。所有者名は、コンマで区切る必要があります。

<USERNAME> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの所有者名を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

<SQLID> を許可

このチェック・ボックスにより、現行ユーザーの SQLID を、データ・ソース・オブジェクト・リストのフィルター処理に使用できるようになります。

加速リソース限界の指定:

照会加速をアクティブ化するには、「リソース限界グループ・スケジュールの編集」ウィンドウの「加速」ページを使用します。「加速」ページを有効にできるのは、IDAA をサポートする Db2 z/OS データベースに対してのみです。

このリソース限界が有効になっているときは、現在使用しているデータベースに関連付けられているアクセラレーター・サーバーにデータを保存したり、加速された照会を実行したりできます。このリソース限界が無効になっているときは、加速された照会を実行できません。

「加速」ページには以下の設定が含まれています。

加速を有効にする

このチェック・ボックスは、加速を有効にするかどうかを指定します。

加速タイプ

このフィールドは、照会がデータベースで実行されるのかアクセラレーターで実行されるのかを決定する条件を指定します。使用可能なオプションは次のとおりです。

オプション	説明
NONE	これは、アクセラレーター・サーバーに照会が送信されないように指定します。
ENABLE	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の実行中にアクセラレーターが失敗する場合、またはアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからアプリケーションに負の SQLCODE が返されます。

オプション	説明
ENABLE WITH FAILBACK	これは、照会を加速することが好都合であるとデータベースで判断された場合に限り照会が加速されるように指定します。照会の PREPARE コマンドまたは初回 OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合、データベースではアクセラレーターなしで照会が実行されます。 FETCH コマンドまたは後続の OPEN コマンドでアクセラレーターからエラーが返される場合は、データベースからユーザーにエラーが返され、照会は実行されません。
ELIGIBLE	これは、照会が加速に適格である場合に照会が加速されるように指定します。加速に不適格な照会はデータベースで実行されます。照会を実行中にアクセラレーターで障害が発生した場合、またはアクセラレーターがエラーを返した場合、データベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。
ALL	これは、照会が加速に適格である場合に照会が加速されるように指定します。加速に不適格な照会はデータベースで実行されず、SQL エラーが返されます。照会を実行中にアクセラレーターで障害が発生した場合、またはアクセラレーターがエラーを返した場合、データベースはアプリケーションに負の SQLCODE を返します。

加速オプションをオーバーライドできる

このチェック・ボックスは、加速オプションをオーバーライドできるかどうかを指定します。

リソース限界グループへのユーザーの割り当て:

ユーザーは、具体的にリソース限界グループに割り当てる必要があります。

このタスクについて

割り当てると、各ユーザーが QMF for Workstation を使用して実行できる操作は、割り当て先のリソース限界グループのスケジュールに基づいて決定されます。どのリソース限界グループにも割り当てられていないユーザーはすべて、デフォルト という名前のデフォルト・リソース限界グループに自動的に割り当てられます。デフォルト・リソース限界グループのスケジュールには、制限は設定されていません。

ユーザーをリソース限界グループに割り当てるには、そのユーザーを QMF for Workstation に定義するための情報をまず指定する必要があります。ユーザーをアプリケーションに対して定義し、次いでユーザーをリソース限界グループに割り当てるというプロセスは、データ・ソースに対して選択されたリソース限界プロバイダーによっていくらか異なります。

リポジトリ・リソース限界グループへのユーザーの割り当て:

ユーザーをリポジトリ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、保護されたリポジトリの作成時にアクセスを付与されている、選択可能なユーザーおよびグループのリストから直接選択します。

このタスクについて

選択可能であるユーザーおよびグループは、リポジトリに選択されたセキュリティのタイプに基づいて定義されていました。LDAP セキュリティーが選択された場合、ユーザーおよびグループは LDAP サーバーから取得されました。内部セキュリティが選択された場合、「ユーザーおよびグループ」ビューを使用してユーザーおよびグループ情報を定義します。リポジトリにセキュリティが指定されておらず、リソース限界がリポジトリ・ベースである場合は、リソース限界グループを作成し、割り当てを行う権限はありません。

ユーザー情報またはリソース限界グループを作成する順番はどちらが先でもかまいません。ユーザー情報を先に作成してからリソース限界グループを作成することもできます。あるいは、リソース限界グループを先に作成してからユーザー情報を作成することもできます。このような柔軟性が備えられているのは、ユーザー情報とリソース限界グループの割り当ての作成と編集というものが、組織のニーズの変化に伴って継続していく作業であるためです。

ユーザーをリポジトリ・ベースのリソース限界グループに割り当てるには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「データ・ソース」タブで、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「リソース限界」タブをクリックします。タブで、「リストの最新表示」をクリックします。選択可能なリソース限界グループのリストから、リソース限界グループを選択します。「割り当て」をクリックします。「[リソース限界グループ名] への割り当て」ウィンドウが開きます。
2. データ・ソースに対して定義済みで、割り当て可能なユーザーの中で、まだ選択されたリソース限界グループに割り当てられていないユーザーは、「割り当てなし」リスト・ボックスにリストされます。選択されたリソース限界グループに割り当てられているユーザーは、「割り当て済み」リスト・ボックスにリストされます。「割り当てなし」リストにリストされているユーザーをフィルターに掛けるには、特定のユーザーのユーザー ID またはワイルドカード文字を「名前フィルター」フィールドに指定します。パーセント記号 (%) を指定すると、データ・ソースに対して定義されているすべてのユーザーのリストが生成されます。リストされていない場合、そのユーザーまたはグループは定義されていません。新規ユーザーまたはグループを定義し、次いでリストを再度フィルターに掛けることができます。
3. 「割り当てなし」リストから、リソース限界グループに割り当てるユーザーを選択します。「割り当て」をクリックします。このユーザーが「割り当て済み」リストに移動されます。

4. リソース限界グループからユーザーを除去する場合は、「割り当て済み」リストからそのユーザーを選択します。「割り当て解除」をクリックします。このユーザーが「割り当てなし」リストに移動されます。「割り当て済み」リストからすべてのユーザーを除去し、それらを「割り当てなし」リストへ移動する場合は、「すべて割り当て解除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。リソース限界グループのユーザー割り当てへの追加または変更が保存されます。

タスクの結果

注: リソース限界グループへのユーザー割り当ては、「リソース限界」ウィンドウの「割り当て」ページで行うこともできます。

すべてのリポジトリ・リソース限界グループのユーザー割り当ての管理:

データ・ソースに定義されている各ユーザーおよびグループは、1 つ以上のリポジトリ・リソース限界グループに割り当てることができます。

このタスクについて

「リソース限界」ウィンドウの「割り当て」ページには、データ・ソースに定義されている各ユーザーまたはグループと、データ・ソースに定義されている各リソース限界グループがリストされます。このウィンドウで、単一のダイアログからユーザーを 1 つ以上のリソース限界グループに割り当てることができます。

1 つのダイアログからすべてのリソース限界グループにユーザー割り当てを行うには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「データ・ソース」タブで、データ・ソースを右クリックします。ポップアップ・メニューで「プロパティ」を選択します。「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウが開きます。「リソース限界」をクリックします。「リソース限界」ウィンドウが開きます。これには 2 つのページがあります。「割り当て」タブをクリックします。
2. データ・ソースに定義されているユーザーおよびグループは、「ユーザーおよびグループ」フィールドにリストされます。すべてのグループを表示するには、「グループ」フォルダーを展開します。すべてのユーザーを表示するには、「ユーザー」フォルダーを展開します。
3. 各「ユーザーおよびグループ」セルには、対応する「リソース・グループ」ドロップダウン・リスト・ボックスがあります。「リソース・グループ」リストには、データ・ソースに定義されているすべてのリソース限界グループが表示されます。リソース限界グループを選択するには、ユーザーまたはグループの「リソース・グループ」セルをクリックし、下矢印をクリックし、選択可能なリソース限界グループのリストから新規リソース限界グループを選択します。
4. 「保存」または「OK」をクリックします。新しい割り当てが行われます。

追加パラメーターの指定:

データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「情報」ページで、追加のデータ・ソース・パラメーターを指定できます。

このタスクについて

データ・ソースがデータを取得する方法を決定する追加データ・ソース・パラメーターの設定を指定する必要があります。追加パラメーターを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、編集するデータ・ソースを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」ウィンドウが開きます。
2. 「情報」を選択します。「情報」ページングが開きます。
3. 「追加パラメーター」テーブルで設定を指定します。有効な追加パラメーターには次のものがあります。

ホスト **QMF** 列命名のエミュレート (**Db2** のみ)

データ・ソースがホスト **QMF** カタログの列命名規則をエミュレートするかどうかを指定します。このオプションは、**Db2** データ・ソースに対してのみ有効です。

地理情報拡張機能の使用可能化

データ・ソースに保管される地理情報データに対して拡張機能を使用可能にするかどうかを指定します。

スキーマ取得方式

データベースからスキーマを取得する方法を指定します。「**getTables**」を選択した場合、スキーマは表名別に編成されます。「**getSchemas**」を選択した場合、スキーマは所有者別に編成されます。

「**getTables/getSchemas**」を選択すると、「名前フィルターの設定」ダイアログで指定したフィルター・オプションに従ってスキーマが編成されます。「名前」フィールドに % 文字が含まれている場合、スキーマは所有者別に編成されます。「名前」フィールドにそれ以外のものが含まれている場合、スキーマは表名で編成されます。

注: 「**getTables/getSchemas**」は、**Db2** 以外のデータベースのデフォルトのスキーマ検索方法です。

照会メタデータを取得するためにデータベースにアクセスしない

照会メタデータをホスト・データベースから取得するかどうかを指定します。

照会の実行時間を短縮し、結果セットの表示を高速化するには、このパラメーターを使用します。デフォルトは **FALSE** です。このパラメーターを **TRUE** に設定すると、アプリケーションはデータベースを参照せず、メタデータを取得しません。そのため、結果セットの表示は高速化されますが、**R/W** (読み取りと書き込み) 照会量は、メタデータの取得時にこのパラメーターが **FALSE** に設定されている場合よりも小さくなります。

4. 追加パラメーターの指定を終えたら、「適用」をクリックします。変更内容がデータ・ソースに保存されます。
5. 「**OK**」をクリックします。「プロパティ」ウィンドウが閉じます。

QMF カタログ機能を使用可能にする:

リポジトリ内のリレーショナル・データ・ソースを構成して、QMF カタログを使用できるようにすることができます。QMF カタログへのアクセスを使用可能にすると、ユーザーは QMF カタログ内に保存されているオブジェクトへのアクセスが可能になり、必要に応じて新規オブジェクトを QMF カタログに保存できます。

このタスクについて

QMF カタログは、保存されたオブジェクト (照会、プロシージャ、書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、およびその他の各種設定と情報が入っているデータベース表のセットです。QMF カタログは、Db2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。

注: QMF カタログは、QMF 11 以降ではリポジトリに置き換えられています。QMF オブジェクトを QMF for TSO/CICS、または QMF 分散製品の以前のバージョンで共有するユーザーのために残されています。QMF バージョン 11 リポジトリはより柔軟性があり、ユーザーは強力な QMF バージョン 11 のすべての機能を活用できるようになります。

QMF カタログへアクセスするようにデータ・ソースを構成することにより、ユーザーは、既存の QMF カタログに保存されている任意の QMF オブジェクトを取得できます。また、ユーザーは、作成した QMF オブジェクトを QMF カタログに保存することもできます。これにより、ユーザーは、QMF オブジェクトを作成するために使用されたアプリケーションのバージョンまたはプラットフォームに関係なく、オブジェクトを共有および使用できます。

さらに、QMF カタログへアクセスするようにデータ・ソースを構成すると、データ・ソースおよびユーザーに設定され、QMF カタログに保存されたリソース限界によって、リソースの使用を制御できます。

データ・ソースを構成して、QMF カタログにアクセスできるようにするには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」を開きます。
2. 「QMF カタログ・ウィザード」の「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページを使用して作成するカタログ・オブジェクトのタイプを指定します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. QMF カタログ表のセットがデータ・ソースで作成されなかったことが分かった場合は、「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きます。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。ウィザードの「オブジェクトの作成」ページが開きます。カタログ表を作成する SQL が表示されます。SQL に対して変更を加えることができます。QMF カタログ表のセットがこのデータ・ソースにすでに作成され、必要な更新がない場合、このステップは迂回されます。
5. 「次へ」をクリックします。
6. ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。「QMF カタログ表の保護」ページで、QMF カタログ表を無許可のユーザーから保護するかどうか

うかを指定します。さらに、それらのストアド・プロシージャまたは SQL パッケージを使用するためのユーザー許可を指定します。

7. 「次へ」をクリックします。
8. ウィザードの「QMF カタログの選択」ページが開きます。「QMF カタログの選択」ページで、データ・ソースが使用する QMF カタログを選択します。
9. 「終了」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」が閉じます。制御が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページに戻ります。

QMF カタログ・オブジェクトの作成または更新:

QMF カタログ機能を使用可能にするための最初のステップは、現在のデータ・ソース上で QMF カタログ・オブジェクトを作成するか更新するかを選択することです。

このタスクについて

QMF カタログのデータベース・オブジェクトを作成または更新するには:

手順

1. 「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページで「**QMF** カタログ・プラグイン」、「プラグインを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。「QMF カタログ・ウィザード」の「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページが開きます。
2. 「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページで、QMF カタログ表のセットがデータ・ソースで作成されたことがあるかどうかということと、既存の QMF カタログや、作成される QMF カタログで現在サポートされている、または今後サポートされるオブジェクト名 (長い名前または短い名前) の種類を指定します。以下のいずれかを選択します。
 - QMF カタログ表がこのデータ・ソース上に既に存在する場合、「カタログ表はすでに作成されている」を選択します。カタログ表のセットは、データ・ソースがリポジトリ内に、または前バージョンのアプリケーションによって最初に構成されたときに、作成された可能性があります。このオプションは、表が既に作成済みであることが分かっている、ストアド・プロシージャを再実行するだけか、またはカタログ・パッケージを再バインドするだけの場合に選択します。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションは、QMF カタログ表をインストールしたことのない新規のデータ・ソースを構成していて、オブジェクトに短い名前しか使用しない場合、または旧バージョンのアプリケーションからアップグレードしていて、既存の QMF カタログ表でこれからもオブジェクトの短い名前のみをサポートする場合に選択します。データ・ソース上に既存の QMF カタログ表がない場合は、新しい QMF カタログ表が作成されます。新しいバージョンにアップグレードしていて、表のセットがデータ・ソース上に存在する場合、それらが検査されて必要に応じて更新または追加されます。表の作成に使用される SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

- 「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」は、初めてデータ・ソースを構成して長い名前を使用する QMF カタログ表のセットを作成する場合、アプリケーションの以前のバージョンからアップグレードして既存の QMF カタログ表がこれからもオブジェクトの長い名前だけをサポートする場合、または短い名前をサポートする既存のカタログ表を長い名前をサポートするカタログ表に変換する場合に選択します。このオプションを選択するためには、構成するデータ・ソースが長い名前をサポートする必要があります。長い名前をサポートする QMF カタログ表を作成するように選択した場合は、バージョン 8.1 よりも前の QMF アプリケーションでは、長い名前の QMF カタログ表を使用できません。

データ・ソース上に QMF カタログ表がない場合は、長い名前をサポートする QMF カタログ表が作成されます。長い名前をサポートする QMF カタログ表のセットがデータ・ソースで検出された場合、それらは必要に応じて更新または追加されます。短い名前を使用する既存の QMF カタログ表セットがデータ・ソース上で検出された場合、それらは長い名前をサポートするように変換されます。データ・ソースは検査されて、長い名前のサポートが使用可能であることが確認されます。QMF カタログ表で長い名前を使用する必要はありません。データ・ソースで長い名前が使用されている場合でも、QMF カタログ表では短い名前を使用できます。変換が行われると、8.1 以降の QMF アプリケーションでしか、これらの QMF カタログ表を使用できなくなります。

表の作成または更新に使用する SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

- このデータ・ソースの QMF カタログ表のセットを作成したくない場合は、「カタログ表を作成しない」を選択します。構成しているデータ・ソースが QMF カタログをホストしない場合、異なるデータ・ソースにある QMF カタログ表のセットを使用する場合、あるいはこのデータ・ソースの QMF カタログ表のセットが既に作成されていて、異なる QMF カタログを選択するだけの場合は、このオプションを選択します。
3. カタログ表が作成されていない場合は、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択して、データベース・オブジェクトの命名方法をカスタマイズできるウィンドウを開くことができます。
 4. 「次へ」をクリックして、ウィザードの次のページを開きます。次に選択の例を示します。
 - 「カタログ表はすでに作成されている」オプションを選択した場合は、ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」または「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションを選択した場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けないと、ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択してください」ページが開きます。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。「オブジェクトの作成」ページが開きます。このページで、SQL ステートメントに行う変更を入力し、「次へ」をクリックします。「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

- 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションまたは「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションを選択し、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けた場合、ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きます。オプションを選択して、「次へ」をクリックします。「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。ダイアログの「値」列には、各データベース・オブジェクトのデフォルト名が表示されます。作成されるオブジェクトを検討し、必要であれば名前変更することができます。例えば、すべての索引名の前に IX を付けることもできます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。「オブジェクトの作成」ページが開きます。このページで、SQL ステートメントに行う変更を入力し、「次へ」をクリックします。「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。
- 「カタログ表を作成しない」オプションを選択した場合は、ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

QMF カタログのデータベース・オブジェクトの作成:

QMF カタログ機能を使用可能にするための第 2 ステップは、QMF カタログ用データベース・オブジェクトの作成に使用する SQL を確認および実行することです。

このタスクについて

プロセスのこのステップは、カタログ・オブジェクトがデータ・ソース上で作成された場合、または既存のカタログ・オブジェクトを更新する必要がある場合にのみ必要です。

必要なデータベース・オブジェクトの作成または更新に使用する SQL ステートメントを変更するには:

手順

1. カタログ表の作成または更新を選択した場合、「QMF カタログ・ウィザード」の「オブジェクト・リスト・オプションを選択します」ページが開きます。
2. ラジオ・グループから、オブジェクト・リスト・オプションを選択します。
 - すべてのオブジェクトを組み込む - このオプションを選択すると、ユーザーのアクセス権限に関わりなく、データ・ソース内に保存されているすべてのオブジェクトが組み込まれます。
 - ユーザーの 1 次または現行許可 ID によってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
 - ユーザーの 1 次または 2 次許可 ID のいずれかによってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
3. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」の「オブジェクトの作成」ページが開きます。
4. 表の作成または更新に使用される SQL が、フィールドに表示されます。SQL ステートメントに行いたい変更を直接、フィールドに入力します。SQL ステートメントはどれも、パラメーターをカスタマイズするために変更できます。オブ

ジェクトの名前は変更できません。複数のステートメントを区切るには、セミコロン (;) を使用します。変更することが本当に必要でない限り、この SQL は表示されたとおりに実行することをお勧めします。

注: RDBI.PROFILES 表または Q.PROFILES 表を SQL で指定することにより、RDBI.PROFILE_VIEW でこれらの表が使用されるように切り替えることができます。表を切り替える場合は、各 CREATOR の ENVIRONMENT 列に正しい値を指定する必要があります。

- 特定の CREATOR の既存の表の行で <NULL> を指定して、QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation の両方で作成者を有効にします。
 - 特定の作成者の既存の表の行をコピーして、TSO または CICS を WINDOWS で置き換えます。QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation の両方で作成者が有効です。
5. 「次へ」をクリックします。このステップを実行すると、「デフォルト」という名前の QMF カタログが作成されます。ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

カタログ表の保護とユーザー許可の付与:

リレーショナル・データ・ソースが QMF カタログを使用するように構成するための 3 番目のステップは、QMF カタログ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定すること、およびそれらの表にアクセスする許可を付与するユーザーを指定することです。

このタスクについて

QMF カタログ内のいくつかの表には、公開すべきではない機密情報が保管されています。QMF カタログ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャまたは SQL パッケージ (その QMF カタログをホストするデータベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用して QMF カタログ表にアクセスします。このため、QMF カタログのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

QMF カタログ表を保護するには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログ表の保護」ページを開きます。
2. QMF カタログ表に適用される保護のタイプを指定するには、「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループから以下のいずれかを選択します。
 - **使用しない (Never):** このオプションを選択すると、QMF カタログ表に保護を適用しないことを指定します。この方式では、QMF カタログ表が無許可で使用できる状態になります。保護がないので、QMF カタログ表には任意のユーザーが動的照会を使用してアクセスできます。データベース管理者がユーザーにデータベース上に存在する QMF カタログにアクセスする許可を付与すると、その許可は機密情報が保管されている QMF カタログ内の表を含む、QMF カタログ全体に拡張されます。

- 可能な場合: このオプションを選択すると、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかがデータ・ソースで使用可能な場合には、それを使用して QMF カタログ表が保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表へのアクセスは無保護の場合と同じになります。
 - 常時 (Always): このオプションを選択すると、QMF カタログ表が、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかを使用して常に保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表にアクセスする照会は失敗します。
3. 「可能な場合」または「常時」を「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループで選択した場合、「保護」チェック・ボックスが使用可能になります。
 4. 「保護」チェック・ボックスを選択します。保護方式のオプションが使用可能になります。
 5. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、QMF カタログ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 z/OS V9 以降
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、QMF カタログ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバー、または製品に付属の直接 DRDA 接続 (後者は Db2 for z/OS 接続の場合にのみ選択可能) を使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
 6. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
 7. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。
 8. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」を使用して、ストアード・プロシージャや静的パッケージの集合を除去することもできます。
 9. このデータベースで QMF カタログ表のストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定する必要があります。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」リスト

の「PUBLIC」を強調表示して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたは静的パッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。

10. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログの選択」ページが開きます。

集合 ID について:

集合 ID は、特定の目的または機能を果たす静的 SQL パッケージまたはストアード・プロシージャのグループを示します。

QMF には、データベースを操作するための一連の組み込み SQL ステートメントが含まれています。これらのステートメントは、一般にバインディングと呼ばれるプロセスにより、QMF の構成中にデータベース・サーバー上に照会としてインストールされます。

照会が静的 SQL ステートメントのパッケージとしてバインドされるか (Db2 UDB および Db2 for z/OS データベース向け)、または一連のストアード・プロシージャとしてバインドされるか (すべてのサポート対象データベース向け、ただしこのオプションは Db2 UDB および Db2 for z/OS には推奨されない) は、データベース・タイプにより決定されます。インストール済みパッケージまたはストアード・プロシージャのこのグループは、集合 と呼ばれます。

各バージョンの QMF には、固有の集合があります。QMF は、データベース・サーバーに接続するときに、適正なインストール済み集合を自動的に検出し、それを使用します。ただし、ユーザーが QMF のバージョンの見分けがつくように、集合 ID 名にアプリケーションのバージョンを組み込むことは実用的な手法です。

データベースのタイプに応じて、集合 ID の長さにはいくつかの制限があります。

ストアード・プロシージャの場合、「集合」という概念は一般に、所有者 ID またはスキーマ と同義です。集合 ID フィールドの最大長は、最大スキーマ長に基づくデータベース制限によって決定されます。スキーマ長制限について詳しくは、データベースの資料を参照してください。

パッケージの集合は、Db2 データベースのみがサポートします。Db2 データベースは、その構成に応じてショート・ネームとロング・ネームのどちらのモードでも機能します。ショート・ネーム・モードでは、集合 ID フィールドに許可される最大文字数は 8 になります。

以下の Db2 データベースは、ロング・ネームをサポートするようにセットアップできます。

- iSeries V5R1 以降
- DB2 for z/OS V8 以降
- DB2 UDB V8 以降

これらの Db2 データベースの場合、集合 ID の最大長は 128 文字です。

長い名前をサポートするサーバー:

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

以下のサーバーでは、長い名前をサポートしています。

- iSeries V5R1 以降
- zOS V8 以降

オブジェクトの長い名前:

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

長い名前をサポートする QMF カタログ表に保存できる QMF オブジェクトの長い名前は、所有者フィールドおよび名前フィールドについては 128 文字までです。

オブジェクトの短い名前:

QMF カタログにあるオブジェクトの名前には、長い名前が適用されます。

QMF カタログ表に保存できる QMF オブジェクトの短い名前は、所有者の場合は 8 文字までで、名前の場合は 18 文字までです。

QMF カタログの選択:

QMF カタログへアクセスできるようにデータ・ソースを構成するための最後のステップは、QMF カタログを選択することです。

このタスクについて

データ・ソースのために QMF カタログを選択するには:

手順

1. 「QMF カタログ・ウィザード」の「QMF カタログの選択」ページを開きます。
2. 「データ・ソース名」リストから、構成しているデータ・ソースが使用する QMF カタログをホストするデータ・ソースを選択します。現在構成しているものと同じデータ・ソースを選択するか、またはリポジトリですでに構成済みの別のデータ・ソースを選択できます。
3. 「カタログ」リストから、構成している現行データ・ソースに使用させたいカタログを選択します。次のいずれかのタイプのカタログを選択できます。
 - デフォルト: これはメイン QMF カタログです。これは SQL ステートメントを実行してデータ・ソース上にオブジェクトを作成することの結果として、自動的に作成されます。デフォルト・カタログに保存されたすべてのオ

プロジェクトは、共に保存されます。デフォルト・カタログは、QMF for TSO/CICS と 7.2 より前の QMF バージョンで使用可能な唯一のカタログです。

- 拡張: 拡張カタログは、デフォルト・カタログの拡張です。データ・ソースがホスト可能なデフォルト QMF カタログは 1 つだけですが、拡張カタログの場合は複数をホスト可能です。拡張カタログは、いくつかのデータ・ソースが 1 つの QMF カタログを共有している場合に役立ちます。拡張カタログを使用しない場合、オブジェクトはすべてデフォルト QMF カタログに保存されます。拡張カタログによって、各データ・ソースはそれ自身の保存されたオブジェクトを特定のカタログ拡張に分離して入れることができます。
4. オプション: 現在のデータ・ソース上に新しい拡張カタログを作成するには、「追加」アイコンを選択します。「カタログの追加」ウィンドウが開きます。
 5. オプション: 既存の拡張 QMF カタログの名前または CCSID を編集するには、「編集」アイコンを選択します。「カタログの編集」ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、デフォルト QMF カタログの CCSID を編集することもできます。
 6. オプション: 現在のデータ・ソースから既存の拡張カタログを削除するには、「除去」アイコンを選択します。QMF for Workstation は、他のデータ・ソースが拡張カタログを使用するように構成されているかどうかにかかわらず、拡張カタログとその内容をすべて削除するため、拡張カタログを削除するときは注意が必要です。
 7. オプション: 「リスト最新表示」を選択して、リスト・ボックス内の使用可能な拡張カタログのリストを最新表示します。
 8. 現行データベースで作業するときに、ユーザーが常に現行 QMF カタログを使用するようにするには、「現在のサーバーにアクセスするときはこのカタログ・サーバーの使用が必要」チェック・ボックスを選択します。
 9. 「終了」をクリックします。「QMF カタログ・ウィザード」が閉じます。これは QMF カタログを使用するようにデータ・ソースを構成するための最後のステップです。制御が「リレーショナル・データ・ソースの作成」ウィザードの「データ・ソース・プラグインを使用可能にします」ページに戻ります。

拡張カタログの作成:

拡張 QMF カタログを作成して、全体的なデフォルトの QMF カタログ内のオブジェクトへのユーザー・アクセスを編成することができます。

このタスクについて

すべてのオブジェクトをメインのデフォルト・カタログに入れるのではなく、小さい拡張カタログに分離することができます。拡張カタログを使用する理由はたくさんあります。それらを使用して、オブジェクトに対するユーザーのビューを制御できます。それらを使用して、別のデータ・ソース上の QMF カタログを共有する 1 つのデータ・ソースからオブジェクトを分離できます。拡張カタログには、特定のデータ・ソースからの選択されたオブジェクトだけが収められます。さらに、メインのデフォルト・カタログとは異なる CCSID 設定を持つ拡張カタログも設定できます。

注: データ・ソースが使用する拡張カタログ (またはデフォルト・カタログ) が別のデータ・ソース上に存在する場合、パフォーマンス、オブジェクトに対するユーザーのビュー、および照会環境の全体的な保守が悪影響を受けることがあります。

拡張カタログを作成するには:

手順

1. 「カタログの追加」ウィンドウを開きます。
2. 「名前」フィールドに拡張カタログの固有の名前を指定します。
3. 「CCSID」リストで、拡張カタログの CCSID コード・ページを選択します。
4. オプション: カatalog・サーバーに保管されているシステム・プロファイル表に項目を作成するには、「システム・プロファイル項目の作成 (**Create system profile entry**)」チェック・ボックスを選択します。カタログ・サーバーは、QMF カatalogが存在するデータベース・サーバーです。このチェック・ボックスを選択すると、QMF はユーザー・プロファイル項目を作成するので、ユーザーはユーザー独自のユーザー ID でデータベースにアクセスすることができます。このチェック・ボックスを選択しない場合は、ユーザー ID をグループに割り当てる必要があります。
5. 「OK」をクリックします。新しい拡張カタログが作成されます。

拡張カタログのプロパティの編集:

拡張 QMF カatalogの名前または CCSID プロパティを変更できます。また、デフォルトの QMF カatalogの CCSID プロパティも変更できます。

このタスクについて

拡張またはデフォルトの QMF カatalogのプロパティを編集するには:

手順

1. 「カタログの編集」ウィンドウを開きます。
2. 「名前」フィールドに拡張カタログの新しい名前を指定します。デフォルト QMF カatalogの名前は変更できません。
3. 「CCSID」リストで、拡張カタログの新しい CCSID コード・ページを選択します。デフォルトの QMF カatalogの CCSID を変更することができます。
4. 「OK」をクリックします。QMF カatalogのプロパティ値に対する変更は保存されました。

QMF Data Service データ・ソースの作成

ユーザーは QMF Data Service データ・ソースを使用することにより、QMF Data Service で提供される表を操作できます。

始める前に

データ・ソースを QMF サーバーから使用できるようにするには、Java Runtime Environment (JRE) バージョン 8 以降がご使用の環境にインストールされていることを確認してください。

このタスクについて

QMF Data Service データ・ソースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「**QMF Data Service**」を選択して「次へ」をクリックします。
3. 「データ・ソース名」フィールドでデータ・ソースの名前を指定します。
4. 「接続パラメーター」領域でホスト・サーバー名、ポート番号、およびエンコード方式を指定します。

注: データ・ソースに指定したいエンコードが「エンコード」リストにない場合、手動で入力してください。

5. 「ユーザー情報の設定」をクリックする。
6. 「ユーザー情報」ウィンドウでは、データ・ソースにアクセスするためのユーザー情報を指定して、ユーザーがパスワードを保存できるようにすることが可能です。
7. いずれかのサーバー・サブシステムで提供される表にアクセスする場合は、「サブシステム」チェック・ボックスを選択します。リストから操作対象のサブシステムを選択します。

仮想表にアクセスする場合は、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けないままにします。

8. 接続をテストするには、「接続のテスト」をクリックします。
9. 「終了」をクリックします。

Hive データ・ソースの作成

Hive データ・ソースを作成すれば、Apache Hadoop を操作できます。Apache Hadoop はオープン・ソース・ソフトウェア・フレームワークであり、データが構造化されているかどうかに関係なく大規模なボリュームのデータを確実に管理するために使用されます。

始める前に

QMF が Hive データ・ソースに接続できるように Hive ドライバー・ライブラリー JAR ファイルを必ず定義しておいてください。

このタスクについて

Hive データ・ソースとは、データ要約と随時照会を提供するデータウェアハウス・インフラストラクチャーのことです。Hive データ・ソースには、JDBC 用の特殊なドライバーを使用してアクセスされます。Hive 用の最新 JDBC インターフェースでサポートされるのは、照会の実行と結果の取り出しのみです。

Hive データ・ソースを作成するには、以下のようにします。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「Hive」を選択して「次へ」をクリックします。
3. 「データ・ソース名」フィールドにデータ・ソース名を入力します。
4. 必要なパラメーターを「接続パラメーター」領域で指定します。ホスト名、ポート番号、およびデータベース名を設定する必要があります。
5. 「ユーザー情報の設定」ボタンをクリックして、必要なユーザー・パラメーターを指定します。
6. 「拡張」ボタンをクリックして、インストールされた Hive ドライバーでサポートされる拡張パラメーターを選択します。
7. 「コメント」フィールドには、作成したデータ・ソースの説明を入力できます。
8. 「終了」をクリックして Hive データ・ソースを作成し、「Hive データ・ソースの作成」ウィザードを閉じます。

仮想データ・ソースの作成

仮想データ・ソースを作成して、ユーザーがエンタープライズ・データを表示する方法を調整します。仮想データ・ソースによりデータベース・メタデータ層が導入され、これによりオプションで基礎データベース構造の複雑さを隠せるようになりました。

このタスクについて

新規仮想データ・ソースを作成するには、以下のようになります。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「仮想」を選択して「次へ」をクリックします。
3. 新規仮想データ・ソースの名前を「データ・ソース名」フィールドに入力します。
4. 仮想データ・ソース・パラメーターを「パラメーター」領域に指定します。
 - a. 仮想データ・ソースの作業用に内部メモリー内データベースを作成するために「メモリー内」チェック・ボックスを選択します。
 - b. その内部データベースをファイル・システム内に保存したい場合は、「シャットダウン時にサーバーをバックアップ」チェック・ボックスを選択します。この結果、アプリケーションを通常モードでシャットダウンすると、そのデータベースがファイル・システムに保存され、次のアプリケーション起動時に取得されます。
5. 「終了」をクリックします。

JavaScript データ・ソースの作成

JavaScript データ・ソースを作成して、データ・ソースとして Web サービスからデータを収集し、そのデータをリレーショナル表の形式で処理します。

このタスクについて

JavaScript データ・ソースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「JavaScript」を選択して「次へ」をクリックします。
3. 「データ・ソース名」フィールドにデータ・ソースの名前を入力します。
4. 「接続パラメーター」領域で、以下を実行します。
 - a. 「URL」フィールドに、接続してデータを取得する Web リソースの URL を入力します。
 - b. Web リソースにアクセスするたびにユーザー情報を要求するには、「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスを選択します。Web リソースがログオン情報を必要としない場合は、チェック・ボックスにチェック・マークを付けずに済みます。
 - c. 入力したユーザー ID のパスワードをアプリケーションが記憶できるようにする場合は、「ユーザーがパスワードを保存できるようにする」チェック・ボックスを選択します。
5. 「次へ」をクリックします。ウィザードの「JavaScript パラメーター」ページで、データ・ソースのグローバル・パラメーターを指定します。他の Web リソースに接続したり他のユーザー資格情報を使用して接続したりする必要がある場合は、これらのパラメーターを簡単に変更できます。
 - a. 「パラメーターの追加」をクリックし、対応する列にパラメーター名と値を入力します。
 - b. データ・ソースからパラメーターを削除するには、パラメーターを選択して「パラメーターの削除」をクリックします。
6. 「終了」をクリックします。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュ有効期限のスケジュール

仮想データ・ソースの「プロパティ」ウィンドウの「キャッシュ設定」ページに保管されている仮想データ・ソースおよび表に対して有効期限スケジュールを使用できます。

このタスクについて

「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合、キャッシュ有効期限モードは、仮想データ・ソースに関して「常に有効期限切れ」と同じになります。このデータ・ソースに保管されている表のレコードは、要求があるたびに更新されます。

特定のキャッシュ・スケジュールを仮想データ・ソースまたはその表に対して指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」で仮想データ・ソースを右クリックして「プロパティ」を選択します。
2. 「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウで「キャッシュ設定」を選択します。
3. 「キャッシュ設定」ページで「有効期限スケジュールの使用」チェック・ボックスを選択します。スケジュール有効期限設定が使用可能になります。
4. 「デフォルトの有効期限スケジュール」リストから、データ・ソース全体のデフォルト・スケジュールとして使用するスケジュールを選択します。

注: 作成したデータ・ソースのデフォルト設定は「常に有効期限切れ」です。

5. 特定のキャッシュ有効期限スケジュールを特定の表に割り当てるには、設定を変更する表の「スケジュール名」列をクリックして、使用できるスケジューラーのリストから必要なスケジューラーを選択します。

注: 置換変数が含まれている表には「常に有効期限切れ」有効期限スケジュールのみが適用されます。

6. アクセス許可が必要となる表がある場合は、データ・ソースの許可設定を指定する必要があります。「許可の管理」ボタンをクリックします。「許可の管理」ダイアログが開きます。
7. そのダイアログには、許可が必要となるデータ・ソースがすべてリストされています。この許可データはキャッシュの更新に使用されます。必要なデータ・ソースの「ログイン」列をクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ダイアログが開きます。
8. 適切な値を「ログイン」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の各フィールドに入力し、「OK」をクリックします。
9. 必要なすべてのデータ・ソースに対して許可データを指定し終えたら、「許可の管理」ダイアログで「OK」をクリックします。
10. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックして、「[データ・ソース] のプロパティ」ウィンドウを閉じます。

仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュの有効化

アプリケーションが仮想データ・ソースおよび JavaScript データ・ソースのキャッシュを自動的にリフレッシュできるようにすると、ユーザーは、これらのタイプのデータ・ソースに対してより迅速に照会を実行できます。

このタスクについて

仮想データ・ソースまたは JavaScript データ・ソースの自動キャッシュ・リフレッシュ・オプションを有効にするには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「設定」 > 「仮想データ・ソース」を選択します。
2. 「自動キャッシュ・リフレッシュの有効化」チェック・ボックスを選択します。
3. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックします。

4. オプション: キャッシュを手動で無効化するには、データ・ソースを右クリックし、メニューから「データ・ソース・キャッシュの無効化 (**Invalidate Data Source Cache**)」を選択します。

マルチディメンション・データ・ソースの作成

すべてのマルチディメンション・データ・ソースのリポジトリに、構成情報を追加する必要があります。

このタスクについて

マルチディメンション・データ・ソースへのアクセスには XMLA が使用されます。マルチディメンション・データは、1 つ以上のディメンションによって編成されています。マルチディメンション・データ構造体は、しばしばキューブとも呼ばれます。XMLA を使用してアクセスされるマルチディメンション・データ・ソースの照会は、MDX で作成されます。

リポジトリ内のマルチディメンション・データ・ソース情報を構成するには:

手順

1. 「データ・ソース」タブの「リポジトリ」ビューで、「データ・ソースの作成」をクリックします。「新規データ・ソースの作成」ウィザードが開きます。
2. ウィザードで、「マルチディメンション」を選択して「次へ」をクリックします。
3. 「データ・ソース名」フィールドに、リポジトリ内でデータ・ソースを識別するために使用される名前を入力します。任意の名前を指定できます。
4. QMF は、HTTP プロトコル経由で XML for Analysis (XMLA) を使用してマルチディメンション・データ・ソースに接続します。「**HTTP URL**」フィールドに、データ・ソースを指す URL を指定します。
5. このマルチディメンション・データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID とパスワードの使用を要求するには、「ユーザー ID とパスワードが必要」を選択します。データ・ソースでユーザー ID とパスワードなしでアクセスが許可される場合は、このオプションを選択するとその許可がオーバーライドされ、データ・ソースへのアクセスにユーザー ID とパスワードが必要になります。
6. 「ユーザー名」フィールドおよび「パスワード」フィールドに、データ・ソースのアクセスに使用するユーザー ID とパスワードを指定します。接続をテストするには、「接続のテスト」ボタンをクリックします。
7. リポジトリに追加するマルチディメンション・データ・ソースを「データ・ソース」リスト・ボックスから選択します。指定された URL アドレスにあるすべてのデータ・ソースは、「データ・ソース」リスト・ボックスにリストされます。リストは、「最新表示」ボタンを使用して最新表示することができます。
8. オプション: 「コメント」フィールドに、データ・ソースについて説明するコメントを入力します。このコメントは、データ・ソースのプロパティと一緒に表示されます。
9. 「終了」をクリックします。

データ・ソースのログイン・マッピングの設定

ログイン・マッピングを使用すると、ユーザーは単一のユーザー ID とパスワードを使用して、リポジトリにログインし、そのリポジトリで構成された 1 つ以上のデータベース・データ・ソースへのアクセス権を取得することができます。

このタスクについて

ログイン・マッピングによって、管理者は、ユーザーがリポジトリにログインすれば、データベース・データ・ソースに特定の別のユーザー ID およびパスワードを指定しなくても、データ・ソースにアクセスできるように設定できます。ログイン・マッピングを設定することによって、ユーザーはデータベース・データ・ソースにアクセスするたびに常にログイン情報を再入力する必要がなくなり、各データベース・データ・ソースのためのログイン情報を知る必要がなくなります。

リポジトリに含めるデータ・ソースごとに、ログイン・マッピングを設定します。ログイン・マッピングは、保護されたリポジトリに配置されるデータ・ソースに対してのみ設定できます。保護されたリポジトリとは、「内部」、**「LDAP」**、または「データベース・ベース」のセキュリティー・オプションを使用して作成されたリポジトリです。Db2 データベース・ユーザーのログイン・マッピングをセットアップする場合、トラステッド・コンテキストが管理対象データ・ソース用に作成されていれば、トラステッド接続を使用できます。この場合、アプリケーションへの指定された接続はトラステッドと認識され、データベースは個々のユーザー資格情報を必要としません。

ユーザーに複数のログインが割り当てられている場合は、それぞれに優先度を指定する必要があります。この仕組みをよりよく理解するために、以下の点を考慮してください。

- ユーザー X は、グループ A およびグループ B という 2 つのグループのメンバーです。グループ A には、グループ A に割り当てられたすべてのユーザーにデータ・ソースに対する特定のレベルのアクセス権を付与するログイン・マッピング ID およびパスワードを割り当てました。グループ B には、グループ B に割り当てられたすべてのユーザーにデータベース・データ・ソースに対するより小さいレベルのアクセス権を付与するログイン・マッピング ID およびパスワードを割り当てました。ユーザー X は両方のグループのメンバーであるので、データ・ソースにアクセスするとき、どのログイン情報を使用すべきかがはっきりしません。このユーザーをグループ A とグループ B のどちらのメンバーとしてログインさせるのかという問題です。「優先順位」フィールドは、この問題を解決します。ログイン情報に優先順位の値を割り当てることができます。例えば、グループ A に優先順位の 10 を割り当て、グループ B に優先順位の 5 を割り当てます。その場合、両方のグループのメンバーであるユーザーがデータ・ソースにアクセスするとき、そのユーザーがメンバーとなっているグループの中で最高の優先順位のグループのログイン情報に基づいて、アクセス権が付与されます。この例では、それはグループ A となります。このシナリオでは、複数のグループに同じ優先順位の値を割り当てることができないことに注意してください。
- ユーザー X は、グループ A およびグループ B という 2 つのグループのメンバーです。ただし、ユーザー X は、データ・ソースに対して、どちらのグループに属する他のいずれのメンバーとも異なる独特なレベルのアクセス権を持つ必

必要があります。「優先順位」フィールドを使用して、この問題を解決できます。グループ B にログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 5 を割り当てます。グループ A にログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 10 を割り当てます。ユーザー X にはログイン・マッピングのユーザー ID およびパスワードを割り当て、マッピング情報に優先順位の値の 25 を割り当てます。ユーザー X がデータ・ソースにアクセスするとき、最高の優先順位の値を持つマッピング情報が使用されます。このシナリオでは、グループおよびそのグループのメンバーである個別のユーザーに、同じ優先順位の値を割り当てることができないことに注意してください。

以下のトピックでは、トラステッド接続を使用する場合と使用しない場合のログイン・マッピングのセットアップ方法について説明します。

トラステッド接続を使用しないログイン・マッピング:

このトピックでは、トラステッド接続を使用しないログイン・マッピングのセットアップ手順について説明します。

このタスクについて

トラステッド・コンテキストを使用しないデータ・ソースのログイン・マッピングをセットアップするには、以下のようになります。

手順

1. 「リポジトリ」ビューでデータ・ソースを右クリックします。メニューから「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログイン・マッピング」を選択します。ウィンドウの「ログイン・マッピング」ページが開きます。リポジトリに定義されているすべてのユーザーおよびグループが「データ・ソース・ログイン・リスト」にリストされます。このリストは、ユーザーまたはグループを定義していない場合は空になります。
2. Db2 データベースのログイン・マッピングをセットアップする場合は、「トラステッド接続を使用する」チェック・ボックスが選択解除されていることを確認してください。
3. ユーザーまたはグループのマッピングを設定するには、ユーザーまたはグループを選択し、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの編集」アイコンをクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウが開きます。
4. データベース・データ・ソースにログインするときに使用されるユーザー ID を、「ログイン」フィールドに指定します。
5. データベース・データ・ソースにログインするときに使用されるパスワードを、「パスワード」フィールドに指定します。
6. パスワードを「パスワードの確認」フィールドに再入力して確認します。
7. このログイン情報に対する優先順位を「優先順位」フィールドに指定します。このフィールドには、任意の数値を入力できます。最低の優先順位を示す値は 1 です。「優先順位」の値を使用して、複数のグループのメンバーであるユーザーのために呼び出されるログイン・マッピング ID およびパスワードが決ま

ります。優先順位について詳しくは、101 ページの『データ・ソースのログイン・マッピングの設定』を参照してください。

8. 「OK」をクリックします。選択されたユーザーまたはグループのデータ・ソース・ログイン情報は、以下のように「データ・ソース・ログイン」リストにリストされます。
 - 「ログイン・マッピング所有者」に、このログインを使用してデータ・ソースにアクセスするユーザーまたはグループの名前がリストされます。ユーザーおよびグループについて詳しくは、106 ページの『ユーザーおよびユーザー・グループの管理』を参照してください。
 - 「認証 ID」が、ユーザーまたはグループのデータ・ソースにアクセスするために使用するログイン・ユーザー ID を指定します。
 - 「優先順位」が、ログイン情報に割り当てられた優先順位を指定します。この優先順位の値によって、複数のグループのメンバーであるユーザーのためにどのログイン情報が呼び出されるかが決まります。

ログイン・マッピング情報を設定するユーザーまたはグループごとに、このプロセスを繰り返します。

9. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を編集するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログイン情報を選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの編集」ボタンをクリックします。「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウが開きます。任意のフィールドを変更できます。「OK」をクリックして「データ・ソース・ログインの編集」ウィンドウを閉じます。
10. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を削除するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログインを選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの除去」ボタンをクリックします。
11. 「OK」をクリックします。各ユーザーまたはグループに指定したログイン・マッピング・パラメーターがデータ・ソースに対して有効になります。リポジトリ内のデータ・ソースごとに、ログイン・マッピング情報を個別に設定する必要があります。

トラステッド接続を使用した **Db2** データベースのログイン・マッピング:

このトピックでは、トラステッド接続を使用したログイン・マッピングのセットアップ手順について説明します。

このタスクについて

Db2 データ・ソースに接続するユーザーのログイン・マッピングをセットアップする場合、トラステッド・コンテキストを使用できます。トラステッド・コンテキストは、データベースへの接続をトラステッド接続として使用できるかどうかを決定する、データベース管理者によって作成されるエンティティです。データベースでは、このようなトラステッド接続のユーザーを認証するために個々の資格情報は必要ありません。管理者が、管理するユーザー資格情報を多数持っている場合、トラステッド・コンテキストは非常に実用的です。トラステッド・コンテキストを使用するには、トラステッドとして認識される現行接続のトラステッド・コンテキストの作成時に使用されたシステム許可資格情報を指定します。トラステッド接続を

介して作業するユーザーの場合、トラステッド・コンテキストで指定された認証 ID 属性を割り当てて、データベースに接続するときの特権を定義できます。

注: このオプションは、データ・ソース用に作成されたトラステッド・コンテキストがある場合にのみ使用できます。

トラステッド接続を使用してデータ・ソースのログイン・マッピングをセットアップするには、以下のようにします。

手順

1. 「リポジトリ」ビューでデータ・ソースを右クリックします。メニューから「プロパティ」を選択します。「プロパティ」ウィンドウが開きます。ツリーから「ログイン・マッピング」を選択します。ウィンドウの「ログイン・マッピング」ページが開きます。リポジトリに定義されているすべてのユーザーおよびグループが「データ・ソース・ログイン・リスト」にリストされます。このリストは、ユーザーまたはグループを定義していない場合は空になります。
2. 「トラステッド接続を使用する (Use trusted connections)」チェック・ボックスを選択します。「システム許可資格情報」ダイアログが開きます。
3. トラステッドとして認識される接続のシステム許可資格情報を入力します。「ID」フィールドに、トラステッド・コンテキストで指定した SYSTEM AUTHID を入力します。
4. 「OK」をクリックして「システム許可資格情報」ダイアログを閉じます。

注: 入力した情報が正しくない場合は、再試行を求めるエラー・メッセージが表示されます。

5. システム許可資格情報を編集するには、「システム許可資格情報の編集」ボタンをクリックします。
6. 認証 ID が割り当てられていない場合にリポジトリ・ログインを使用する場合は、「認証 ID が指定されていない場合はリポジトリ・ログインを使用する (Use repository login if Auth ID is not specified)」チェック・ボックスを選択します。
7. 認証 ID を割り当てるか、割り当てられた認証 ID を編集するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表でそれらを選択し、「ユーザー・アカウント情報の編集 (Edit user account information)」をクリックします。「ユーザー・アカウント情報」ウィンドウが開きます。
8. 「認証 ID」フィールドで、トラステッド・コンテキストによって提供されるリストから認証 ID を指定します。
9. 「優先順位」フィールドで、このログイン情報に適用される優先順位を指定します。このフィールドには、任意の数値を入力できます。最低の優先順位を示す値は 1 です。「優先順位」の値を使用して、複数のグループのメンバーであるユーザーのために呼び出される認証 ID が決まります。優先順位について詳しくは、101 ページの『データ・ソースのログイン・マッピングの設定』を参照してください。
10. 「OK」をクリックします。選択されたユーザーまたはグループのデータ・ソース・ログイン情報は、以下のように「データ・ソース・ログイン・リスト」表にリストされます。

- 「ログイン・マッピング所有者」に、このログインを使用してデータ・ソースにアクセスするユーザーまたはグループの名前がリストされます。ユーザーおよびグループについて詳しくは、106 ページの『ユーザーおよびユーザー・グループの管理』を参照してください。
- 「認証 ID」は、トラステッド接続が確立されるときに使用されるログインを指定します。

注: 認証 ID が指定されていない場合は、リポジトリ・ログインが使用されます。トラステッド・コンテキストでログインが見つからない場合、接続エラーが登録され、ユーザーはログオン・ダイアログに戻ります。

- 「優先順位」が、ログイン情報に割り当てられた優先順位を指定します。この優先順位の値によって、複数のグループのメンバーであるユーザーのためにどの認証 ID が呼び出されるかが決まります。

トラステッド・コンテキストを使用してログイン・マッピング情報を設定するユーザーまたはグループごとに、このプロセスを繰り返します。

11. 既存のデータ・ソース・ログイン情報を削除するには、「データ・ソース・ログイン・リスト」表からデータ・ソース・ログインを選択して、リスト・ボックスの上にある「データ・ソース・ログインの除去」ボタンをクリックします。
12. 「OK」をクリックします。各ユーザーまたはグループに指定したログイン・マッピング・パラメーターがデータ・ソースに対して有効になります。リポジトリ内のデータ・ソースごとに、ログイン・マッピング情報を個別に設定する必要があります。

ワークスペースの設定

「リポジトリ」ビューの「ワークスペース」タブを使用して、QMF ユーザーのワークスペースを作成します。

管理者は、QMF ユーザーがワークスペースから、あるいは直接リポジトリからリポジトリ・オブジェクトを処理するかを選択できます。作成するすべてのリポジトリには、自動的に作成されるデフォルトのワークスペースが 1 つあります。初期状態では、すべてのユーザーはデフォルトのワークスペースにアクセスできます。

ワークスペースを使用する利点

ユーザーをワークスペースからリポジトリ・オブジェクトにアクセスさせることには、いくつかの利点があります。リポジトリに対して「内部」または「LDAP」セキュリティー・オプションを選択した場合、1 つ以上のワークスペースを作成し、特定のユーザーやグループに、ワークスペース全体またはワークスペース内の特定のオブジェクトへのさまざまなアクセス・レベルを割り当てることができます。リポジトリに対して追加のセキュリティーを選択しなかった場合、1 つ以上のワークスペースをリポジトリ・オブジェクトの編成に役立てることができます。

ユーザー・ワークスペースの作成

オプションで、ユーザーおよびグループ用の追加のワークスペースを設定できます。

このタスクについて

ユーザー・ワークスペースを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューの「ワークスペース」タブで、「ユーザー・ワークスペースの作成」をクリックします。「新規ユーザー・ワークスペースの作成」ダイアログが開きます。
2. 「名前」フィールドに新規ワークスペースの名前を入力します。
3. 「コメント」フィールドに、ワークスペースについて説明するコメントを入力します。
4. 「終了」をクリックします。

ユーザーおよびユーザー・グループの管理

「リポジトリ」ビューの「ユーザーおよびグループ」タブを使用して、保護されたりポジトリのユーザーおよびユーザー・グループを作成および管理します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、操作する保護されたりポジトリをクリックします。
2. 「ユーザーおよびグループ」タブに切り替えます。選択されたりポジトリにアクセスできる各ユーザーが「ユーザー」リストに表示され、ユーザーの各グループが「グループ」リストに表示されます。
3. ユーザーまたはグループを作成するには、「リポジトリ・ユーザーの作成」または「リポジトリ・グループの作成」をクリックします。詳細については、『リポジトリ・ユーザーの作成』 および 107 ページの『リポジトリ・グループの作成』を参照してください。
4. 既存のユーザーのパスワードを変更するには、そのユーザーを右クリックして、メニューから「パスワードの設定」を選択します。
5. ユーザーまたはグループに異なるセキュリティ許可レベルを割り当てて、ワークスペースへの、またそれらのワークスペースに保管されているオブジェクトへのアクセスを制御するには、107 ページの『ワークスペースおよびデータ・ソースを使用するためのユーザーおよびグループ許可の割り当て』の指示に従ってください。
6. 「終了」をクリックします。

リポジトリ・ユーザーの作成

「新規リポジトリ・ユーザー」ダイアログを使用して、保護されたりポジトリ・ユーザーを作成します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、「ユーザーおよびグループ」タブに切り替えて「リポジトリ・ユーザーの作成」をクリックします。
2. 「ユーザー名」フィールドで、新規リポジトリ・ユーザーの名前を指定します。
3. オプション: 「フルネーム」フィールドで、ユーザーの実名を指定します。

4. 「パスワード」フィールドと「パスワードの確認」フィールドを使用して、パスワードを設定します。
5. オプション: 「説明」フィールドに、新規ユーザーに関する追加情報を入力します。
6. オプション: 新規ユーザーのワークスペースを自動的に作成するには、「ホーム・ワークスペースの使用」チェック・ボックスを選択します。
7. オプション: 「グループ・メンバーシップ」域で、新規ユーザーを既存のユーザーのグループに組み込みます。
8. 「終了」をクリックします。

リポジトリ・グループの作成

「新規リポジトリ・グループ」ダイアログを使用して、保護されたりポジトリ・グループを作成します。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、「ユーザーおよびグループ」タブに切り替えて「リポジトリ・グループの作成」をクリックします。
2. 「グループ名」フィールドで、新しいグループの名前を指定します。
3. 「メンバー」域で、グループに入れるユーザーを選択します。
4. 「親」域で、親グループを指定します。
5. オプション: 「説明」フィールドに、グループに関する追加情報を入力します。
6. 「終了」をクリックします。

ワークスペースおよびデータ・ソースを使用するためのユーザーおよびグループ許可の割り当て

セキュリティ許可レベルをユーザーおよびグループに割り当てて、ワークスペースおよびデータ・ソースに対する、それらのユーザーおよびグループのアクセスを制御できます。

このタスクについて

ユーザーおよびグループのセキュリティ許可レベルは、保護されたりポジトリ (内部または LDAP セキュリティを設定して作成されたりポジトリ) についてのみ割り当てることができます。ユーザーおよびグループに、ワークスペースおよびデータ・ソースを使用するためのさまざまなレベルを割り当てするには、以下の手順に従ってください。

手順

1. 「リポジトリ」ビューで、「ワークスペース」タブに切り替えます。
2. 操作するワークスペースを右クリックして、「プロパティ」をクリックします。
3. 「プロパティ」ウィンドウで、「セキュリティ」を選択します。
4. このリポジトリを使用する許可を付与されたユーザーまたはグループはそれぞれ、「グループ名またはユーザー名」フィールドにリストされます。ユーザーまたはグループを追加するには、「追加」をクリックして、「ユーザーまたはグループの選択」ウィンドウを使用します。

5. ユーザーまたはグループごとに、選択したワークスペースに対して異なる許可レベルを割り当てることができます。有効な許可レベルは、「以下を許可」リストに表示されています。許可レベルを割り当てるには、ユーザーまたはグループを選択してから、割り当てる許可レベルを選択してください。以下の許可レベルが有効です。
 - **すべて:** すべての機能 (編集、表示、参照、および削除) をワークスペースまたはデータ・ソースに実行する許可をユーザーまたはグループに付与します。また、完全な許可レベルであれば、ユーザーはワークスペースおよびデータ・ソースに割り当てられた許可を変更できます。
 - **編集:** ワークスペースまたはデータ・ソースの変更、さらに表示および参照を実行する許可をユーザーまたはグループに付与します。
 - **参照:** ワークスペースまたはデータ・ソースの内容を表示する許可をユーザーまたはグループに付与します。例えば、リポジトリ内のディレクトリーに対するブラウズ特権により、ユーザーはディレクトリー内にあるものを表示できます。照会オブジェクトに対するブラウズ特権により、ユーザーは照会オブジェクトを開いて実行できます。
 - **表示:** ワークスペースまたはデータ・ソース内にリストされたリポジトリ・オブジェクトを表示する許可をユーザーまたはグループに付与します。例えば、リポジトリ内のディレクトリーに対する表示特権により、ユーザーはディレクトリーの表示だけができます。ディレクトリーを開いたり、ディレクトリーの内容を表示することはできません。照会オブジェクトに対する表示特権により、ユーザーはオブジェクトの表示のみ許可されます。ユーザーはオブジェクトを開いたり、実行することはできません。
 - **なし:** ユーザーまたはグループに、ワークスペース/データ・ソースとその子オブジェクトにアクセスする許可を拒否します。
6. 選択したレベルの許可を、ワークスペース/データ・ソースの子オブジェクトすべてに適用するには、「許可を子フォルダーとオブジェクトに適用」をクリックします。
7. ユーザーまたはグループから許可を除去するには、「グループ名またはユーザー名」リストからユーザーまたはグループを選択し、「除去」をクリックします。
8. 「適用」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。

「スケジュール・タスク」ビューの使用

「スケジュール・タスク」ビューを使用して、QMF スケジュール・タスクを作成および管理します。

スケジュール・タスクは、指定の日時にビジネス・プロセスが自動的に実行されるように支援する便利なツールです。これは、複数の異なるロケーションに配布されている週次販売報告書や、四半期ごとの収益報告書など、定期的に行う必要があるアクションに対して特に有用です。

以下のトピックで、スケジュール・タスクの操作について説明します。

スケジュール・タスクの作成

タスクをスケジュールすれば、照会の実行や照会結果のエクスポートなどを自動化したアクションを作成できます。アクションをユーザー・インターフェースから直接実行する必要はありません。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、操作するリポジトリを「リポジトリ」リストから選択します。
2. オプション: 許可情報が必要な場合は、「ログオン先」ウィンドウに許可情報を入力するように指示されます。
3. スケジュール・タスクを作成するには、「タスクの追加」をクリックします。
4. 「タスク名」フィールドで、タスクの名前を指定します。
5. 「アクションの追加」をクリックします。
6. 「アクション」ウィザードで、アクションの名前を「アクション名」フィールドに指定します。
7. 追加するアクションのタイプを選択し、「次へ」をクリックします。
8. 選択したタスク・タイプのオプションを指定し、「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「アクション」リストに新規リストが追加されます。アクションの作成について詳しくは、以下のリンク付きトピックを参照してください。
9. タスクに実行させるアクションを必要な数だけ追加し、「OK」をクリックしてタスクの作成を終了します。

オブジェクトの実行アクションの追加

オブジェクトの実行アクションを使用して、照会、ビジュアル報告書、プロシージャ、または即時報告書を自動的に実行し、それをエクスポートまたはメール送信することができます。

このタスクについて

オブジェクトの実行アクションをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「アクションの追加」をクリックします。「アクション・ウィザード」が開きます。
3. 「アクション名」フィールドにアクションの名前を指定し、「オブジェクトの実行」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「オブジェクトの指定」ページが開きます。
4. 実行するオブジェクトのタイプを選択します。
5. オブジェクトのロケーションを指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
 - a. オブジェクトの静的ソース・ロケーションを指定するには、「パス」をクリックしてから、「ソース」域の右下の省略符号 (...) をクリックします。

「開く」ウィンドウで、オブジェクトにナビゲートして、そのオブジェクトを選択し、「終了」をクリックします。

- b. オブジェクトの条件付きソース・ロケーションを指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、オブジェクトのロケーションを決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
6. オプション: このオプションは、プロシージャーにのみ有効です。「新規データ・ソースの設定」チェック・ボックスを選択して、プロシージャーの実行対象となる特定データ・ソースを指定します。次に省略符号 (...) をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが開いたら、必要なデータ・ソースを選択して「OK」をクリックします。

注: このチェック・ボックスが選択されていないと、プロシージャーは、そのオリジナル・データ・ソースに対して実行されます。

7. オプション: 1 つ以上のデータ・ソースをさらに追加するには、以下の手順に従ってください。
 - a. 「データ・ソースの追加」をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが開きます。
 - b. 追加するデータ・ソースまでナビゲートして選択し、そのデータ・ソースのログイン名とパスワードを指定して、「OK」をクリックします。「データ・ソースの追加」ウィンドウが閉じます。
8. 「次へ」をクリックします。ステップ 5 で指定したオブジェクトがプロシージャーであるか、またはプロンプトを含んでいる場合、「変数を指定します」ページが開きます。そうではない場合は、「操作を指定します」ページが開き、ステップ 13 に進む必要があります。
9. 「変数を指定します」ページで、操作する変数をダブルクリックします。「変数の編集」ウィンドウが開きます。
10. 「変数の編集」ウィンドウで、変数の値を指定するか、または公式編集機能を使用して式を作成します。
11. 「OK」をクリックして「変数の編集」ウィンドウを閉じてから、「次へ」をクリックします。「操作の指定」ページが開きます。
12. 「操作の指定」ページで「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
13. 操作を選択して、「次へ」をクリックします。
14. 選択した操作のオプションを指定して、「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。
15. アクションで実行するすべての操作の追加が終了したら、「終了」をクリックします。
16. 「OK」をクリックします。

「照会のエクスポート」操作のオプションの指定:

「照会のエクスポート」操作を使用して、照会結果をファイルにエクスポートします。

このタスクについて

「照会のエクスポート」操作をアクションに追加するには、以下のようにします。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「照会のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 照会に複数の結果セットがある場合、エクスポートする結果セットを「結果セット」リストから選択します。
4. 照会に複数の表示モードがある場合、エクスポートする表示モードを「表示モード」リストから選択します。
5. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - テキスト (*.txt)
 - CSV (*.csv)
 - PDF (*.pdf)
 - HTML (*.html)
 - IXF (*.ixf)
 - XML Extensible Markup Language ファイル (*.xml)
 - XLS Microsoft Excel 97-2003 (*.xls)
 - XLSX Microsoft Excel 2007 (*.xlsx)
 - PNG (*.png)
6. オブジェクトを保存する場所を指定します。

注: ファイルは、ルート出力ディレクトリーが管理者によって指定されている場合にエクスポートされます。

以下の 2 つのオプションがあります。

- a. 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
 - b. オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
7. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
 8. この照会結果セットを E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。
 9. 「次へ」をクリックします。

- CSV エクスポート形式のテキストを選択した場合、「[file type] エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。次に、「区切り文字オプションを指定します」ページが開きます。このページで、選択したフォーマットで結果セットがどのように表示されるかに関する詳細情報を指定します。
- XML を除く、他のエクスポート・フォーマットを選択した場合、「[file type] エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
- XML フォーマットを選択した場合は、「次へ」の代わりに「終了」をクリックしてください。

10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

「照会をメールにエクスポート」操作のオプションの指定:

「照会をメールにエクスポート」操作を使用して、照会結果を E メールで送信します。

このタスクについて

「照会をメールにエクスポート」操作をアクションに追加するには、以下のようにします。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「照会をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 照会に複数の結果セットがある場合、エクスポートする結果セットを「結果セット」フィールドで選択します。
4. 照会に複数の表示モードがある場合、エクスポートする表示モードを「表示モード」リストから選択します。
5. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - テキスト (*.txt)
 - **CSV** (*.csv)
 - **PDF** (*.pdf)
 - **HTML** (*.html)
 - **IXF** (*.ixf)
 - **XML Extensible Markup Language** ファイル (*.xml)
 - **XLS** Microsoft Excel 97-2003 (*.xls)
 - **XLSX** Microsoft Excel 2007 (*.xlsx)
 - **PNG** (*.png)
6. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。

7. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、フィールドの横にある省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」が開きます。
8. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式編集機能」が閉じます。
9. 「次へ」をクリックします。
 - XML を除くエクスポート・フォーマットを選択した場合、「[file type] エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページで、作成するファイルのタイプに応じて有効な追加のオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - XML 形式を選択した場合、「メール設定の指定」ページが開きます。ステップ 10 から先に進んでください。
 - CSV エクスポート形式のテキストを選択した場合、「[file type] エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。次に、「区切り文字オプションを指定します」ページが開きます。このページで、選択したフォーマットで結果セットがどのように表示されるかに関する詳細情報を指定します。
10. 「メール設定を指定します」ページで、以下の情報を指定してください。
 - 「フォーマット」リストから本体テキストの形式を選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
 - 「宛先」フィールドに、受信者の E メール・アドレスを指定します。
 - 「cc」フィールドに、追加の受信者を指定します。
 - 「件名」フィールドに、Eメールの件名を指定します。
 - 「メッセージ」フィールドに、Eメールの内容を指定します。

注:

Eメールのテキストに組み込みイメージを含めたい場合は、次の HTML スニペットをテキストに挿入する必要があります。

```
</img>
```

この *cid:* は、フォーマット設定された Eメール内で組み込みイメージを参照する際に必要となる標準のコンテンツ ID の省略形であり、*[image name]* はイメージ・ファイルの名前です。例えば、*image1.png* という名前のイメージ・ファイルを組み込むには、Eメールのテキストに以下の HTML スニペットを挿入します。

```
</img>
```

- 「送信元」フィールドに、送信元の Eメール・アドレスを指定します。

「メール設定を指定します」ページの各フィールドで、省略符号 (...) ボタンをクリックして公式編集機能にアクセスできます。公式編集機能を使用して、条件値を指定します。

注: このページで設定する値を、イテレーターの処理時に置換変数を使用して動的に指定することができます。イテレーターでアクション・グループを使用して、複数の受信者に別個の Eメール・メッセージを送信できます。これを行うには、必要なすべての Eメール情報を返すイテレーター照会を指定し、

イテレーター変数を定義し、「メール設定の指定」ページの該当するフィールドに、等号を使用して変数名を入力する (=Form、=SMTP) 必要があります。タスクが実行されると、イテレーターはイテレーター照会レコードを処理し、反復のたびに E メール・パラメーターのセットを抽出し、これを「照会をメールにエクスポート」操作に渡します。

11. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
 - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

12. 「終了」をクリックして、「操作ウィザード」を閉じます。

HTML テーブルを E メールで送信:

スケジュール・タスクを操作するときに照会結果を HTML テーブルとして E メールで送信できます。

始める前に

選択されたレター・フォーマットが HTML であること、および追加するテーブルも HTML フォーマットで保存されていることを確認してください。

このタスクについて

挿入されたテーブルは HTML フォーマットでレターの本文に表示されます。

HTML テーブルを追加できるのは、以下のスケジューラー・タスクの場合に限られます。

- 照会をメールにエクスポートするタスク。このタスクの結果として、照会結果セットを HTML フォーマットで取得します。このフォーマットの照会セットは、E メールで送信できます。
- リソースをメールで送信する操作タスク。このタスクでは、他のタスクの実行時に作成された必要な HTML 表を挿入することができます。

HTML レターの本文に HTML テーブルを挿入するには、以下のようになります。

手順

1. 「操作ウィザード」ウィンドウの「メール設定を指定します」ページで、「メッセージ」フィールドの省略符号ボタン (...) をクリックします。「公式編集機能」が開きます。

2. 関数のリストで「スケジューラー」を展開して「**insertHTMLTable**」を選択するか、または「フィルター」フィールドに `insertHTMLTable` と入力します。
3. この関数をダブルクリックし、そのパラメーターを指定します。
4. 「**OK**」をクリックして、この関数を追加して公式編集機能を終了します。指定した関数は、「メッセージ」フィールドに追加されます。

例

以下のパラメーターを使用すれば、レターに `grid.html` テーブルを追加できます。

- エクスポート・タスクを操作するときは、パラメーターを指定せずに単に関数を追加します。

```
=insertHTMLTable()
```

- リソース操作タスクを操作するときは、エクスポートした HTML ファイルのエンコードが UTF-8 であれば、パラメーターを 1 つのみ指定できます。

```
=insertHTMLTable("grid.html")
```

- エクスポートした HTML ファイルのエンコードが UTF-8 でなければ、両方のパラメーターを指定する必要があります。

```
=insertHTMLTable("grid.html", "UTF-16")
```

「即時報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定:

「即時報告書をメールにエクスポート」操作を使用して、即時報告書を E メールで送信します。

このタスクについて

「即時報告書をメールにエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「即時報告書をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - **PDF (*.pdf)**
 - **HTML (*.html)**
4. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。
5. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」が開きます。
6. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「**OK**」をクリックします。「公式編集機能」が閉じます。
7. 「次へ」をクリックします。

- PDF 形式を選択した場合、「PDF エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページで、PDF フォーマットに有効な追加のエクスポート・オプションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - HTML 形式を選択した場合、「メール設定の指定」ページが開きます。
8. 「メール設定の指定」ページで、以下のパラメーターの値を指定します。
- 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
 - Eメールの送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
 - Eメールの写しの送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
 - Eメールの件名を「件名」フィールドに指定します。
 - Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに指定します。
 - Eメールの送信側の Eメール・アドレスを「送信元」フィールドに指定します。

「メール設定を指定します」ページの各フィールドで、省略符号 (...) ボタンをクリックして公式編集機能にアクセスできます。公式編集機能を使用して、条件値を指定します。

9. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
- a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

「即時報告書のエクスポート」操作のオプションの指定:

「即時報告書のエクスポート」操作を使用して、即時報告書の結果をファイルにエクスポートします。

このタスクについて

「即時報告書のエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。

2. 「即時報告書のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - PDF (*.pdf)
 - HTML (*.html)
4. オブジェクトを保存する場所を指定します。

注: ファイルは、ルート出力ディレクトリーが管理者によって指定されている場合にエクスポートされます。

以下の 2 つのオプションがあります。

- 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
 - オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
5. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
 6. この即時報告書を E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。
 7. PDF 形式を選択した場合、「次へ」をクリックします。「PDF エクスポート・オプションを指定します」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
 8. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作のオプションの指定:

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作を使用して、ビジュアル報告書を E メールで送信します。

このタスクについて

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。

3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - **PDF (*.pdf)**
 - **HTML (*.html)**
4. 「添付ファイル名」フィールドに、Eメールの添付ファイルの名前を指定します。
5. 添付ファイル名を条件付きで指定する場合は、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」が開きます。
6. 添付ファイルの名前を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。「公式編集機能」が閉じます。
7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
8. 「メール設定の指定」ページで、以下のパラメーターの値を指定します。
 - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
 - Eメールの送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
 - Eメールの写しの送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
 - Eメールの件名を「件名」フィールドに指定します。
 - Eメールの本文テキストを「メッセージ」フィールドに指定します。
 - Eメールの送信側のEメール・アドレスを「送信元」フィールドに指定します。

「メール設定を指定します」ページの各フィールドで、省略符号 (...) ボタンをクリックして公式編集機能にアクセスできます。公式編集機能を使用して、条件値を指定します。

9. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
 - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。
- 「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。
10. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作のオプションの指定:

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作を使用して、ビジュアル報告書をファイルにエクスポートします。

このタスクについて

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作のオプションを指定するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「操作の指定」ページを開き、「操作の追加」をクリックします。「操作ウィザード」が開きます。
2. 「ビジュアル報告書のエクスポート」をクリックして、「次へ」をクリックします。「エクスポート・パラメーターの指定」ページが開きます。
3. 「エクスポート・タイプ」ドロップダウン・リストからエクスポートするファイルのタイプを選択します。有効なファイル・タイプは、以下のとおりです。
 - **PDF (*.pdf)**
 - **HTML (*.html)**
4. オブジェクトを保存する場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
 - オブジェクトの静的保存ロケーションを指定するには、「パス」をクリックして、オブジェクトを保存する先のディレクトリー・ロケーションを入力します。

「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
 - オブジェクトの保存場所を条件付きで指定するには、「公式」をクリックして、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、オブジェクトの保存場所を決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
5. スケジュール・タスクの完了時にエクスポート・ファイルを指定の場所から除去するには、「タスクの完了後に除去」チェック・ボックスを選択します。
6. このビジュアル報告書を E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマークを付ける」チェック・ボックスを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。「[file type] エクスポート・オプションの指定」ページが開きます。このページでは、作成するファイルのタイプに応じて選択可能な追加のオプションを選択できます。
8. 「終了」をクリックします。「操作ウィザード」が閉じます。

リソース操作タスクの追加

リソース操作アクションを使用して、スケジュール・タスクにより生成されるリソースを自動的にコピー、貼り付け、削除、および E メール送信することができます。

このタスクについて

リソース操作アクションをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「アクションの追加」をクリックします。「アクション・ウィザード」が開きます。
3. 「アクション名」フィールドにアクションの名前を指定し、「リソース操作」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「リソース操作タイプの指定」ページが開きます。
4. 「コピー」または「メールの送信」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。ウィザードの次のページが開きます。
5. 「コピー」または「Eメールの送信」オプションを指定して、「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「タスク」ウィンドウに制御が戻ります。
6. 「OK」をクリックします。

リソース・コピーのパラメーターの指定:

リソース・コピー操作アクションを使用すれば、スケジュールされたタスクによって生成されたリソースを自動的にコピー、貼り付け、および削除できます。

このタスクについて

リソース・コピーのパラメーターを指定するには、以下のようになります。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「リソース操作タイプの指定」ページを開きます。
2. 「コピー」をクリックしてから「次へ」をクリックします。「リソース・コピーのパラメーターの指定」ページが開きます。
3. コピーするリソースを指定します。以下の 2 つのオプションがあります。
 - オブジェクトの静的ソース・ロケーションを指定するには、「パス」をクリックして、オブジェクトのソース・ロケーションを入力します。
 - オブジェクトに対して条件付きソースの場所を指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、オブジェクトのロケーションを決定するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
4. リソースの保存場所を指定します。以下の 2 つのオプションがあります。

- 「設定」ウィンドウの「サーバー・サイド・ファイル・システム」ページで「ルート出力ディレクトリー」が指定されている場合は、「パス」フィールドに、パスとファイル名、またはファイル名のみを入力できます。ファイルは自動的にこのルート・ディレクトリーにエクスポートされます。QMF for WebSphere で指定できるのは、管理者が設定したルート・ディレクトリー内のパスのみです。それ以外の場合、エクスポートは禁止され、エラーが発生します。
 - リソースに対して条件付きソースの宛先を指定するには、「公式」をクリックしてから、省略符号 (...) をクリックします。「公式編集機能」で、リソースの保存場所を判別するために使用する公式を指定し、「OK」をクリックします。
5. ソースの場所から宛先の場所へリソースをカット・アンド・ペーストするには、「移動」チェック・ボックスを選択します。
 6. 移動したリソースを格納する新規フォルダーを作成するには、「フォルダーの作成」チェック・ボックスを選択します。
- 注: QMF サーバーおよび QMF for WebSphere では、「フォルダーの作成」チェック・ボックスは選択されていて、クリアすることはできません。
7. タスク完了後に、移動したリソースのコピーを削除するには、「タスクの完了後に削除」チェック・ボックスを選択します。
 8. このリソースのコピーを E メールに自動的に添付できるようにする場合は、「添付ファイルとしてマーク」チェック・ボックスを選択します。
 9. 「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、制御が「タスク」ウィンドウに戻ります。

メール設定の指定:

リソース・メール送信操作アクションを使用すれば、生成されたリソースを E メールで自動的に送信できます。

このタスクについて

メール設定を指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「アクション・ウィザード」の「リソース操作タイプの指定」ページを開きます。
2. 「メールの送信」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。「メール設定の指定」ページが開きます。
3. 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストで指定します。使用可能なフォーマットは「テキスト」および「HTML」です。
4. E メール宛先を「宛先」フィールドに指定します。
5. 追加の宛先を「cc」フィールドに指定します。
6. 「件名」フィールドに、Eメールの件名を指定します。
7. Eメールのテキストを「メッセージ」フィールドに指定します。

イメージや、他の使用可能なタイプのファイルを添付できます。

E メールテキストに組み込みイメージを含めたい場合は、次の HTML スニペットをテキストに挿入する必要があります。

```
</img>
```

この *cid:* は、フォーマット設定された E メール内で組み込みイメージを参照する際に必要となる標準のコンテンツ ID の省略形であり、*[image name]* はイメージ・ファイルの名前です。例えば、*image1.png* という名前のイメージ・ファイルを組み込むには、Eメールのテキストに以下の HTML スニペットを挿入します。

```
</img>
```

8. Eメールの送信側の Eメール・アドレスを「送信元」フィールドに指定します。

「メール設定を指定します」ページの各フィールドで、省略符号 (...) ボタンをクリックして公式編集機能にアクセスできます。公式編集機能を使用して、条件値を指定します。

9. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。

- a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストから必要なサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックして作成します。
- b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、*javamail* でサポートされる必要なキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。

10. 「追加」をクリックします。「パスをテキストまたは公式として入力」ウィンドウが開きます。
11. タスクによって Eメールで送信するリソースへのパスを指定し、「OK」をクリックします。「パスをテキストまたは公式として入力」ウィンドウが閉じます。
12. 「添付」領域で、2つのリストから必須指定のオプションを選択します。
 - a. 最初のリストから、自動的に追加する添付ファイルを選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。
 - 自動添付ファイルなし: リソースを自動的に添付しません。
 - マーク済みのみ添付: エクスポート操作またはコピー操作でマークされたリソースのみ添付します。
 - すべて添付: エクスポート操作またはコピー操作で作成されたすべてのリソースを添付します。
 - b. 2番目のリストから、アクションの実行後に添付ファイルに適用する手順を選択します。使用可能なオプションは以下のとおりです。

- 自動添付ファイルをすべてクリア: アクションの実行後に、自動的に送信されたすべての添付ファイルを削除します。
- グループ内の自動添付ファイルをクリア: アクションの実行後に、Eメールの送信アクションによりアクションのグループに対して作成された自動添付ファイルをすべて削除します。
- 自動添付ファイルをクリアしない: アクションの実行後にすべての自動添付ファイルを保管します。

13. 「終了」をクリックします。「アクション・ウィザード」が閉じて、「タスク」ウィンドウに制御が戻ります。

アクション・グループの追加

アクション・グループを使用して、連続して実行する必要がある一連のアクションを作成することができます。

始める前に

アクション・グループを作成する前に、まずスケジュール・タスクを作成する必要があります。

このタスクについて

アクション・グループをスケジュール・タスクに追加するには、以下のようになります。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、「アクションの追加」をクリックして、「アクション」ウィザードを開きます。
3. 「アクション名」フィールドに名前を入力します。
4. 「アクション・グループ」を選択してから、「終了」をクリックします。

アクション・グループへのアクションの追加:

アクション・グループにアクションを追加するには、ドラッグ・アンド・ドロップの方法を使用できます。

始める前に

アクション・グループを作成する必要があります。

アクションを作成する必要があります。

このタスクについて

アクション・グループにアクションを追加するには、以下のようになります。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。

2. 「タスク」ウィンドウで、グループに追加するアクションを選択します。
3. 選択したアクションをアクション・グループ項目にドラッグします。

次のタスク

次のセクション: イテレーター・パラメーターの設定

アクション・グループからのアクションの削除:

アクション・グループからアクションを削除するには、ドラッグ・アンド・ドロップ方式を使用できます。

始める前に

アクション・グループを作成し、そのグループにアクションを取り込んでおく必要があります。

このタスクについて

アクション・グループからアクションを削除するには、以下のようにします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、編集するアクション・グループを展開します。
3. アクション・グループから削除するアクションを選択します。
4. 選択したアクションをアクション・グループの外側にドラッグします。

イテレーター・パラメーターの設定:

イテレーターを使用すれば、周期的に何度もアクション・グループを実行できます。イテレーター設定を管理するには、「イテレーター・パラメーター」ウィンドウを使用します。

始める前に

アクション・グループを作成する必要があります。

このタスクについて

イテレーター・パラメーターを設定するには、以下のようにします。

手順

1. 「タスク」ウィンドウの「アクション」リストで、周期的に実行するアクション・グループを右クリックし、ポップアップ・メニューから「イテレーターの設定」を選択します。
2. イテレーターの「パラメーター」ウィンドウで、省略符号 (...) をクリックして、イテレーターの照会を指定します。

この照会の列ではイテレーター変数が定義されます。行数は反復数を示します。

3. 「開く」ウィンドウで、イテレーターの照会として使用するオブジェクトにナビゲートし、そのオブジェクトを選択します。

照会として以下のオブジェクトを使用できます。

- 図表
 - ビジュアル照会
 - 分析照会
 - dynamart
 - 複合 dynamart
 - 表
4. 「終了」をクリックします。選択したオブジェクトへのパスが「照会パス」フィールドに表示されます。
 5. 選択したオブジェクトを含むデータ・ソースが「データ・ソース」リストに追加されます。「ログイン」フィールドと「パスワード」フィールドでデータ・ソースのログイン情報を指定できます。
 6. 別のデータ・ソースをリストに追加するには、以下の手順を実行します。
 - a. 「データ・ソースの追加」をクリックして、「データ・ソースの追加」ウィンドウを開きます。
 - b. 「データ・ソース」リストで、追加するデータ・ソースを選択します。
 - c. 「ユーザー名」フィールドと「パスワード」フィールドにログイン情報を入力します。
 - d. 「ユーザー名」フィールドに入力したユーザー ID のパスワードを QMF に記憶させるには、「パスワードを保存」チェック・ボックスを選択します。
 7. 以前追加したデータ・ソースをリストから削除するには、対象のデータ・ソースを選択し、「データ・ソースの削除」をクリックします。
 8. 「変数」リストで、「オブジェクトの実行」アクションで指定するソース・オブジェクトで使用されるプロンプトに照会列をリンクします。「プロンプト名」セルをクリックし、ドロップダウン・リストからプロンプトを選択します。
 9. 「失敗時に続行」チェック・ボックスを使用して、エラーが発生したときにイテレーターの動作を続行するかどうかを指定します。このチェック・ボックスが選択されている場合は、反復内でエラーが発生したときに、イテレーターはこの反復をスキップして動作し続けます。このチェック・ボックスがクリアされている場合にエラーが発生すると、イテレーターは動作を停止します。

注: エラー・メッセージはすべて「出力」ビューに表示できます。

10. 「OK」をクリックして、「イテレーター・パラメーター」ウィンドウを閉じます。

アクション・グループでのプロンプトの管理:

各種データ・オブジェクト (パラメーターを含む照会、即時報告書、ビジュアル報告書、プロシージャなど) を実行するスケジュール・タスクを作成できます。

このタスクについて

タスクに指定されたソース・オブジェクトにパラメーター値を渡す方法を定義するには、「共有プロンプトの管理」ウィンドウを使用します。

注: オブジェクトのタイプに応じて、パラメーターはさまざまなエレメントで表されます。照会のパラメーターは、これらの照会に定義されたプロンプトです。即時報告書およびビジュアル報告書のパラメーターは、これらの報告書の基となっている照会に指定されたプロンプトです。プロシーチャーのパラメーターは、これらのプロシーチャーに定義されている変数です。

ソース・オブジェクトで使用する、類似したプロンプトをまとめてグループ化できます。これにより、1つのプロンプト・グループ内のすべてのプロンプトが、このグループに渡された値を受け取ります。デフォルトでは、アクション・グループ内のソース・オブジェクトに含まれるプロンプトと同じ数のグループが存在します。各グループは特定のプロンプトを1つ保管し、そのプロンプトの名前を借用します。プロンプトは、グループ間で移動できます。空のグループは許可されないため、グループから最後のプロンプトが移動されると、そのグループは自動的に削除されます。

アクション・グループを作成し、オブジェクトの実行アクションをグループに取り込んでおく必要があります。

共有プロンプトを管理するには、以下のようにします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、アクション・グループを右クリックしてから、「プロンプトの管理」を選択します。
3. 「共有プロンプトの管理」ウィンドウの「使用可能なプロンプト」リストから、グループに追加するプロンプトを選択します。
4. 「共有プロンプト」リストから、プロンプトを追加するグループを選択します。
5. 「グループに追加」をクリックします。選択したプロンプトがプロンプト・グループに追加されます。
6. プロンプト・グループからプロンプトを削除するには、「共有プロンプト」リストからプロンプトを選択した後、「プロンプトのデタッチ」をクリックします。
7. プロンプト・グループの名前を変更するには、名前変更するプロンプト・グループを選択してから、「プロンプト・グループの名前変更」をクリックします。
8. 「プロンプト・グループ」ウィンドウで、表示する名前およびストリングを指定してから、「OK」をクリックします。
9. 「共有プロンプト」リスト内のプロンプト・グループの順序を変更するには、プロンプト・グループのノード、またはグループ内のプロンプトを選択し、「プロンプト・グループを上に移動」または「プロンプト・グループを下に移動」をクリックします。

10. アクション・グループのイテレーター照会を追加し、アクション・グループ内のアクションに指定した、ソース・オブジェクトで使用されているパラメーターを含む照会列にリンクします。

アクションおよびアクション・グループの変数の指定

各種データ・オブジェクト (パラメーターを含む照会、即時報告書、ビジュアル報告書、プロシージャーなど) を実行するスケジュール・タスクを作成できます。

このタスクについて

タスクで指定されたソース・オブジェクトにパラメーター値をどのように渡さなければならないのかを定義するには、「変数の設定」ウィンドウを使用します。また、アクションで指定されたパラメーター自体を置換変数として使用することもできます。例えば、パラメーターを使用することでファイル・システム・パスを形成できます。

注: オブジェクトのタイプに応じて、パラメーターはさまざまなエレメントで表されます。照会の場合、パラメーターは、照会に対して定義されたプロンプトです。即時報告書およびビジュアル報告書の場合、パラメーターは、報告書が基づいている照会に指定されたプロンプトです。プロシージャーの場合、パラメーターは、プロシージャーで定義されている変数です。

パラメーター値は、アクション・グループと単一アクションの両方に対して設定できます。また、同じグループにイテレーターを設定することもできます。単一アクションによって提供されたパラメーターが優先され、次に、グループに対して設定されたパラメーター値、その次に、イテレーターによって設定されたパラメーター値の順で使用されます。

パラメーター値を指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、作業対象にするタスクを選択し、「タスクの編集」をクリックします。
2. 「タスク」ウィンドウで、処理するアクションまたはアクション・グループを右クリックし、メニューから「変数の設定」を選択します。選択されたデータ・オブジェクトに対して指定されているすべてのパラメーターが、「変数の設定」ウィンドウのパラメーター・リストに表示されます。

注: 共有プロンプトがすでに割り当てられているアクション・グループにパラメーター値を設定する場合は、ソース・オブジェクトに定義されているパラメーターではなく、指定された共有プロンプトが表示されます。

3. パラメーターを追加するには、「変数の追加」をクリックして、「変数の追加」ウィンドウでパラメーターの名前と値を指定します。
4. 変数を編集または削除するには、編集または削除する変数を選択し、「変数の編集」または「削除」をクリックします。
5. パラメーター値を設定するには、「変数の追加」ウィンドウまたは「変数の編集」ウィンドウを開き、「値」フィールドに定数値または公式を入力します。公式編集機能ウィンドウを開くには、「値」フィールドの横にある省略符号 (...) をクリックします。

注: また、「変数の設定」ウィンドウに直接、パラメーター値を設定できます。それには、単にパラメーター・テーブルの必須セルにパラメーター値を入力するだけです。

6. 「上へ移動」や「下へ移動」をクリックすれば、パラメーターの計算順序を変更できます。パラメーターは、リストに表示されているとおりに順番に計算されません。すでに計算されているパラメーターは、他のパラメーターを計算するために使用できます。
7. 「OK」をクリックして、「変数の設定」ウィンドウを閉じます。

スケジュール済みタスクについてのユーザー資格情報の編集

スケジュール済みタスクで使用されるリポジトリ、リポジトリ・ストレージ、リポジトリ接続、およびデータ・ソースについてのユーザー資格情報を変更できます。

このタスクについて

ユーザー名とパスワードなどのユーザー情報は、リポジトリおよびデータ・ソースにアクセスしたり、するために、スケジュール済みタスクで使用されます。このユーザー情報は、セキュリティ上の理由で定期的に変更されます。1 つまたは複数のリポジトリ、リポジトリ・ストレージ、またはデータ・ソースについてのユーザー資格情報を変更するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「スケジュール・タスク」で、編集するユーザー資格情報を持つタスクを選択し、「タスク資格情報」をクリックします。「タスク資格情報」ウィンドウが開きます。
2. ユーザー資格情報の編集が必要なリポジトリ、リポジトリ・ストレージ、またはデータ・ソースを表示するには、「タスク資格情報を指定します」ページですべてのチェック・ボックスを選択し、「妥当性検査」をクリックします。
3. ユーザー名およびパスワードを編集するリポジトリ、リポジトリ・ストレージ、またはデータ・ソースをダブルクリックします。「ユーザー情報」ウィンドウが開きます。
4. 選択されたオブジェクトについての新しいユーザー資格情報を指定し、「OK」をクリックします。

注: 同じユーザーに関連付けられているすべてのリポジトリ、リポジトリ・ストレージ、またはデータ・ソースのパスワードを変更する場合は、「このユーザーの [ObjectName] パスワードをすべて変更」チェック・ボックスを選択します。

5. 入力されたユーザー情報が正しいことを確認するには、「タスク資格情報」ウィンドウで編集済みオブジェクトのチェック・ボックスを選択し、「妥当性検査」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

スケジュール・タスクのコピー

既存のスケジュール・タスクをコピーして変更することにより、スケジュール・タスクを追加できます。

このタスクについて

スケジュール・タスクをコピーするには、以下のようにします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、「タスク」リストからコピーするタスクを選択して、「タスクのコピー」をクリックします。「タスク」ウィンドウが開きます。

注: コピーするタスクは「タスク」リストから 1 つのみ選択できます。

2. 「タスク名」フィールドで、コピーするタスクの名前を入力します。
3. 「リポジトリ」リストから、タスクにアクセスさせるリポジトリを選択します。
4. 「ユーザー情報の設定」をクリックして、リポジトリのログイン名とパスワード、およびリポジトリ・ストレージのパスワードを指定します。
5. 「アクション」リストで、タスクとともにコピーするアクションを編集、追加、または除去できます。
6. 「OK」をクリックします。スケジュール・タスクがコピーされ、「スケジュール・タスク」ビューの「タスク」リストに追加されます。

注: スケジュール・タスク実行の時間設定はコピーされません。

タスクのスケジュール

スケジュール・タスクを、指定した時刻に実行するよう構成できます。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、スケジュールするタスクを選択し、「タスクのスケジュール」をクリックします。
2. 「スケジュール」リストにタスクに適用するスケジュールを指定します。
3. スケジュールを追加するには、「スケジュールの追加」をクリックします。
4. 不要なスケジュールを除去するには、「スケジュールの除去」をクリックします。
5. 「スケジュールのタイプ」リストからタスクの実行頻度を選択します。
6. 「スケジュールのタイプ」リストの隣の領域に詳細を指定します。オプションは、選択したスケジュール・タイプに応じて異なります。
7. タスクの実行を有効/無効にするには、「タスクを無効にする」チェック・ボックスを選択したりクリアしたりします。
8. 「OK」をクリックします。

失敗したタスクに関する E メール通知を指定

失敗したタスクに関するデバッグ情報とともに特定のアドレスに送信される E メール通知を指定できます。

このタスクについて

特定のタスク失敗に関する E メール通知を指定するには、以下のようにします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューで、通知を追加する対象のタスクを選択し、「E メール通知」をクリックします。
2. 「タスク通知設定」ウィンドウで「タスクが失敗した場合に E メール通知を送信」チェック・ボックスを選択します。
3. 「事前定義設定の使用」オプションを選択して、「設定」ウィンドウの「E メール通知」領域にある「E メール」ページで管理者がグローバルに設定した構成のいずれかを使用します。
 - a. 通知で使用する構成を選択します。
 - b. リストが空の場合は、「設定の追加」をクリックすることでグローバル構成を追加できます。グローバル構成が追加され、「設定」ウィンドウの「E メール通知」領域にある「E メール」ページで使用可能になります。
4. 「カスタム」オプションを選択して、この特定タスクの通知設定を指定します。
5. 「メッセージ・プロパティ」領域で、以下の設定を指定します。
 - 本文テキストのフォーマットを「フォーマット」リストから選択します。使用可能な形式は、「テキスト」と「HTML」です。
 - E メールを送信する必要がある送信先アドレスを「宛先」フィールドに指定します。
 - Eメールの写しを送信する必要がある送信先アドレスを「cc」フィールドに指定します。
 - Eメールを送信する必要がある送信元アドレスを「送信元」フィールドに指定します。
6. SMTP サーバー・パラメーターを指定する場合は、「SMTP 設定」をクリックします。「SMTP 設定」ウィンドウで、管理者によって事前定義されたサーバーを使用するか、カスタム・サーバーを使用するかを指定します。
 - a. 事前定義された SMTP サーバーを使用する場合は、事前定義されたサーバーのリストからサーバーを選択するか、「サーバーの追加」をクリックしてサーバーを作成します。
 - b. カスタム・サーバーを使用する場合は、サーバーのアドレスやポート番号などのサーバー・パラメーターを指定します。SMTP サーバーに認証が必要な場合は、「SMTP 認証の使用」を選択し、ユーザー名とパスワードを指定します。アクセス権限の設定を追加で指定する必要がある場合は、「拡張」をクリックして「拡張 SMTP 設定」ウィンドウを開きます。このウィンドウでは、javamail でサポートされるキーワードを追加できます。「OK」をクリックします。

「OK」をクリックして、「SMTP 設定」ウィンドウを閉じます。
7. サポート・データを E メール添付ファイルに組み込んで送信する場合は、「サポート・データの添付」チェック・ボックスを選択します。
8. 「OK」をクリックして、指定した通知設定を保存します。

スケジュール・タスクのエクスポートおよびインポート

「スケジュール・タスク」ビューを使用して、スケジュール・タスクをエクスポートおよびインポートします。

手順

1. 「スケジュール・タスク」ビューを開きます。
2. スケジュール・タスクをエクスポートするには、エクスポートするタスクを選択し、「タスクのエクスポート」をクリックします。Web ブラウザーが、エクスポートされたスケジュール・タスクを自動的にダウンロードします。スケジュール・タスクは、JDFX フォーマットでエクスポートされます。
3. スケジュール・タスクをインポートするには、「タスクのインポート」をクリックします。
4. 「ファイルを開く」ウィンドウで、「参照」をクリックして、インポートする JDFX ファイルにナビゲートし、「開く」をクリックします。
5. 「OK」をクリックして、スケジュール・タスクをインポートし、「ファイルを開くウィンドウを閉じます。

「QMF カタログ」ビューの使用

「QMF カタログ」ビューを使用して、QMF カタログを作成および管理します。QMF カタログとは、保存されたオブジェクト (照会、プロシージャ、および書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、その他の各種設定と情報が入っているデータベースのセットです。QMF カタログは、Db2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。QMF カタログについて詳しくは、QMF for Workstation の資料を参照してください。

「QMF カタログ」ビューを使用して、以下のアクションを実行します。

1. 「QMF カタログ名」域で、使用可能な QMF カタログのリストを調べます。リストをフィルターするには、「フィルター・テキストの入力」フィールドを使用してください。
2. 「ラベル」フィールドには、QMF サーバーに登録されている QMF カタログのリストにアクセスするとき、QMF クライアント・コンポーネントが使用する名前が表示されます。見出しを変更するには、「ラベルの編集」をクリックしてください。
3. 新しい QMF カタログをリストに追加するには、「QMF カタログの登録」をクリックします。詳しくは、『QMF カタログの登録』を参照してください。

注: QMF クライアント・コンポーネントでは、すべての登録済み QMF カタログが個別の接続オプションとして有効になります。

4. QMF カタログを名前変更、複製、または除去するには、そのカタログを右クリックして、実行するアクションを選択します。
5. QMF カタログを編集するには、そのカタログを右クリックして、メニューから「プロパティ」を選択します。

QMF カタログの登録

「QMF カタログの登録」ウィザードを使用して、QMF カタログを登録します。

このタスクについて

QMF カタログを登録するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「QMF カタログ」ビューで、「QMF カタログの登録」をクリックします。
2. 「QMF カタログ名」フィールドに、QMF カタログの名前を指定します。
3. 「JDBC ドライバー」フィールドには、データベースへのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。JDBC ドライバー情報をセットアップしたときに定義した既存のライブラリーを選択するか、または「ライブラリーの構成」をクリックして、追加の JDBC ドライバー・ライブラリーを作成できる「JDBC ライブラリー」ダイアログを開きます。
4. 「ホスト」フィールドで、登録する QMF カタログをホストするサーバーのアドレスを指定します。
5. 「ポート」フィールドに、使用するサーバー・ポートを指定します。
6. 「データベース」フィールドで、登録する QMF カタログを保管するデータベースの名前を指定します。
7. オプション: リポジトリのドライバー固有の接続ストリング・キーワードを管理するには、「拡張」をクリックします。
8. オプション: QMF と Db2 for z/OS データベースとの間の PassTicket ベースのシングル・サインオン接続を構成するには、「シングル・サインオン」をクリックします。
9. オプション: 初めて直接 DRDA 接続を使用して QMF カタログに接続する場合、直接 DRDA パッケージをバインドする必要があります。これを行うには、以下の手順を完了します。
 - a. 「パッケージのバインド」をクリックします。
 - b. 「所有者 ID」フィールドに、バインディング・プロセスに必要な権限を持つ特権 SQLID を入力します。
 - c. 「インストール」をクリックします。
10. 「ユーザー名」フィールドと「パスワード」フィールドで、データベースへの接続に必要なユーザー資格情報を指定します。
11. 「次へ」をクリックして、「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページを開きます。

QMF カタログ・オブジェクトの作成または更新

「QMF カタログの登録」ウィザードの「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページを使用して、QMF カタログ・オブジェクトが作成されるか、または現在のデータベース上で更新されるかを選択します。

このタスクについて

QMF カタログのデータベース・オブジェクトを作成または更新するには:

手順

1. 「QMF カタログの登録」ウィザードの「カタログ・オブジェクトを作成または更新します」ページを開きます。
2. QMF カタログ表のセットがデータベースで作成されたことがあるかどうかということと、既存の QMF カタログや、作成される QMF カタログで現在サポー

トされている、または今後サポートされるオブジェクト名 (長い名前または短い名前) の種類を指定します。以下のいずれかを選択します。

- QMF カタログ表がこのデータベース上に既に存在していて、それらを更新しない場合、「カタログ表はすでに作成されている」を選択します。カタログ表のセットは、データベースがリポジトリ内に、または前バージョンのアプリケーションによって最初に構成されたときに、作成された可能性があります。このオプションは、表が既に作成済みであることが分かっている、ストアド・プロシージャを再実行するだけか、またはカタログ・パッケージを再バインドするだけの場合に選択します。
- 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」オプションは、以前に QMF カタログ表をインストールしたことのないデータベースに QMF カタログを登録していて、オブジェクトに短い名前しか使用しない場合、または旧バージョンのアプリケーションからアップグレードしていて、既存の QMF カタログ表でこれからもオブジェクトの短い名前のみをサポートする場合に選択します。データベース上に既存の QMF カタログ表がない場合は、新しい QMF カタログ表が作成されます。新しいバージョンにアップグレードしていて、表のセットがデータベース上に存在する場合、それらが検査されて必要に応じて更新または追加されます。表の作成に使用される SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。
- 「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」は、初めて QMF カタログをこのデータベースに登録していて、長い名前を使用する QMF カタログ表のセットを作成する場合、アプリケーションの以前のバージョンからアップグレードしていて既存の QMF カタログ表がこれからもオブジェクトの長い名前だけをサポートする場合、または短い名前をサポートする既存のカタログ表を長い名前をサポートするカタログ表に変換する場合に選択します。このオプションを選択するには、現在のデータベースが長い名前をサポートしていなければなりません。長い名前をサポートする QMF カタログ表を作成するように選択した場合は、バージョン 8.1 よりも前の QMF アプリケーションでは、長い名前の QMF カタログ表を使用できません。

データベース上に QMF カタログ表がない場合は、長い名前をサポートする QMF カタログ表が作成されます。長い名前をサポートする QMF カタログ表のセットがデータベースで検出された場合、それらは必要に応じて更新または追加されます。短い名前を使用する既存の QMF カタログ表セットがデータベース上で検出された場合、それらは長い名前をサポートするように変換されます。データベースは検査されて、長い名前のサポートが使用可能であることが確認されます。QMF カタログ表で長い名前を使用する必要はありません。データベースで長い名前が使用されている場合でも、QMF カタログ表では短い名前を使用できます。変換が行われると、8.1 以降の QMF アプリケーションでしか、これらの QMF カタログ表を使用できなくなります。

表の作成または更新に使用する SQL ステートメントは確認および変更できます。既存のカタログ表内のすべてのデータは保持されます。

3. カタログ表が作成されていない場合は、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズの有効化」チェック・ボックスを選択して、データベース・オブジェクトの命名方法をカスタマイズできるウィンドウを開くことができます。
4. 「次へ」をクリックして、ウィザードの次のページを開きます。次に選択の例を示します。
 - 「カタログ表はすでに作成されている」オプションを選択した場合は、ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」 または 「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」 オプションを選択した場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けないと、ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択してください」ページが開きます。
 - 「短い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」 または 「長い名前をサポートするようにカタログ表を作成または更新」 オプションを選択した場合、「データベース・オブジェクト名のカスタマイズを可能にする」チェック・ボックスにチェック・マークを付けていると、「置換変数値の入力」ウィンドウが開きます。「値」列にカスタマイズしたデータベース・オブジェクト名を入力してから、「OK」をクリックします。

注: ダイアログの「値」列には、各データベース・オブジェクトのデフォルト名が表示されます。作成されるオブジェクトを検討し、必要であれば名前変更することができます。例えば、すべての索引名の前に IX を付けることもできます。

ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択してください」ページが開きます。

QMF カタログのデータベース・オブジェクトの作成

QMF カタログ登録するための次のステップは、QMF カタログ用データベース・オブジェクトの作成に使用する SQL を確認および実行することです。

このタスクについて

プロセスのこのステップは、カタログ・オブジェクトがデータベース上で作成された場合、または既存のカタログ・オブジェクトを更新する必要がある場合のみ必要です。

必要なデータベース・オブジェクトの作成または更新に使用する SQL ステートメントを変更するには:

手順

1. カタログ表の作成または更新を選択した場合、「QMF カタログの登録」ウィザードの「オブジェクト・リスト・オプションを選択してください」ページが開きます。
2. ラジオ・グループから、オブジェクト・リスト・オプションを選択します。
 - すべてのオブジェクトを組み込む - このオプションを選択すると、ユーザーのアクセス権限に関わりなく、データベース内に保存されているすべてのオブジェクトが組み込まれます。

- ユーザーの 1 次または現行許可 ID によってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
 - 任意のユーザーの 1 次または現行許可 ID によってアクセス可能なオブジェクトのみを組み込む
3. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログの登録」ウィザードの「オブジェクトの作成」ページが開きます。
 4. 表の作成または更新に使用される SQL が、フィールドに表示されます。SQL ステートメントに行いたい変更を直接、フィールドに入力します。SQL ステートメントはどれも、パラメーターをカスタマイズするために変更できます。オブジェクトの名前は変更できません。複数のステートメントを区切るには、セミコロン (;) を使用します。変更することが本当に必要でない限り、この SQL は表示されたとおりに実行することをお勧めします。

注: RDBI.PROFILES 表または Q.PROFILES 表を SQL で指定することにより、RDBI.PROFILE_VIEW でこれらの表が使用されるように切り替えることができます。表を切り替える場合は、各 CREATOR の ENVIRONMENT 列に正しい値を指定する必要があります。

- 特定の CREATOR の既存の表の行で <NULL> を指定して、QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation の両方で作成者を有効にします。
 - 特定の作成者の既存の表の行をコピーして、TSO または CICS を WINDOWS で置き換えます。QMF for TSO/CICS と QMF for Workstation の両方で作成者が有効です。
5. 「次へ」をクリックします。このステップを実行すると、「デフォルト」という名前の QMF カタログが作成されます。ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページが開きます。

QMF カタログ表の保護とユーザー許可の付与

QMF カタログを登録するための次のステップは、QMF カタログ表を無許可のユーザーから保護するかどうかを指定すること、およびそれらの表にアクセスする許可を付与するユーザーを指定することです。

このタスクについて

QMF カタログ内のいくつかの表には、公開すべきではない機密情報が保管されています。QMF カタログ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャまたは SQL パッケージ (その QMF カタログをホストするデータベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用して QMF カタログ表にアクセスします。このため、QMF カタログのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

QMF カタログ表を保護するには:

手順

1. ウィザードの「QMF カタログ表の保護」ページを開きます。
2. QMF カタログ表に適用される保護のタイプを指定するには、「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループから以下のいずれかを選択します。

- 使用しない (**Never**): このオプションを選択すると、QMF カタログ表に保護を適用しないことを指定します。この方式では、QMF カタログ表が無許可で使用できる状態になります。保護がないので、QMF カタログ表には任意のユーザーが動的照会を使用してアクセスできます。データベース管理者がユーザーにデータベース上に存在する QMF カタログにアクセスする許可を付与すると、その許可は機密情報が保管されている QMF カタログ内の表を含む、QMF カタログ全体に拡張されます。
 - 可能な場合: このオプションを選択すると、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかがデータベースで使用可能な場合には、それを使用して QMF カタログ表が保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表へのアクセスは無保護の場合と同じになります。
 - 常時 (**Always**): このオプションを選択すると、QMF カタログ表が、ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのどちらかを使用して常に保護されることを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行できるユーザーを指定します。ストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージのセットが使用可能ではない場合、QMF カタログ表にアクセスする照会は失敗します。
3. 「可能な場合」または「常時」を「保護モードを使用して接続」ラジオ・グループで選択した場合、「保護」チェック・ボックスが使用可能になります。
 4. 「保護」チェック・ボックスを選択します。保護方式のオプションが使用可能になります。
 5. 以下のいずれかの保護方式を選択します。
 - 「ストアード・プロシージャ」を選択し、QMF カタログ表を保護するためにストアード・プロシージャを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が以下のデータベースにある場合に選択できます。
 - DB2 UDB LUW V9 以降
 - DB2 z/OS V9 以降
 - DB2 iSeries (IBM Toolbox JDBC ドライバーを使用してアクセスする場合)
 - 「静的 SQL パッケージ」を選択し、QMF カタログ表を保護するために静的 SQL パッケージを使用することを指定します。このオプションは、リポジトリ・ストレージ表が、JDBC 用 IBM DB2 Universal ドライバー、または製品に付属の直接 DRDA 接続 (後者は Db2 for z/OS 接続の場合にのみ選択可能) を使用して接続する Db2 データベース上にある場合にのみ選択できます。
 6. ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージの集合の識別に使用する名前を「集合 ID」フィールドに入力するか、ドロップダウン・リストから選択します。
 7. Db2 データベースを操作する場合は、オプションで所有者名を「所有者 ID」フィールドに入力できます。この所有者 ID により、SYSADM 権限なしのログインで操作を行うユーザーに管理者特権が付与されます。

8. 「作成」をクリックします。ストアード・プロシージャが作成されるか、静的 SQL パッケージがバインドされます。いずれかの処理が成功したことを通知するメッセージが出されます。「削除」を使用して、ストアード・プロシージャや静的パッケージの集合を除去することもできます。
9. このデータベースで QMF カタログ表のストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可をどのユーザーに付与するかを指定する必要があります。すべてのユーザーに許可を付与するには、「ユーザー ID」リストの「PUBLIC」を強調表示して、「付与」をクリックします。特定のユーザーに許可を付与するには、フィールドにユーザー ID を入力し、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「付与」をクリックします。選択されたユーザー ID にストアード・プロシージャまたは静的パッケージを実行するための許可が付与されたことを通知するメッセージが出されます。オプションとして、「ユーザー ID」リスト・ボックスにリストされたユーザーのストアード・プロシージャまたは SQL パッケージを実行する許可を取り消すことができます。1 人以上のユーザーの許可を取り消すには、1 つ以上のユーザー ID を強調表示して、「取り消し」をクリックします。ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージを実行する許可が、選択したユーザー ID から取り消されたことを通知するメッセージが出されます。
10. 「次へ」をクリックします。「QMF カタログの登録」ウィザードの「QMF カタログの選択」ページが開きます。

QMF カタログの選択

QMF カタログを登録する最後のステップは、QMF カタログを選択することです。

このタスクについて

データ・ソースのために QMF カタログを選択するには:

手順

1. 「QMF カタログの登録」ウィザードの「QMF カタログの選択」ページを開きます。
2. 「カタログ」リストから、構成している現行データ・ソースに使用させたいカタログを選択します。次のいずれかのタイプのカタログを選択できます。
 - デフォルト: これはメイン QMF カタログです。これは SQL ステートメントを実行してデータ・ソース上にオブジェクトを作成することの結果として、自動的に作成されます。デフォルト・カタログに保存されたすべてのオブジェクトは、共に保存されます。デフォルト・カタログは、QMF for TSO/CICS と 7.2 より前の QMF バージョンで使用可能な唯一のカタログです。
 - 拡張: 拡張カタログは、デフォルト・カタログの拡張です。データ・ソースがホスト可能なデフォルト QMF カタログは 1 つだけですが、拡張カタログの場合は複数をホスト可能です。拡張カタログは、いくつかのデータ・ソースが 1 つの QMF カタログを共有している場合に役立ちます。拡張カタログを使用しない場合、オブジェクトはすべてデフォルト QMF カタログに保存されます。拡張カタログによって、各データ・ソースはそれ自身の保存されたオブジェクトを特定のカタログ拡張に分離して入れることができます。

3. オプション: 現在のデータ・ソース上に新しい拡張カタログを作成するには、「追加」アイコンを選択します。「カタログの追加」ウィンドウが開きます。
4. オプション: 既存の拡張 QMF カatalogの名前または CCSID を編集するには、「編集」アイコンを選択します。「カタログの編集」ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、デフォルト QMF カatalogの CCSID を編集することもできます。
5. オプション: 現在のデータ・ソースから既存の拡張カタログを削除するには、「除去」アイコンを選択します。QMF for Workstation は、他のデータ・ソースが拡張カタログを使用するように構成されているかどうかにかかわらず、拡張カタログとその内容をすべて削除するため、拡張カタログを削除するときは注意が必要です。
6. オプション: 「リスト最新表示」を選択して、リスト・ボックス内の使用可能な拡張カタログのリストを最新表示します。
7. 現行データベースで作業するとき、ユーザーが常に現行 QMF カatalogを使用するようにするには、「現在のサーバーにアクセスするときはこのカタログ・サーバーの使用が必要」チェック・ボックスを選択します。
8. 「終了」をクリックします。

「メモリー使用状況」ビューの使用

「メモリー使用状況」ビューを使用して、QMF サーバー・メモリー使用状況をモニターおよび管理します。「メモリー使用状況」ビューには、アプリケーションで既使用されていないオブジェクトによって占有されているメモリーを回収するガーベッジ・コレクター機能が取り込まれています。ガーベッジ・コレクター機能を使用すると、アプリケーション・パフォーマンスを向上させることができます。

「メモリー使用状況」ビューにアクセスするには、「ビュー」 > 「メモリー使用状況」をクリックしてください。

メモリー使用状況情報は、5 秒ごとに更新されるテーブルに表示されます。残っている使用可能メモリーが 20% に満たない場合、対応するテーブル・セルのテキストが赤に変わります。表をリフレッシュするには、「最新表示」をクリックします。

ガーベッジ・コレクター機能を実行するには、「ガーベッジ・コレクターの実行」をクリックしてください。

監査システムの使用

QMF は、ユーザー・アクションに関する詳細情報を収集する監査システムを提供します。

監査システムは、以下のカテゴリーのユーザー・アクションをカバーします。

- さまざまなタイプのリポジトリへの接続および切断
- QMF クライアント・コンポーネントでのリポジトリ・エクスプローラー・オブジェクトの処理
- QMF クライアント・コンポーネントでのQMF オブジェクトの処理

- Web API の使用
- タスク・スケジューラーでのリポジトリ・オブジェクトの使用

監査レコードへのアクセス

このトピックでは、QMF の監査システム・レコードにアクセスする方法について説明します。

このタスクについて

監査レコードにアクセスする前に、監査システムが構成されていることを確認してください。監査システムの設定について詳しくは、13 ページの『監査システムの設定』を参照してください。

監査レコードにアクセスするには、以下のようになります。

手順

1. 以下の URL を使用して、リレーショナル・データ・ソースを作成します。
`jdbc:h2:{user.home}¥Application Data¥IBM¥QMF
Server¥Audit¥audit;AUTO_SERVER=TRUE.` {user.home} は、アプリケーションが実行されるときのアカウトによって異なります。
2. 「JDBC ドライバー」フィールドには、H2 データベースへのアクセスに使用する JDBC ドライバーのライブラリーを指定します。
3. データ・ソースを構成する場合、「ユーザー情報」ダイアログの「ユーザー ID とパスワードが必要」チェック・ボックスをクリアしてください。
4. 監査レコードは、作成したデータ・ソースに保管されている `AUDIT.AUDIT_VIEW` 表で見つかります。この表にアクセスするには、QMF クライアント・コンポーネントを使用してください。

注: リレーショナル・データ・ソースの作成について詳しくは、59 ページの『リレーショナル・データ・ソースの作成』を参照してください。

監査レコード表の読み取り

このトピックでは、監査システムによって収集されたすべての情報を表示する `AUDIT_VIEW` 表について説明します。

`AUDIT_VIEW` 表へのアクセス方法については、『監査レコードへのアクセス』トピックを参照してください。`AUDIT_VIEW` の内容は以下のとおりです。

表 5. `AUDIT_VIEW`

列名	説明
EVENT TIME	イベントの時刻を示します。
USER IP	アクションが実行されたシステムの IP アドレスを示します。
USER LOGIN	REPOSITORY NAME 列に示されたりポジトリに接続するユーザーの名前を示します。
REPOSITORY STORAGE	指定されたイベントが発生したりポジトリ・ストレージの URL を示します。

表 5. AUDIT_VIEW (続き)

REPOSITORY NAME	指定されたイベントが発生した、示されたりポジトリー・ストレージ内のリポジトリーの名前を示します。
OBJECT NAME	イベント・オブジェクトの名前を示します。
OBJECT PATH	イベント・オブジェクトのパスを示します。
OBJECT TYPE	イベント・オブジェクトのタイプを示します。
DATABASE	イベント・オブジェクトによって使用されるデータ・ソースを示します。
EXECUTION CONTEXT	イベント・オブジェクトを実行するオブジェクトへのパスを示します。例えば、プロシーチャーまたはビジュアル・ダッシュボードへのパスです。
DURATION	指定されたイベントの処理時間を示します。
CATEGORY	指定されたイベントが発生したサブシステムを示します。
EVENT TYPE	イベント・タイプを示します。
ERROR CODE	指定されたイベント中に発生したエラーのコードを示します。 エラー・メッセージの完全なリストは、「 <i>Installing and managing Db2 QMF for Workstation and Db2 QMF for WebSphere</i> 」資料の『 Appendix D. Messages 』に記載されています。
ROWS FETCHED	データベースに対する SQL 照会によって検索された行数を示します。
ROWS UPDATED	データベースに対する UPDATE または INSERT SQL 照会の影響を受けた行数を示します。
DATABASE LOGIN	DATABASE 列に示されたデータ・ソースに接続するユーザーのログインを示します。
SQL TEXT	実行された SQL 照会のテキストへのアクセスを提供します。SQL テキストを表示するには、「LOB ロケーター」をダブルクリックします。
QUERY TYPE	実行された照会のタイプを示します。
RESULT	指定されたイベントが成功したか失敗したかを示します。

AUDIT_VIEW 表に寄与する表の説明については、『補助監査レコード表』を参照してください。

補助監査レコード表

このトピックでは、AUDIT_VIEW 表の形成に役立つ補助監査レコード・テーブルの構造について説明します。

監査システムによって収集されたデータを保管する表へのアクセス方法については、『監査レコードへのアクセス』トピックを参照してください。AUDIT スキーマの下に、以下の補助監査レコード表があります。

- AUDIT_RECORDS は、AUDIT_VIEW 表の情報を提供する基本表です。この表の内容は以下のとおりです。

表 6. AUDIT_RECORDS

列名	説明
ID	レコード ID
EVENT TIME	イベントの時刻を示します。
USER IP	アクションが実行されたシステムの IP アドレスを示します。
USER LOGIN	REPOSITORY NAME 列に示されたりポジトリーに接続するユーザーの名前を示します。
REPOSITORY STORAGE	指定されたイベントが発生したりポジトリー・ストレージの URL を示します。
REPOSITORY NAME	指定されたイベントが発生した、示されたりポジトリー・ストレージ内のリポジトリーの名前を示します。
OBJECT NAME	イベント・オブジェクトの名前を示します。
OBJECT PATH	イベント・オブジェクトのパスを示します。
OBJECT TYPE	イベント・オブジェクトのタイプを示します。
DATABASE	イベント・オブジェクトによって使用されるデータ・ソースを示します。
EXECUTION CONTEXT	イベント・オブジェクトを実行するオブジェクトへのパスを示します。例えば、プロシーチャーまたはビジュアル・ダッシュボードへのパスです。
DURATION	指定されたイベントの処理時間を示します。
CATEGORY	EVENT_CATEGORY 表に従って、指定されたイベントが発生したサブシステムの ID を示します。
EVENT TYPE	EVENT_TYPES 表に従ってイベント・タイプ ID を示します。
ERROR CODE	指定されたイベント中に発生したエラーのコードを示します。 エラー・メッセージの完全なリストは、「 <i>Installing and managing Db2 QMF for Workstation and Db2 QMF for WebSphere</i> 」資料の『 Appendix D. Messages 』に記載されています。
ROWS FETCHED	データベースに対する SQL 照会によって検索された行数を示します。
ROWS UPDATED	データベースに対する UPDATE または INSERT SQL 照会の影響を受けた行数を示します。
DATABASE LOGIN	DATABASE 列に示されたデータ・ソースに接続するユーザーのログインを示します。
SQLTEXTID	AUDIT_RECORDS_SQL 表に従って、実行された SQL 照会のテキストを含む行の ID を示します。
QUERY TYPE	QUERY_TYPE 表に従って、実行された照会タイプの ID を示します。

表 6. *AUDIT_RECORDS* (続き)

RESULT	EVENT_RESULTS 表に従って、指定されたイベント結果の ID を示します。
--------	--

- AUDIT_RECORDS 表の **EVENT TYPE** 列のデータを提供する EVENT_TYPES 表は、以下の内容を含みます。

表 7. *EVENT_TYPES*

ID	NAME
1	READ
2	LOGOUT
3	DELETE
4	ENUMERATE
5	CREATE
6	UPDATE
7	RUN
8	LOGIN

- AUDIT_RECORDS 表の **CATEGORY** 列のデータを提供する EVENT_CATEGORIES 表は以下の内容を含みます。

表 8. *EVENT_CATEGORIES*

ID	NAME
1	REPOSITORY
2	SECURITY

- AUDIT_RECORDS 表の **RESULT** 列のデータを提供する EVENT_RESULTS 表は以下の内容を含みます。

表 9. *EVENT_RESULTS*

ID	NAME
1	SUCCESS
2	FAILED
3	ACCESS DENIED
4	CANCELED

- EVENT_OBJECT_TYPES 表は、AUDIT_RECORDS 表の「**OBJECT TYPE**」列のデータを提供し、以下の構造を持ちます。

表 10. *EVENT_OBJECT_TYPES* 表の構造

列名	説明
ID	オブジェクト・タイプ ID
NAME	オブジェクト・タイプ名

- QUERY_TYPES 表は、AUDIT_RECORDS 表の **QUERY TYPE** 列のデータを提供し、以下の内容を含みます。

表 11. QUERY TYPES

ID	NAME
1	RENAME
2	ALTER
3	CALL
4	SET
5	CREATE
6	REVOKE
7	REFRESH
8	LOCK
9	SELECT
10	COMMENT
11	DROP
12	ACQUIRE
13	DELETE
14	GRANT
15	EXPLAIN
16	LABEL
17	INSERT
18	UPDATE
19	UNKNOWN

- AUDIT_RECORDS_SQL 表は、AUDIT_RECORDS 表の「SQLTEXTID」列のデータを提供し、以下の構造を持ちます。

表 12. AUDIT_RECORDS_SQL 表の構造

列名	説明
ID	SQL ステートメント ID
SQLTEXT	LOB として提示される SQL ステートメント・テキスト

付録 A. アクセシビリティ

ソフトウェアのアクセシビリティ機能は、運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートします。

標準キーボード・ナビゲーション

「キーボード・ナビゲーション」とは、マウスの代わりにキーを使用して画面上のアイテム間を移動することです。

この移動は、一般にオペレーティング・システムまたはアプリケーションで指定された順序に従って行われます。 QMF アプリケーションでは、コントロール間を移動するための **TAB** キーと **SHIFT+TAB** キーや、アイテム間を上下左右に移動するための矢印キーなど、キーボード・ナビゲーションで一般的に使用されるキーがサポートされています。

オペレーティング・システムのアクセシビリティ

ほとんどのオペレーティング・システムには、身体に障害を持つユーザーがシステム全体に適用される設定をカスタマイズできる、一連のアクセシビリティ・オプションが用意されています。

QMF アプリケーションは、次の特徴を備えています。

- オペレーティング・システムの設定内容がそのまま使用される
- オペレーティング・システムに組み込まれているキーボード・アクセシビリティ機能に影響を与えない

支援技術製品

QMF アプリケーションは、スクリーン・リーダーや音声合成装置などのアクセシビリティ・テクノロジー製品をサポートしています。

各 QMF アプリケーション・インターフェースでは、照会結果にスクリーン・リーダーを使用するには、特別なナビゲーションを行う必要があります。詳しくは、『QMF サーバーでのナビゲーション』を参照してください。

QMF サーバーでのナビゲーション

以下の表は、キー・ストロークを使用してさまざまなタスクを実現する方法を示しています。

目的:	手順:
エレメント間でフォーカスを移動する	順方向に移動するには Tab を、逆方向に移動するには Shift+Tab を押します。
ボタンのクリックをエミュレートする	TAB キーを使用してボタン間を移動した後、 Space キーまたは Enter キーを押すとボタンがアクティブになります。

目的:	手順:
ダイアログ内で、デフォルト・アクションをアクティブにする	Enter キーを押します。
ダイアログ内で、アクションを取り消す	Esc キーを押します。
メインメニューにフォーカスを移動する	左側の Alt キーを押します。矢印キーを使用してメニュー・コマンドをナビゲートするか、またはメニュー項目の名前で下線が付いた文字に対応するキーを使用します。
コンテキスト・メニューを開く	拡張キーボードを使用している場合は、ポップアップ・メニュー・キーを押します。右の Ctrl キーを押します。メニュー・コマンドをナビゲートするには、矢印キーを使用します。
開いているビューを切り替える	Shift+Ctrl+F7 キーを押します。

付録 B. QMF オブジェクトのカスタマイズ

このトピックでは、QMF オブジェクトを作成するための SQL の例を示します。また、これらの SQL に加えることができる変更も示します。

生成されるサンプル SQL

この例では、必要なデータベース・オブジェクトを作成するために生成される SQL を示しています。この SQL は案として示しているものであり、編集してもかまいません。

SQL は編集可能です。例:

```
CREATE NODEGROUP RDBING1 ON NODE (0);

CREATE NODEGROUP RDBING2 ON NODE (0);

CREATE REGULAR TABLESPACE RDBITSSC
  IN NODEGROUP RDBING1
  MANAGED BY SYSTEM USING('RDBITSSC');

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE
(
  PRIMARY_ID CHAR(8) NOT NULL,
  SECONDARY_ID CHAR(8) NOT NULL
)
  IN RDBITSSC
  PARTITIONING KEY (SECONDARY_ID) USING HASHING
;
COMMENT ON TABLE RDBI.AUTHID_TABLE
  IS 'Secondary authorization ID table FOR RDBI';
```

iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルのリスト

「オブジェクトの作成」から、iSeries 用の物理ファイルおよび論理ファイルをリストすることができます

iSeries の物理ファイルおよび論理ファイルをリストするには、以下のステップを実行します。

1. 「オブジェクトの作成」ページで、次のステートメントまでスクロールダウンする。

```
CREATE VIEW RDBI.TABLE_VIEW2
```

2. この「CREATE」ステートメントの「WHERE」文節で、物理ファイルを表す「P」と論理ファイルを表す「L」を追加する。例:

```
WHERE A.TABLE_TYPE IN ('T','V','P','L')
```

3. 「OK」をクリックしてオブジェクトを作成する。

iSeries に対する EXECUTE 特権の付与

iSeries ライブラリーに対する EXECUTE 特権を付与するには、組み込みストアード・プロシージャ **QSYS.QCMDEXC()** を使用できます。

組み込みストアード・プロシージャ `QSYS.QCMDEXC()` がターゲット・サーバーにおいて登録済みである場合、QMF は実行時にその組み込みストアード・プロシージャを検出し、QMF がインストール時に SQL DDL スクリプトを生成するときは明示的にその組み込みストアード・プロシージャを呼び出し、静的な保護方式、ストアード・プロシージャ、または静的な SQL パッケージに基づいて静的なパッケージをバインドしたりストアード・プロシージャを作成したりするときは暗黙的にその組み込みストアード・プロシージャを呼び出します。

組み込みストアード・プロシージャ `QSYS.QCMDEXC()` がターゲット・サーバーにおいて登録されていない場合、QMF はその組み込みストアード・プロシージャをまったく呼び出しません。ただし、ライブラリー `RSBI`、`Q`、`RDBI` に加えて、QMF ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージが作成されたライブラリーには、適切な特権が付与されていない可能性があります。この場合、データベース・アドミニストレータは、iSeries ライブラリーに対して以下の特権付与命令を実行する必要があります。

- `GRTOBJAUT OBJ(RSBI) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(Q) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(RDBI) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`
- `GRTOBJAUT OBJ(QFWPKG) OBJTYPE(*LIB) USER(*PUBLIC) AUT(*EXECUTE);`

`QFWPKG` は、QMF ストアード・プロシージャのライブラリーまたは静的 SQL のパッケージです。

オブジェクト・ビュー

オブジェクト・ビューは、リストの作成方法を決定します。

オブジェクトが作成されると、以下のビューが作成されます。

- `RDBI.TABLE_VIEW`
- `Q.RAA_OBJECT_VIEW`

これらのビューを QMF のインストール時に変更することにより、リストの構築方法をカスタマイズできます。これらのビューは Db2 プラットフォームによって異なります。

拡張カタログ用のリストは、「オブジェクトの作成」オプションを選択したときに作成されたビューに基づいて構築されます。照会、フォーム、およびプロシージャの場合は、ビュー `Q.RAA_OBJECT_VIEW_X` がキーの役割を果たし、他のビューや表と対話します。

Q.RAA_OBJ_DIR_X

`Q.RAA_OBJ_DIR_X` で `catalog_ID` および所有者名を調べ、以下の条件に基づいて、各オブジェクトを表示するか、または表示しません。

次の質問のいずれかの答えが「はい」であれば、照会、プロシージャ、またはフォームがリストに表示されます。

1. オブジェクト所有者は現在のユーザー ID に一致しますか?

2. オブジェクト所有者は現在の SQLID に一致しますか?
3. オブジェクト所有者は、同じ catalog_ID を持つ現在のユーザー ID の 2 次許可 ID に一致しますか?
4. オブジェクトは共有されていますか? (制限されている = N)
5. ユーザーは、同じ catalog_ID を持つ SYSADM ですか?

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

このビューは、ユーザーまたはユーザーの 2 次許可 ID が SYSADM かどうかを判別します。

RDBI.ADMIN_VIEW および RDBI.CATALOG_DIR_X で、次のものを検査します。

- 現行のユーザー ID または SQLID
- RDBI.CATALOG_DIR_X で同じ catalog_ID を持つ現在のユーザー ID の 2 次許可 ID

RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X

このビューは、基本表 RDBI.AUTHID_VIEW_X から、1 次 ID が現行ユーザーの ID であるすべての行を検索します。また、現行ユーザーの 2 次許可 ID をすべてリストします。

RDBLADMIN_VIEW

このビューは、基本表 SYSIBM.SYSUSERAUTH から GRANTEE のリストを取得します。SYSADMAUTH に対する G または Y を付与されている GRANTEE を取り出します。

RDBI.CATALOG_DIR_X

この表には、別個のカタログの内部 ID およびそのカタログの名前のすべての行が入っています。

RDBI_AUTHID_VIEW_X

この表には、基本表 RDBI.AUTHID_TABLE_X のすべての行がコピーされています。

SYSIBM.SYSUSERAUTH

この表には SYSUSERAUTH の情報が含まれています。

RDBI_AUTH_TABLE_X

1 次および 2 次許可 ID をリストする基本表。この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。QMF for Workstation は、管理者が設計したカスタム Db2 表にストアされているものを除いて、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

Q.RAA_OBJECT_VIEW_X

照会、フォーム、およびプロシージャーの場合は、ビュー Q.RAA_OBJECT_VIEW_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と対話します。

注: このビューは、オブジェクト・リスト・オプション用です。

"Include only those objects that any of the user's primary or secondary authorization IDs are authorized to access. This option requires the most database resources when producing lists."

以下の SQL ステートメントでこのビューが作成されます。

```
CREATE VIEW Q.RAA_OBJECT_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    OWNER, NAME, TYPE, SUBTYPE, OBJECTLEVEL, RESTRICTED, MODEL,
    REMARKS
    DELETED_BY_USER, DELETED_BY_SQLID, DELETED_TIMESTAMP
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID,
       A.OWNER, A.NAME, A.TYPE, A.SUBTYPE,
       A.OBJECTLEVEL, A.RESTRICTED, A.MODEL,
       B.REMARKS,
       A.DELETED_BY_USER, A.DELETED_BY_SQLID, A.DELETED_TIMESTAMP
FROM Q.RAA_OBJ_DIR_X A, Q.RAA_OBJ_REM_X B
WHERE (A.CATALOG_ID = B.CATALOG_ID AND
       A.OWNER = B.OWNER AND
       A.NAME = B.NAME AND
       A.DELETED_TIMESTAMP IS NULL AND B.DELETED_TIMESTAMP IS NULL)
AND (A.RESTRICTED = 'N'
     OR A.OWNER IN (USER, CURRENT SQLID)
     OR A.OWNER IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                    FROM RDBI_USER_AUTHID_VIEW_X C
                    WHERE C.CATALOG_ID = A.CATALOG_ID)
     OR EXISTS (SELECT D.AUTHID
                FROM RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X D
                WHERE D.CATALOG_ID = A.CATALOG_ID))
```

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 表を作成します。

```
CREATE VIEW RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    "AUTHID"
)
AS
SELECT B.ID, A."AUTHID"
FROM RDBI.ADMIN_VIEW A., RDBI.CATALOG_DIR_X B
WHERE A."AUTHID" IN (USER, CURRENT SQLID)
     OR A."AUTHID" IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                      FROM RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X C
                      WHERE B.ID = C.CATALOG_ID)
```

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 表を作成します。


```

CREATE VIEW RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_VIEW_X A
WHERE A.PRIMARY_ID = USER

```

RDBI.ADMIN_VIEW

これらの SQL ステートメントは、RDBI.ADMIN_VIEW 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.ADMIN_VIEW
(
    "AUTHID"
)
AS
SELECT A.GRANTEE
FROM SYSIBM.SYSUSERAUTH A
WHERE A.SYSADMAUTH IN ('Y', 'G')

```

RDBI.CATALOG_DIR_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.CATALOG_DIR_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.CATALOG_DIR_X
(
    ID SMALLINT NOT NULL
    NAME VARCHAR (128) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX1
CCSID EBCDIC

```

RDBI.AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_TABLE_X A

```

RDBI.AUTHID_TABLE_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_TABLE_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE_X
(
    CATALOG_ID SMALL INIT NOT NULL,
    PRIMARY_ID CHAR (8) NOT NULL,
    SECONDARY_ID CHAR (8) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX
CCSID EBCDIC

```

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。 QMF for Workstation は、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

他の表の場合、ビュー `RDBI.TABLE_VIEW2_X` がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.TABLE_VIEW2_X

`RDBI.TABLE_VIEW2_X` は、表のリストを構成します。このビューは、まず基本表 `SYSIBM.SYSTABAUTH` にリストされている表を検索します。

`SYSIBM.SYSTABAUTH` 中のすべての表は、定義により、何らかのタイプの権限が最低 1 人のユーザーにすでに付与されています。

`SYSIBM.SYSTABAUTH` では、次の質問のいずれかの答えが「はい」になる必要があります。

1. GRANTEE は現行のユーザーですか?
2. GRANTEE は現行の SQLID ですか?
3. GRANTEE は PUBLIC ですか?
4. GRANTEE は PUBLIC* ですか?
5. GRANTEE は同じ catalog_ID を持つ現在の USER の 2 次許可 ID ですか?
6. ユーザーは、同じ catalog_ID を持つ SYSADM ですか?

表には、次の GRANTEE タイプのいずれかがなければなりません。

- ' '
- U
- G

表の GRANTEE には、次の 4 つのカテゴリのいずれかに対する Y または G 権限がなければなりません。

- DELETEAUTH
- INSERTAUTH
- SELECTAUTH
- UPDATEAUTH

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

このビューは、ユーザーまたはユーザーの 2 次ユーザー ID が SYSADM かどうかを判別します。

`RDBI.ADMIN_VIEW` および `RDBI.CATALOG_DIR_X` で、次のものを検査します。

- 現行のユーザー ID。
- 同じ catalog_ID を持つ現行のユーザーの 2 次ユーザー ID。

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

このビューは、基本表 RDBI.AUTHID_VIEW_X から、1 次 ID が現行ユーザーの ID であるすべての行を検索します。また、現行ユーザーの 2 次許可 ID をすべてリストします。

RDBI.ADMIN_VIEW

このビューは、基本表 SYSIBM.SYSUSERAUTH から GRANTEE のリストを検索します。SYSADMAUTH に対する G または Y を付与されている GRANTEE を取り出します。

注: iSeries データベースでセットアップしている場合、RDBI.ADMIN_VIEW は RDBI.ADMIN_TABLE を参照します。

RDBI.AUTHID_VIEW_X

このビューには、基本表 RDBI.AUTHID_TABLE_X のすべての行がコピーされています。

RDBI.AUTHID_TABLE_X

カタログに登録された ID、1 次許可 ID、および 2 次許可 ID をリストする基本表。

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。QMF for Workstation は、管理者が設計したカスタム Db2 表にストアされているものを除いて、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

また、他の表の場合、ビュー RDBI.TABLE_VIEW2_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.ADMIN_TABLE

iSeries データベースにより排他的に使用される基本表で、管理特権を持つユーザー ID をリストします。

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。この表は、Db2 データベースの基本 RDBI.AUTHID_TABLE を置き換えます。

また、表では、ビュー RDBI.USER_ADMIN_VIEW および RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X がキーの役割を果たし、以下に示すとおり、他のビューや表と相互作用します。

RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 表を作成します。

```
CREATE VIEW RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    "AUTHID"
```

```

)
AS
SELECT B.ID, A."AUTHID"
FROM RDBI.ADMIN_VIEW A, RDBI.CATALOG_DIR_X B
WHERE A."AUTHID" IN (USER, CURRENT SQLID)
OR A."AUTHID" IN (SELECT C.SECONDARY_ID
                  FROM RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X C
                  WHERE B.ID = C.CATALOG_ID)

```

RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_VIEW_X A
WHERE A.PRIMARY_ID = USER

```

RDBL.ADMIN_VIEW

これらの SQL ステートメントは、RDBL.ADMIN_VIEW 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.ADMIN_VIEW
(
    "AUTHID"
)
AS
SELECT A.GRANTEE
FROM SYSIBM.SYSUSERAUTH A
WHERE A.SYSADMAUTH IN('Y', 'G')

```

RDBI.AUTHID_VIEW_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_VIEW_X 表を作成します。

```

CREATE VIEW RDBI.AUTHID_VIEW_X
(
    CATALOG_ID,
    PRIMARY_ID,
    SECONDARY_ID
)
AS
SELECT A.CATALOG_ID, A.PRIMARY_ID, A.SECONDARY_ID
FROM RDBI.AUTHID_TABLE_X A

```

RDBI.AUTHID_TABLE_X

これらの SQL ステートメントは、RDBI.AUTHID_TABLE_X 表を作成します。

```

CREATE TABLE RDBI.AUTHID_TABLE_X
(
    CATALOG_ID SMALLINT NOT NULL,
    PRIMARY_ID CHAR (8) NOT NULL,
    SECONDARY_ID CHAR (8) NOT NULL
)
IN RDBIDBX.RDBITSX2
CCSID EBCDIC

```

注: この表には、システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。 QMF for Workstation は、インストール中またはインストール後に、既存の RACF/Db2 の関係にアクセスすることはできません。

RDBI.ADMIN_TABLE

これらの SQL ステートメントは、iSeries サポート用の RDBI.ADMIN_TABLE 表を作成します。

QMF ロング・ネーム・カタログ・サポート:

```
CREATE TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
(
  "AUTHID" VARCHAR(128) NOT NULL
)
;
COMMENT ON TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
  IS 'Administrator authorization ID table for RDBI';
COMMENT ON COLUMN "RDBI"."ADMIN_TABLE"."AUTHID"
  IS 'Authorization ID (user ID)';
```

QMF ショート・ネーム・カタログ・サポート: 唯一の違いは、VARCHAR(128) が VARCHAR(8) に変わることです。

```
CREATE TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
(
  "AUTHID" VARCHAR(8) NOT NULL
)
;
COMMENT ON TABLE "RDBI"."ADMIN_TABLE"
  IS 'Administrator authorization ID table for RDBI';
COMMENT ON COLUMN "RDBI"."ADMIN_TABLE"."AUTHID"
  IS 'Authorization ID (user ID)';
```

注: この表には、iSeries システム管理者またはデータベース管理者が内容を取り込む必要があります。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様自身の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Java[™] およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用条件: IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利: ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの

Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』(<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

用語集

用語集には、製品で使用される用語の要旨が記されています。

アクセシビリティ (accessibility). 運動障害や視覚障害など身体に障害を持つユーザーがコンピューターを快適に使用できるようにサポートする機能です。

コマンド・バー (command bar). QMF for Workstation インターフェースからプロシージャー・コマンドを直接実行することができるインターフェースです。

データ・ソース (data source). データ・ソースを使用すると、元の表の内容を変更せずにユーザーが編集および操作できる仮想表を作成できます。仮想データ・ソースは、アドミニストレーターが定義した仮想データ・ソースと物理表およびビューが含まれる基礎データ・ソースの間にメタデータ層を介在させることによって機能します。

式デザイナー (Expression Designer). 式デザイナーを使用して、選択したオブジェクトに関連付けるプロパティ値を指定できます。式デザイナーは、オブジェクトのプロパティを指定する代替方法です。オブジェクトに指定可能なプロパティごとに、プロパティ値のフォーマットに利用できるテンプレートが提供されます。さらに、プロパティ値の処理や表示に使用できるスペースが増えます (式を使用した場合、このスペースは大幅に大きくなります)。

ファイル・ベース・リポジトリ (file-based repositories). QMF for Workstation を使用している場合、ファイル・リポジトリ接続を作成することにより、ローカルまたはネットワーク・ドライブ上に格納されたファイル・ベース・リポジトリに接続できるようにするための情報を設定できます。ファイル接続は、旧ファイル・ベース・リポジトリに対してのみ作成できます。

フォーマット・オプション (formatting options). 照会結果をどのようにエディター・ウィンドウに表示するかをカスタマイズすることができます。列の列見出しおよびセルのそれぞれにさまざまなフォント、色、およびテキスト配置を指定することができます。列およびセルのフォーマット設定が条件式の結果に基づいて適用されるように指定することもできます。フォーマット・オプションは、列全体、個々のセル、列見出し、および要約セルに適用できます。

グローバル変数 (global variables). グローバル変数は、QMF for Workstation/WebSphere の現行セッションがアクティブである期間中、アクティブであり続ける変数です。これは、オブジェクト (照会、プロシージャー、書式) の実行中にのみアクティブである置換変数とは対照的です。グローバル変数を使用するオブジェクトの場合、グローバル変数に現在定義されている値が使用されます。

JDBC ドライバー (JDBC drivers). QMF for Workstation/WebSphere は JDBC を使用してすべてのデータベース・リポジトリおよびデータ・ソースに接続します。QMF for Workstation/WebSphere は JDBC ドライバーを含みません。QMF for Workstation/WebSphere がリポジトリおよびデータ・ソースに接続するために使用する JDBC ドライバーの場所が定義されていなければなりません。QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレーターは、アプリケーション・インターフェースの各インスタンスが JDBC ドライバーを見つけることができる場所を特定する必要があります。

タスク・スケジューラー (task scheduler). QMF for Workstation/WebSphere には、プロシージャー、照会、即時報告書、およびビジュアル報告書を定期的に、繰り返し、または特定の日に実行するようにスケジュールに入れる機能があります。オブジェクトは、ローカル・スケジューラーまたは QMF for WebSphere スケジューラーを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。

LOB データ (LOB data). ラージ・オブジェクト (LOB) とは、Db2 for z/OS および Db2 for Linux, UNIX®, and Windows のデータ・タイプであり、テキスト、マルチメディア、画像、ビデオ、写真、音声などの非従来型データや、あらゆる大規模データ・ファイルをデータベース表内に格納するためのデータ・タイプです。LOB データを検索または保存する際には、大量のリソースが消費されることがあります。

QMF カタログ (QMF catalogs). 保存されたオブジェクト (照会、プロシージャー、書式)、ユーザー・リソース限界とプロファイル、報告書、およびその他の各種設定と情報が含まれているデータベース表のセットです。QMF カタログは、Db2 データベースをホストするデータベース・サーバー上にあります。

リソース限界 (**resource limits**). QMF for Workstation/WebSphere リソース限界はデータ・ソース・アクセスとリソース使用量を制御します。データ・ソースにアクセスするときにユーザー ID に有効なリソース限界を表示するには、データ・ソースに接続している必要があります。

スケジュール・タスク (**scheduled tasks**). プロシージャ、照会、即時報告書、またはビジュアル報告書は、ローカル・スケジューラまたは QMF for WebSphere スケジューラを使用して、任意の時点で実行するようにスケジュールできます。別の時に実行するようにスケジュールされているオブジェクトは、スケジュール済みタスクと呼ばれます。

共有リポジトリ (**shared repositories**). 共有リポジトリはデータベース上に存在し、多数のユーザーがそれを共有できます。QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレータだけが、共有リポジトリを作成できます。

静的 SQL パッケージ (**static SQL packages**). リポジトリ・ストレージ内のいくつかの表は、QMF によって処理情報を格納するために使用されます。これらの表の中には、許可表などのように、機密性の高い情報が保管されているものもあります。デフォルトでは、すべてのユーザーがこれらのリポジトリ・ストレージ表にアクセスし、表に変更を加えられるようになっています。リポジトリ・ストレージ表には、表を保護するオプションがあります。保護モードでは、ストアード・プロシージャや静的 SQL パッケージ (そのリポジトリ・ストレージのホスト・データベースが何をサポートしているかによって異なる) の集合を使用してリポジトリ・ストレージ表にアクセスします。このため、リポジトリ・ストレージのユーザーにストアード・プロシージャまたは静的 SQL パッケージを実行するための許可を付与する必要があります。

ユーザー設定 (**user preferences**). 「設定」ダイアログは、QMF for Workstation/WebSphere アプリケーション・インターフェース現行セッションの特定の機能に適用されるユーザー設定を行うために使用します。「設定」ダイアログは 2 つのペインで構成されています。左のペインには設定を編成する階層ツリーが表示され、右のペインには実際の設定値のページが表示されます。

ビュー (**views**). QMF for Workstation/WebSphere ビューはエディターをサポートしており、代替表示を提供し、またウィンドウにある情報のナビゲート方法を提供します。それぞれのビューは、メイン・ワークステーション・ウィンドウ内のペインとして表示されます。QMF

for Workstation/WebSphere の各パースペクティブには、特定機能の実行に通常使用するビューが最初に表示されます。

ワークスペース (**workspaces**). アクセスできるすべてのデータ・ソースおよびオブジェクトは、QMF for Workstation/WebSphere アドミニストレータによって定義済みの 1 つ以上のワークスペースに入れられます。アクセスできる各ワークスペースが、「ワークスペース」ビューにリストされます。「ワークスペース」ビューからは、多くの照会機能と報告書作成機能を実行できます。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクション

- アクション・グループ 123, 124
- オブジェクトの実行 109
 - 照会のエクスポート 111
 - 照会をメールにエクスポート 112
 - 即時報告書のエクスポート 116
 - 即時報告書をメールにエクスポート 115
- ビジュアル報告書のエクスポート 119
- ビジュアル報告書をメールにエクスポート 117
- リソースの操作 120
 - コピー 120
 - メールの送信 121

アクセシビリティ

- オペレーティング・システム 145
- キーボード・ナビゲーション 145
- 支援技術 145
- QMF サーバーでのナビゲーション 145

アクセラレーター

アプリケーション

- アクセス 7
- 始動 7
- 新規バージョンのインストール 4
- WebSphere Application Server へのデプロイ 4

一般設定

イテレーター

インストール

オブジェクト

- カスタマイズ 147

オブジェクト・トラッキング・リソース限界

オブジェクト・ビュー

- Q.RAA_OBJECT_VIEW_X 150
- Q.RAA_OBJ_DIR_X 148
- RDBI.ADMIN_VIEW 151, 153
- RDBI.AUTHID_TABLE_X 151, 153, 154
- RDBI.AUTHID_VIEW_X 151, 153, 154

オブジェクト・ビュー (続き)

- RDBI.CATALOG_DIR_X 149, 151
- RDBI.TABLE_VIEW2_X 152
- RDBI.USER_ADMIN_VIEW_X 149, 150, 152, 153
- RDBI.USER_AUTHID_VIEW_X 153, 154
- RDBI.AUTHID_VIEW_X 149
- RDBI.AUTH_TABLE_X 150
- RDBLADMIN_VIEW 149
- RDBLUSER.USER_AUTHID_VIEW_X 149
- RDBL.ADMIN_VIEW 154
- SYSIBM.SYSUSERAUTH 149
- オブジェクト・リスト・リソース限界 80
- オプション・リソース限界 71

[カ行]

概説

仮想データ・ソース

- 設定 40

表

加速リソース限界

監査

監査システム

- 監査データベース 13, 139, 140

監査システム 138

管理者権限

キャッシュ

キャッシュ設定

キャッシュ・リソース限界

キャッシング

共有プロンプト

共有リポジトリの作成

グローバル変数

- システム 29

DSQAO

DSQCP

DSQDC

DSQEC

DSQQW

限界リソース限界

[サ行]

サーバー・サイド・ファイル・システム

- 12

設定

「サービス」ビューの使用

サービス情報

作業

- データ・ソース 58

サポート情報

システム要件

- QMF サーバー 1

失敗したタスクに関する E メール通知

- 129

集合 ID

出力設定

「照会のエクスポート」操作

「照会をメールにエクスポート」操作

スケジュール・タスク

- アクション 109, 120, 123, 124, 126, 127

- アクション・グループ 123, 124, 126, 127

オブジェクトの実行

スケジュール・タスクのコピー

ユーザー情報の編集

リソースの操作

スケジュール・タスクのインポート

スケジュール・タスクのエクスポート

スケジュール・タスクのエクスポートおよびインポート

スケジュール・タスクの作成

静的 SQL パッケージ

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

静的 SQL パッケージ 49

「即時報告書をメールにエクスポート」操作 115

[タ行]

タイムアウトリソース限界 69

タスクのスケジュール 129

注意

特記事項 157

データの保存リソース限界 73

データ・ソース

ログイン・マッピング 101, 102, 103

データ・ソース・リソース限界 63

デフォルトのリソース限界グループ 65

同時データベース接続 51

最大数の設定 51

ドライバー・クラス名 30

[ナ行]

長い名前のオブジェクト 93

長い名前のサーバー 93

[ハ行]

バインド・リソース限界 74

「ビジュアル報告書のエクスポート」操作 119

「ビジュアル報告書をメールにエクスポート」操作 117

表 48

保護および許可の付与 49

フォント

設定 16

[マ行]

マルチディメンション・データ・ソース 100

短い名前のオブジェクト 93

「メモリー使用状況」ビューの使用 138

[ヤ行]

ユーザーおよびグループ

ワークスペースおよびデータ・ソース 107

ユーザーおよびユーザー・グループの管理 106

[ラ行]

リソース限界

オブジェクト・トラッキング 75

リソース限界 (続き)

オブジェクト・リスト (object list) 80

オプション 71

加速 81

キャッシュ 80

グループ 65

ユーザーの割り当て 82

グループ・スケジュールの値 66

メイン 68

限界 69

タイムアウト 69

データの保存 73

データ・ソース 63

バインド 74

リポジトリ 83

ユーザー割り当ての管理 84

レポート・センター 78

LOB オプション 77

SQL 動詞 70

リソース限界グループ 64

リソースの操作

コピー 120

メールの送信 121

リフレッシュ 99

リポジトリ

データ・ソース

仮想 97

マルチディメンション 100

リレーショナル 59

Hive 96

JavaScript 98

「リポジトリ」ビューの使用 43

リポジトリ表の作成 51

リポジトリ・ストレージ

共有 45

JDBC 接続 46

リポジトリ・ユーザーの作成 106

リポジトリ・ユーザー・グループの作成 107

リレーショナル・データ・ソース 59

追加パラメーター 85

プラグインを使用可能にする 61

リソース限界プロバイダー 62

QMF カタログ 86

オブジェクト 87

拡張 94

拡張プロパティ 95

カタログの選択 93, 137

データベース・オブジェクト 89

保護および許可の付与 90

リンク

IBM 以外の Web サイト 159

レポート・センター・リソース限界 78

ログイン・マッピング 101, 102, 103

ログ設定 31

[ワ行]

ワークスペース 105

新規ユーザー・ワークスペースの作成 106

D

DRDA 54, 55

DSQAO 22

DSQCP 29

DSQDC 28

DSQEC 24

DSQQW 17

E

E メール設定 14, 15

H

Hive データ・ソース 96

HTML テーブル 114

I

iSeries

物理ファイルのリスト 147

論理ファイルのリスト 147

EXECUTE 特権の付与 148

J

JARS 30

JavaScript データ・ソース 98, 99

JDBC 設定 30

JDBC ドライバー

アクセスの構成 6

エクスポートおよびインポート 40

JDBC ライブラリー 30

L

LOB オプション・リソース限界 77

Q

QMF Data Service データ・ソース 95
作成 95

QMF カタログ 86

オブジェクト 87, 132

拡張 94

カタログの選択 93, 137

データベース・オブジェクト 89, 134

QMF カタログ (続き)

保護および許可の付与 90, 135

リソース限界のセキュリティー 65

「QMF カタログ」ビューの使用 131

QMF カタログの登録 131

QMF サーバーシステム要件 1

QMF サーバーの使用 11

QMF サーバーをスタンドアロン・アプリケーションとしてインストール 3

QMF サーバー・レジストリー設定 39

qmf.instance.area 7

qmf.instance.area.global 7

qmf.instance.area.shared 7

qmf.use.session.timeout 7

S

SMTP 設定 14

SQL

生成されるサンプル 147

SQL 動詞リソース限界 70

U

URL テンプレート 30

W

WebSphere 管理コンソール

オープン 4



プログラム番号: 5650-DB2
5615-DB2
5697-QM2

Printed in Japan

GC43-4723-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21